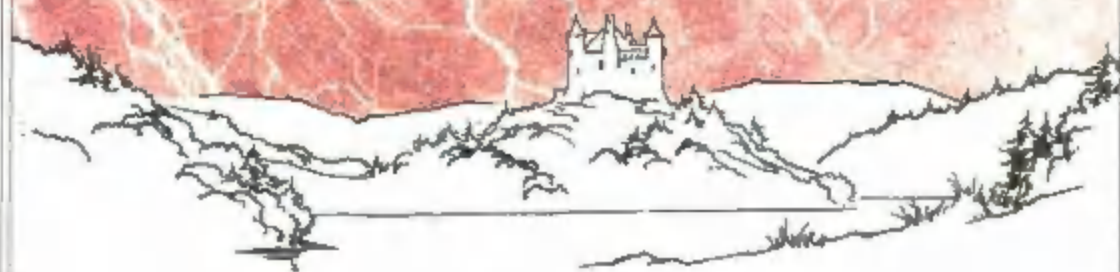
ジャンヌ III
安彦良和
Jeanne
ikazu
asuhiko
谷

ジャンヌ | III | 安彦良和

Jeanne - III | Yoshikazu Yasuhiko

原著 | 大谷暢順

NHK出版

ジャンヌ|III|目次

前巻までのあらすじ

エミールはロレーヌ老公の愛妾の娘だった。本名はエミリーである。彼女が男子として育てられたのは養父ボードリクールの配慮によるものだった。

「彼」エミールは〝奇蹟の少女〟ジャンヌ・ダルクと運命の糸で結ばれていた。ボードリクールは、ジャンヌを、当時王太子だったシャルルの下へ送り出した当人だったし、エミール自身も幼い頃ジャンヌが旅立った城内で、「フランスへ」向かうジャンヌの幻影を見ていたからだ。

＊　＊　＊

ジャンヌがルーアンで火焙りになってから既に九年の月日が経ち、英仏百年戦争は終局を迎えつつあった。しかし、フランス国内は未だ混乱に満ちていた。弱気な国王シャルルから諸侯は離反しつつあり、その情況を利して王太子ルイが叛乱を起こしたからだ。外敵イギリスに加え、王太子派＝プラグリーとも戦わなければならない国王派は苦境に立っていた。国王派の総帥リッシュモン大元帥の檄に応じ、養父ボードリクールに代わってエミールは出征する。その途上、ドンレミイ村のジャンヌの生家に立ち寄った彼は、再びジャンヌの幻に会う。ジャンヌは、エミールに言う。

「国王様を護って、わたしがしたように、どんなことがあっても」

＊　＊　＊

国王派の町トゥールでエミールはシャルルに出会う。しかし、ルイの影に怯える王の姿と貧弱な陣容は不安を誘う。軍資金の確保を急務と見て取った彼は、富裕な大貴族ジル・ド・レーの許へ使いに立つことを申し出る。

＊　＊　＊

ジャンヌの輝かしき戦友ジルは、しかし、今や変わり果てていた。酒と美食の放蕩にふけっているうえに、歪んだ性欲に身を任せていたのだ。ジャンヌの無惨な刑死によって理念を見失った彼は、もはや自分を律しきれなくなっていた。不気味なその居城の地下室は無垢な少年達の血で染められいた。

第1章 AGNÈS アニエス

* * *

突然現れた、ジャンヌと見紛うエミールの姿にジルは動揺する。が、その精神をいまや支配しきっている降魔術師のプレラーティは、生贄としてエミールを要求する。罠にかかり厩舎に追いつめられるエミール。その時、邪悪な追手達の前にジャンヌの幻が気高く立ちふさがる。プレラーティは逃亡し、ジルは良心に目覚める。

* * *

エミールの膝を枕にジルは昔日を想う。短くも輝かしいジャンヌとの理想に燃えた日々は、醜い現在よりもあまりにも美しい。赤子になってやり直せたら、と虚しく願う彼は、藁褥の上で外の雨音を聞きながら嘆息する。

「雨のベツレヘムだ・・・」

* * *

ジルの出資によって軍備は充実する。大元帥リッシュモンはエミールの功を認めて自分の幕下につくことを命じる。

反撃に打って出る国王派軍。王太子ルイとの決戦の時は目前であった。

シャルル国王派と
ルイ王太子派との間の戦闘は
トゥール近郊で
開始されました。

シノン

シノン――！
あああ
これがシノン城！

ジャンヌがめざしたお城――!!

あれは黒っぽいフードつきの上衣を着てな
まるで農夫のような身なりでここへ来おった

髪は短くて
口のききようなども活発で
どう見ても男子のようであったな…

おまえによく似ていた
小姓姿がよう似合った…

まことに
愛いやつで
あったのに
のォ……

……

ロレーヌから来た
神がかりの女の
噂はすぐに
わしの耳に入った
わしは常以上に
気弱になって
おったから
ワラにでも
すがる気分で
その女に
会うて
みようと
思った

ここだ
この部屋に
あれは
やって来た

大勢の者が
居るなかを

わき目も
ふらず

わしの所へ
歩み寄って
来たのだよ
ジャンヌは

わしよりも
立派な身なりの
者がその時
その場には
いっぱい居った
のに……

その小さな百姓娘は
見も知らぬはずのわしの前に
ひざまずき
わしの手をとって
そして言ったのだ
〝神のお告げによって
参りました
あなたはフランスの
真の世継です〟と

ばさっ!
!
旗をとらす!
以後 これを
使え!
王冠と剣と
百合!
少女・ジャンヌの家
に与えたものと
同じ紋章だ

……

同じロレーヌの
出なら他人でも
あるまい

ダルクの家の者に
なり代ってわしに
尽くせ!

ジャンヌの旗には
神通力があるぞ
な
よかろう
……

ミュッ!!
モン!!
おい
まて
リッシュモーン!!

……

……

リッシュモン!
シノンに
いつまで居る
つもりだ?
トゥールでは
戦まで始まったと
いうではないか
余は
心配で
ならぬ!

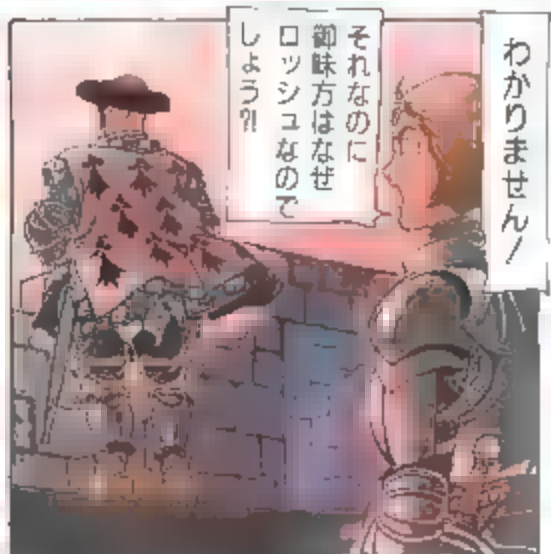
ルイももう わが方の動きに 気付いていよう
かくなる うえは
一刻も早く ロッシュに!

まごまごしていて ルイに先を越され たらと思うと
心配で ならぬ!

あれが アニエスに なにをするかと 考えただけで
あああ アニエス……

アニエス
アニエス
可哀相な アニエス……

ロッシュへ向かわ れるというのは
本当で ございますか?!
本当だ

なぜ
ロッシュ なのです ?!
王太子派の軍に 侵されそうな町々は いくつもあります!
トゥールも早晩 危機に陥るかも しれません

わかりません!
それなのに 御味方はなぜ ロッシュなので しょう?!

王陛下の 御側室が おられるから なのですか?!

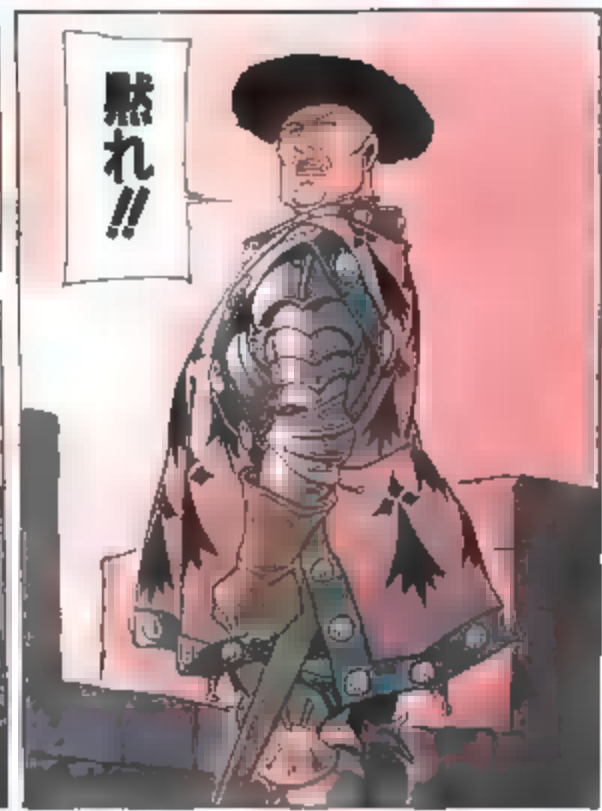
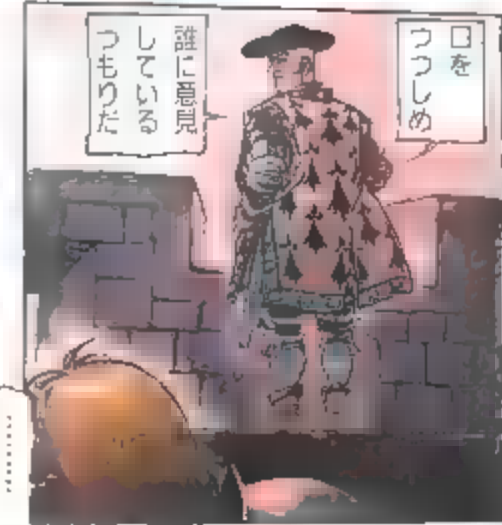
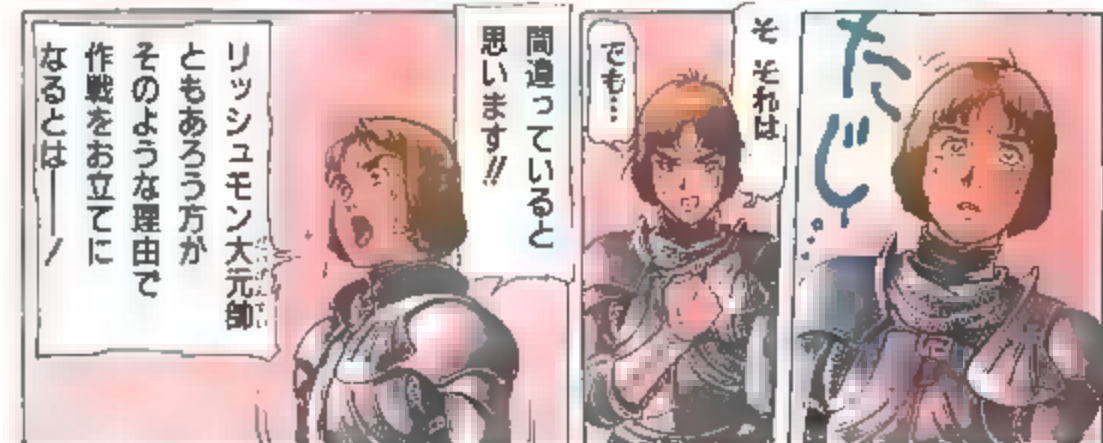
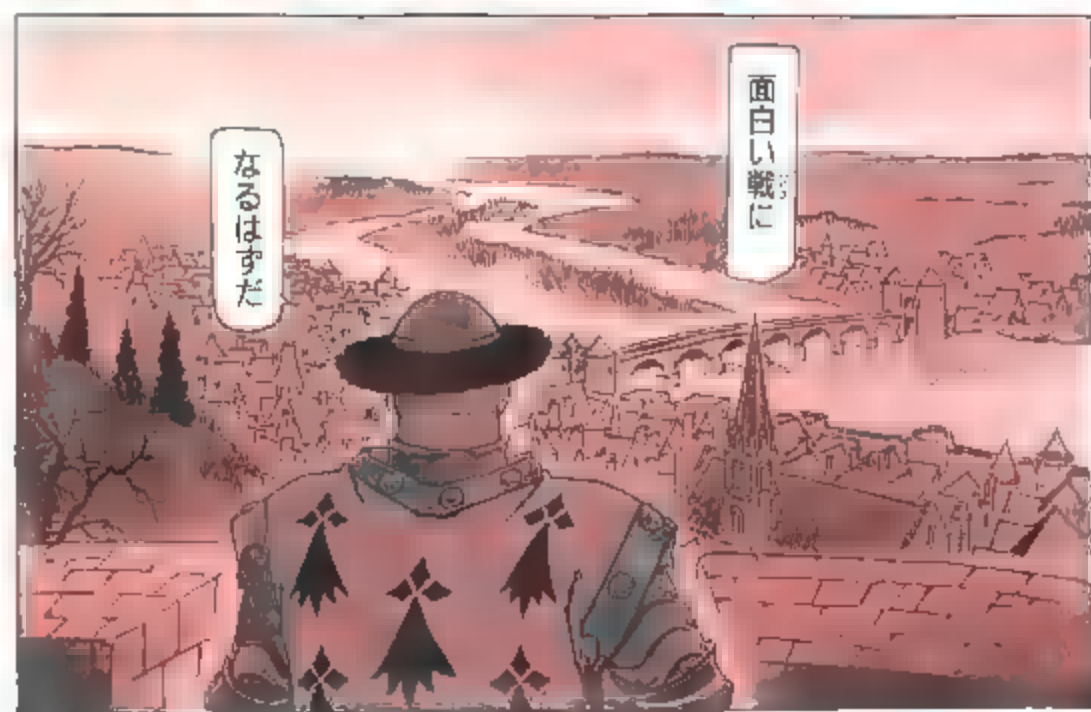
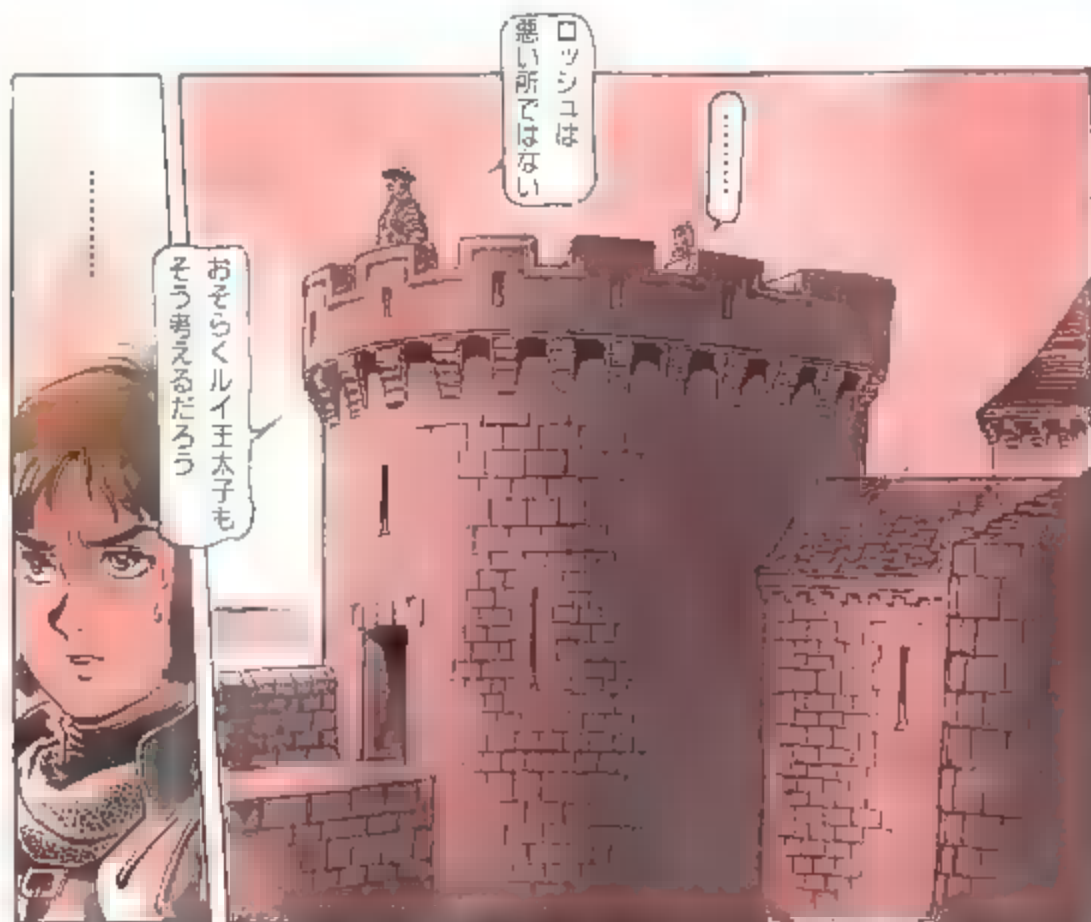
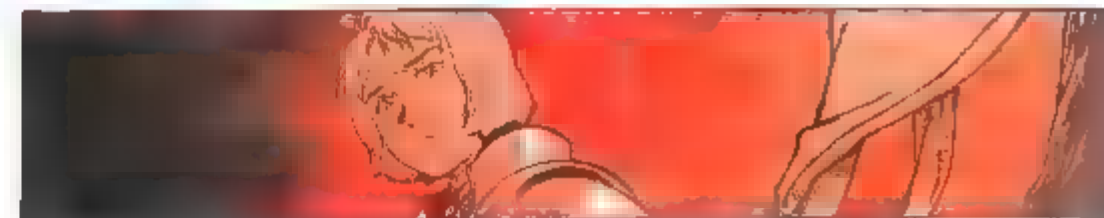
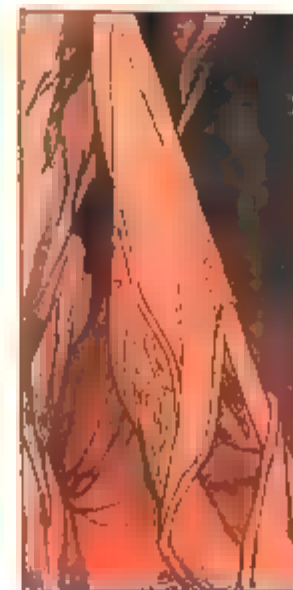
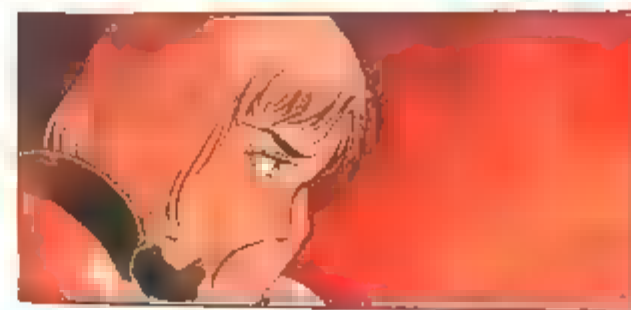
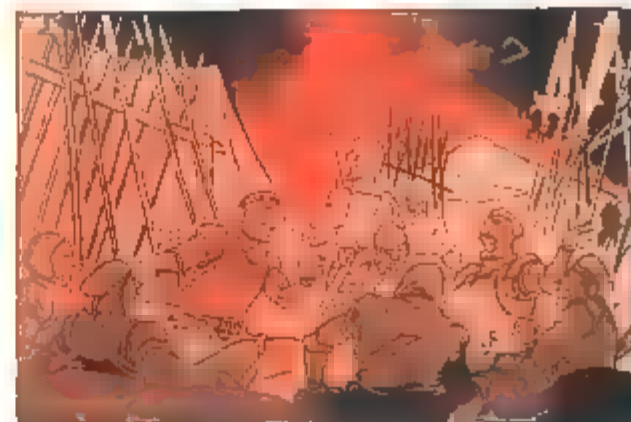
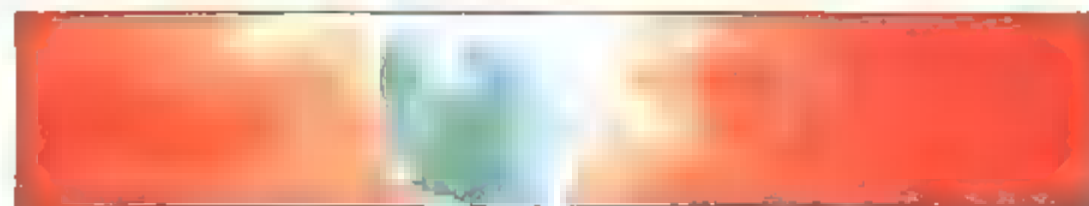
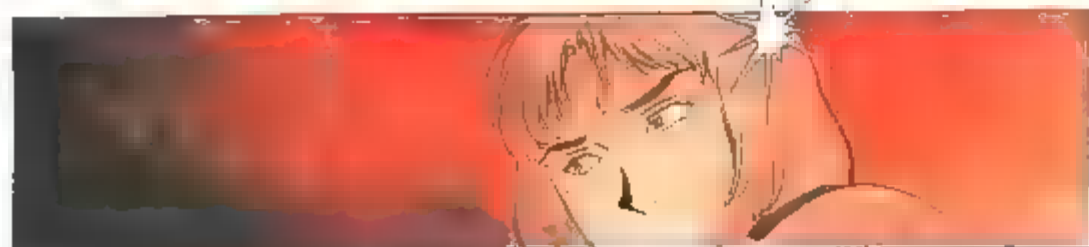
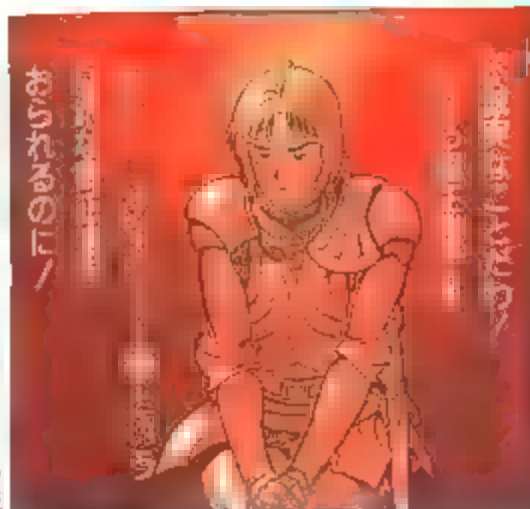
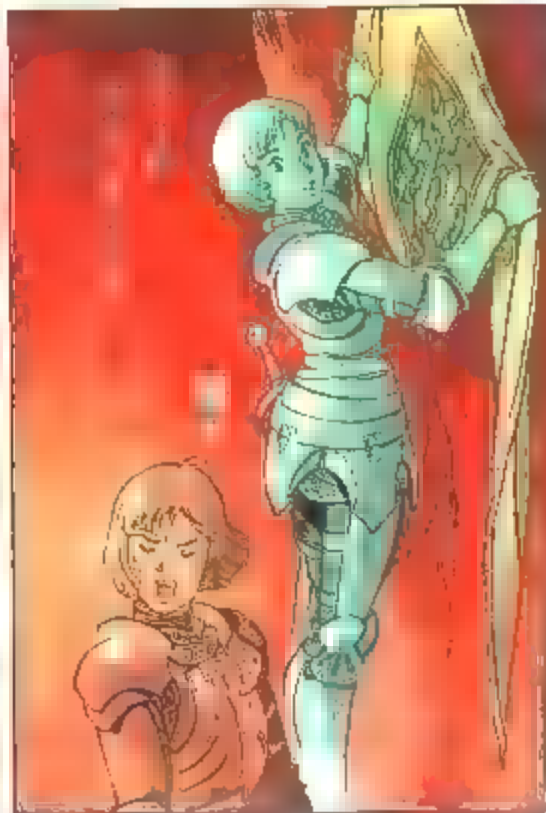
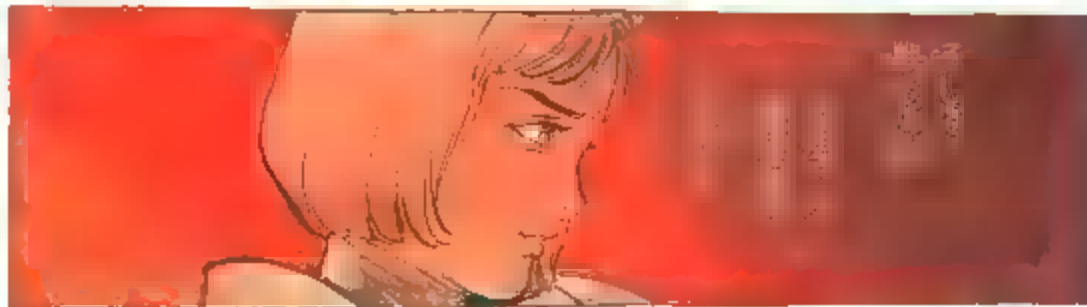
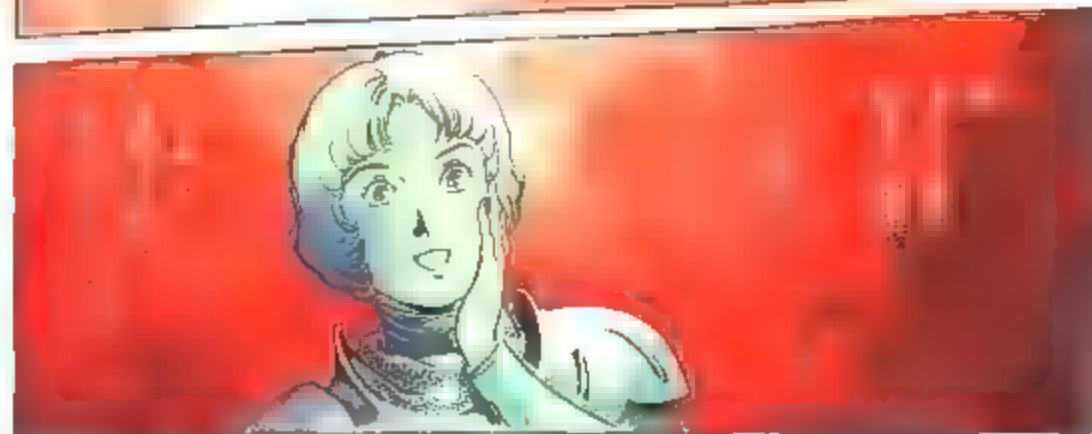
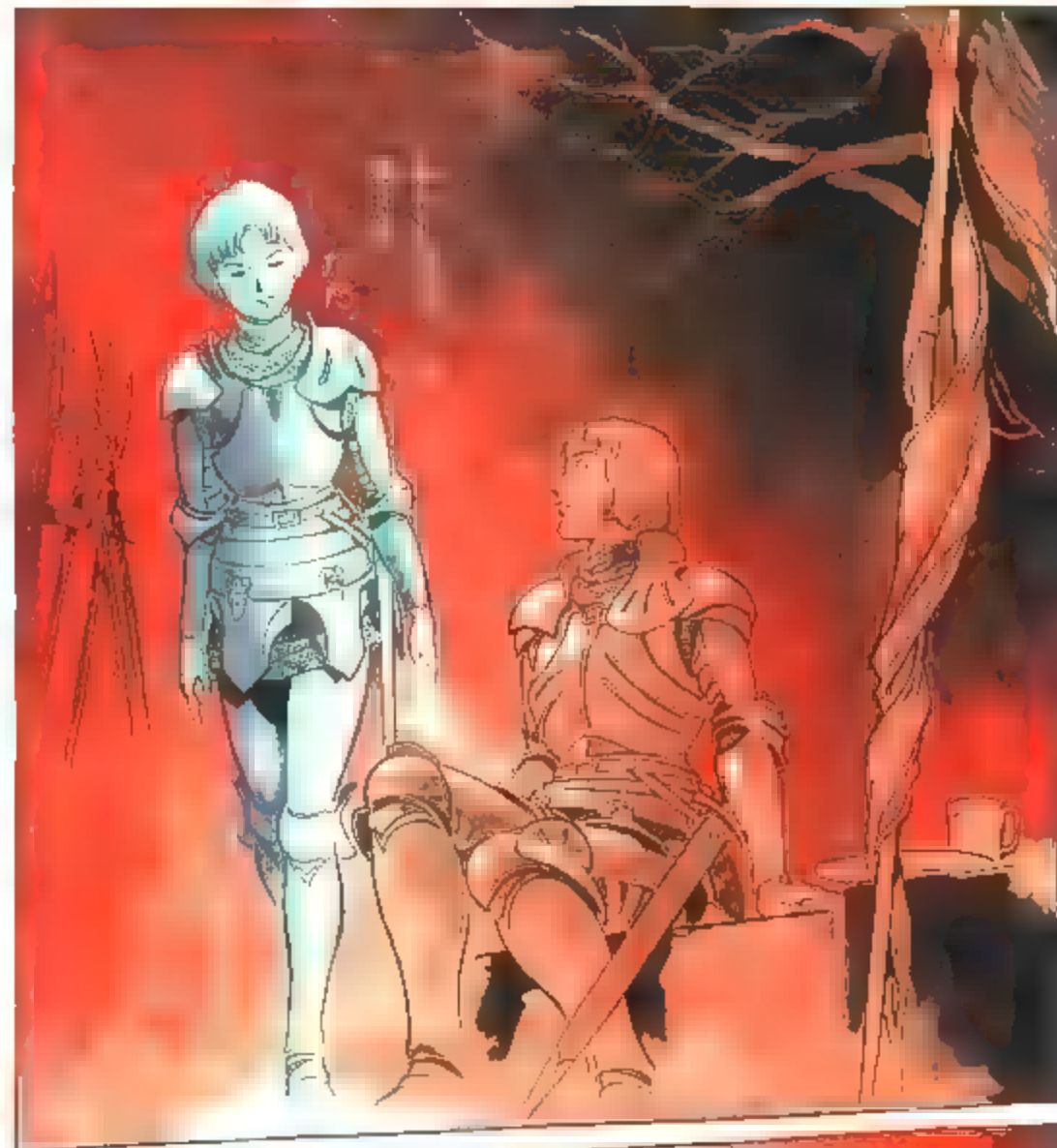
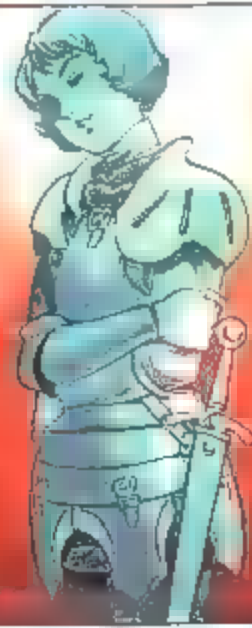
そうだ

たじ
そ それは
でも…
間違っていると思います!!
リッシュモン大元帥ともあろう方がそのような理由で作戦をお立てになるとは――!
黙れ!!
口をつつしめ
誰に意見しているつもりだ
……

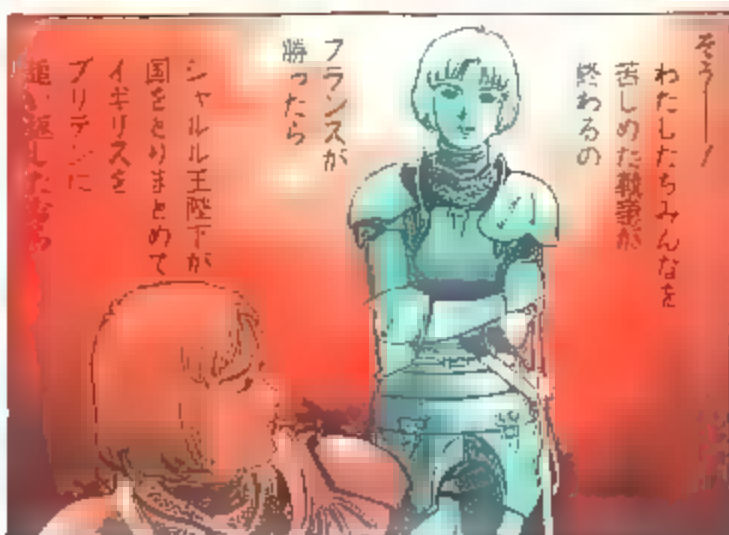
ロッシュは悪い所ではない
……
おそらくルイ王太子もそう考えるだろう
……

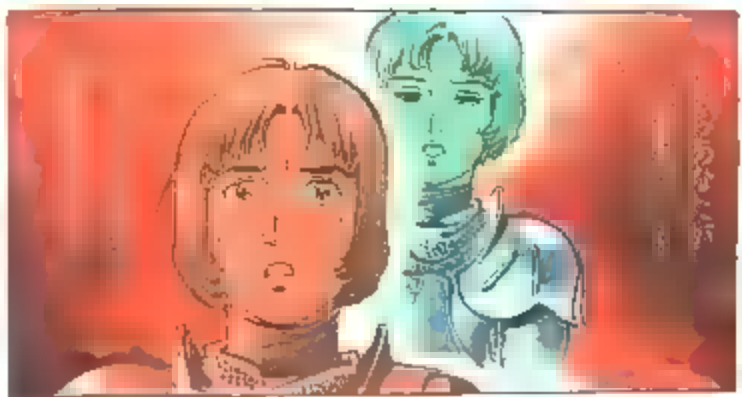
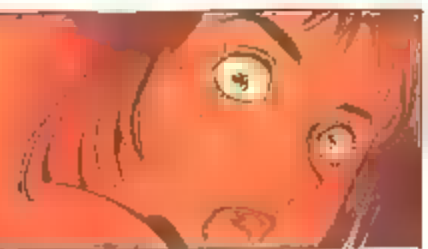
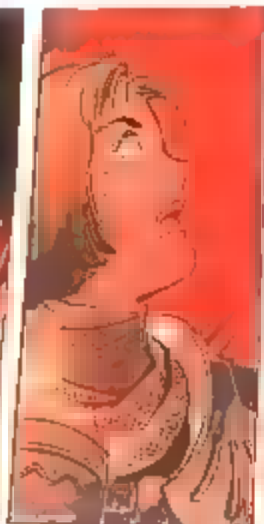
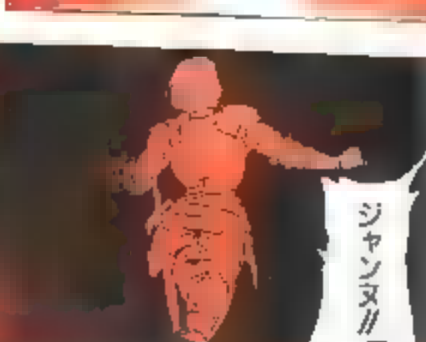
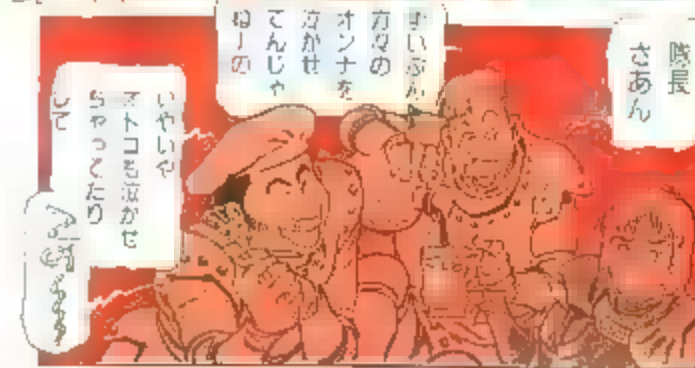
面白い戦に
なるはずだ

★マリー・ダンシュー——ルネ・ダンジューの妹

よりによって

誰のために戦うかなんて
問題じゃない
「フランスのために」って
いうのだって
本当のことを言うと
正しくはないわ
ただ
わたしたち全部を
超えた神様の
御意志に沿って
戦うのよ

この戦争が
きっと
終るから

そう――!
わたしたちみんなを
苦しめた戦争が
終わるの
フランスが
勝ったら
シャルル王陛下が
国をとりまとめて
イギリスを
ブリテンに

なぜそうなのか
っていうことは
気かないで
わたしにもそれは
わからないの
でも神様がそう
望まれているのよ
この戦争はもう
終わりにしなければ
ならないって……
でも人間達の
勝手な欲や恨みや
意地にまかせて
いたのでは結着が
つかないから
だからわたしに
仕事をお命じに
なったの

戦争が終わる日を
見たかったわ
ドンレミイの村が
また平和になる
日が
でも
わたしの役目はその前に終わってしまった……

よォォ!
エミール隊長!
一杯
やりましょォ
勝ち戦の前祝い
ですよォオ!

あ
あ!
吞めえ隊長!!
よっ
隊長さあん
ずいぶん方々のオンナを泣かせてんじゃねーの
いやいやオトコも泣かせちゃってたりして
戦なんかがなければみんな気のいい農夫か町人
兵士たち… でも
いっき!
ニクイねどーも
ホレ
いっきに!
いっき
ジャンヌ!
?
ジャンヌ?
ジャンヌ!!
ジャンヌ待って!!
もっと話を聞かせて!!
ジャンヌー!!

なに?!
リッシュモンの本隊がロッシュへ向かった?!

本当か
それは!
はい!
シノンを出て
全軍まっすぐに東へ進んでいるそうです!!

はっ
父も一緒なのだな?!

たしかに!!
ふうむ…

ロッシュか……
なるほど…
ふふふふ…

わははははは
いかにも御父上らしい!!
よォし!!

俺に続けえ!!

ロッシュに急行だ!
先回りするぞ!!

ロッシュの守護にはブルボンが当たっているのだったな?!
早馬の使者を遣れ!!
リッシュモンに備えて前面を固めさせろ!!

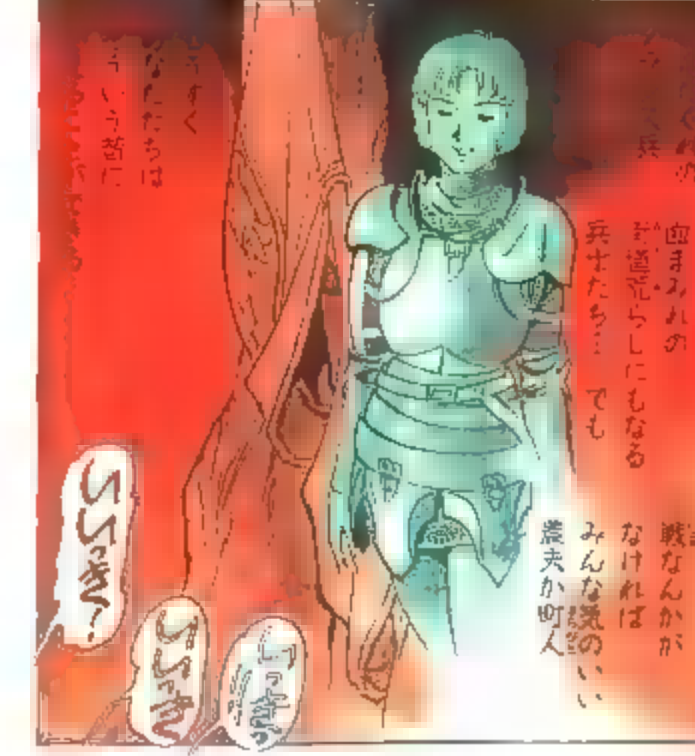
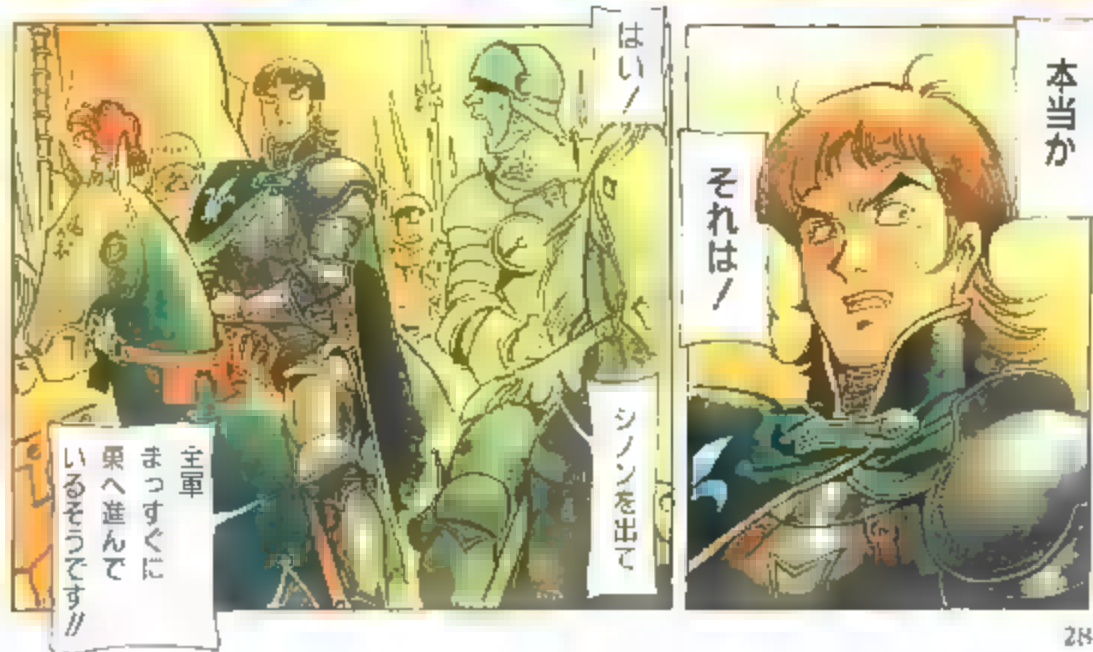
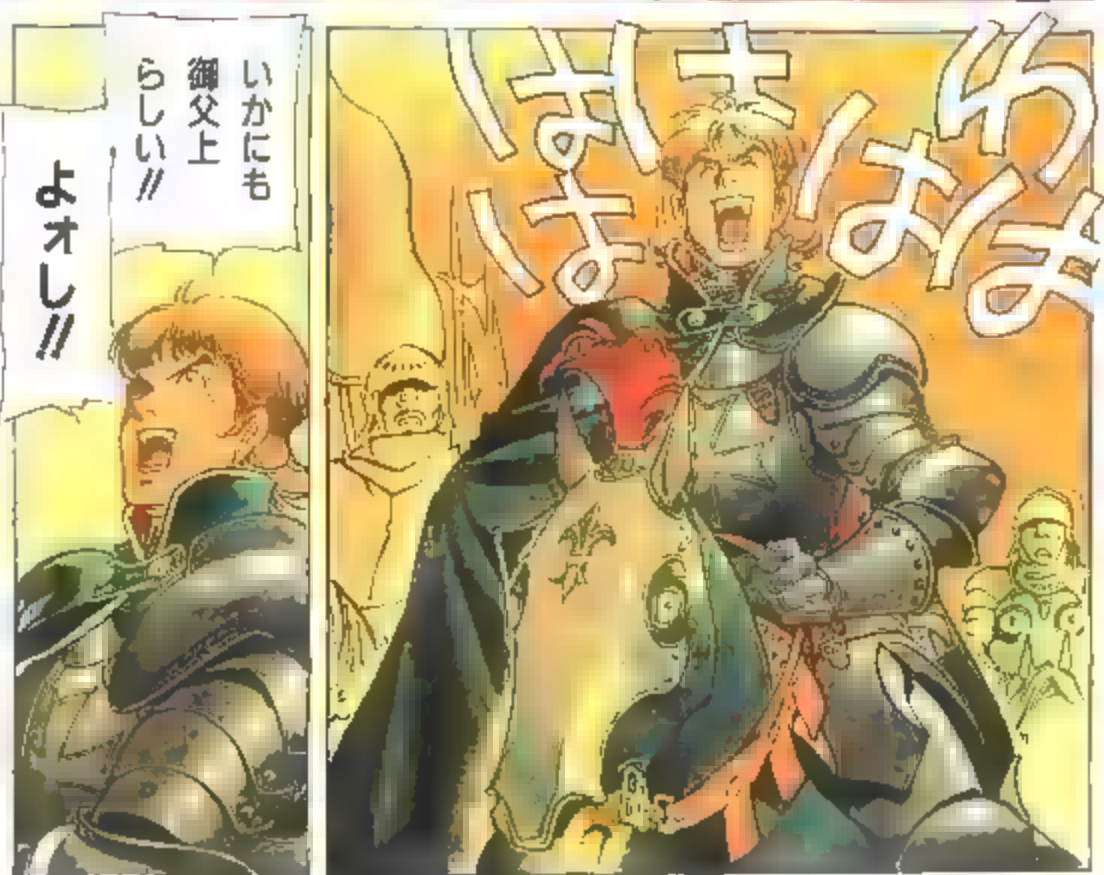
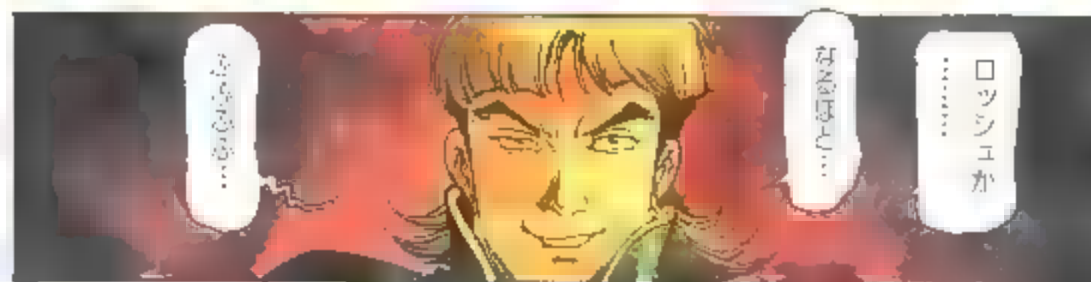
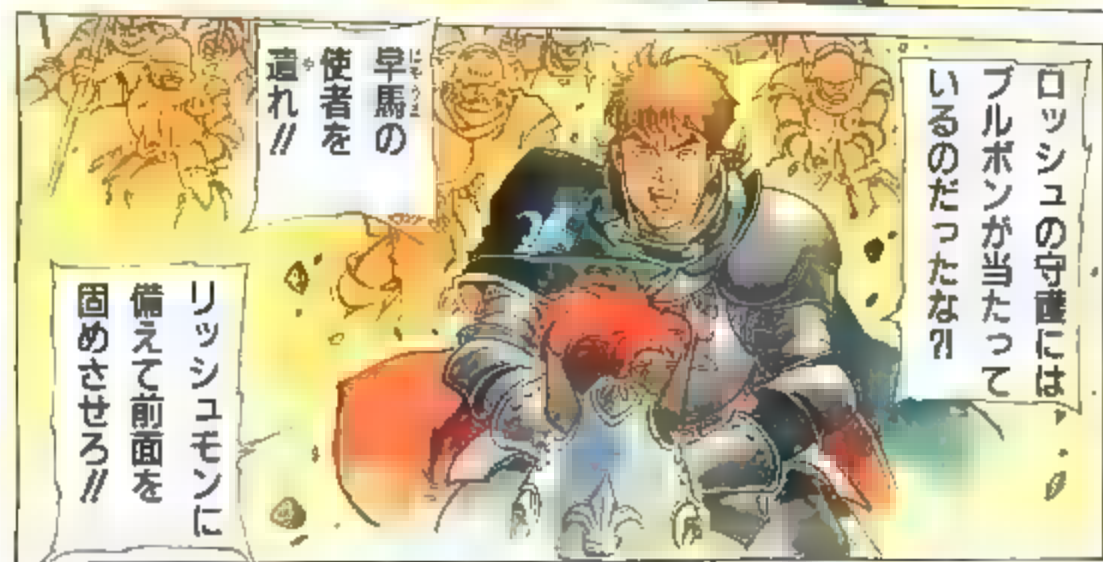
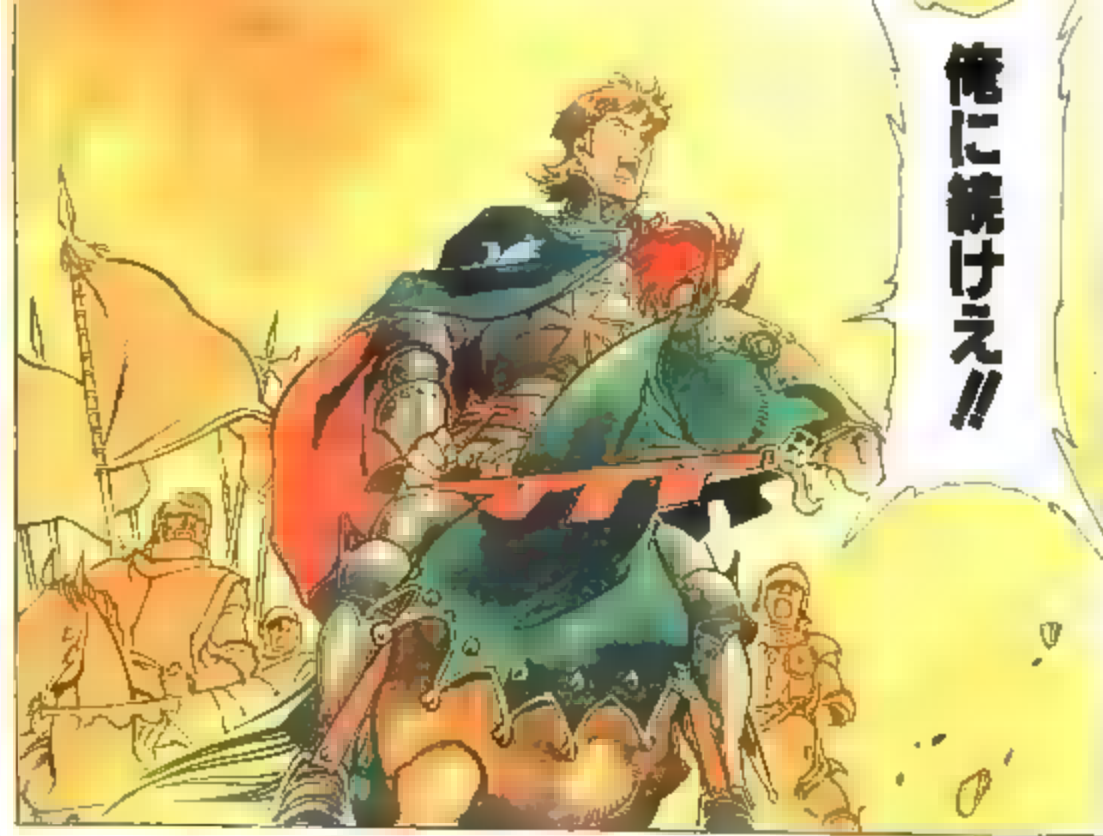
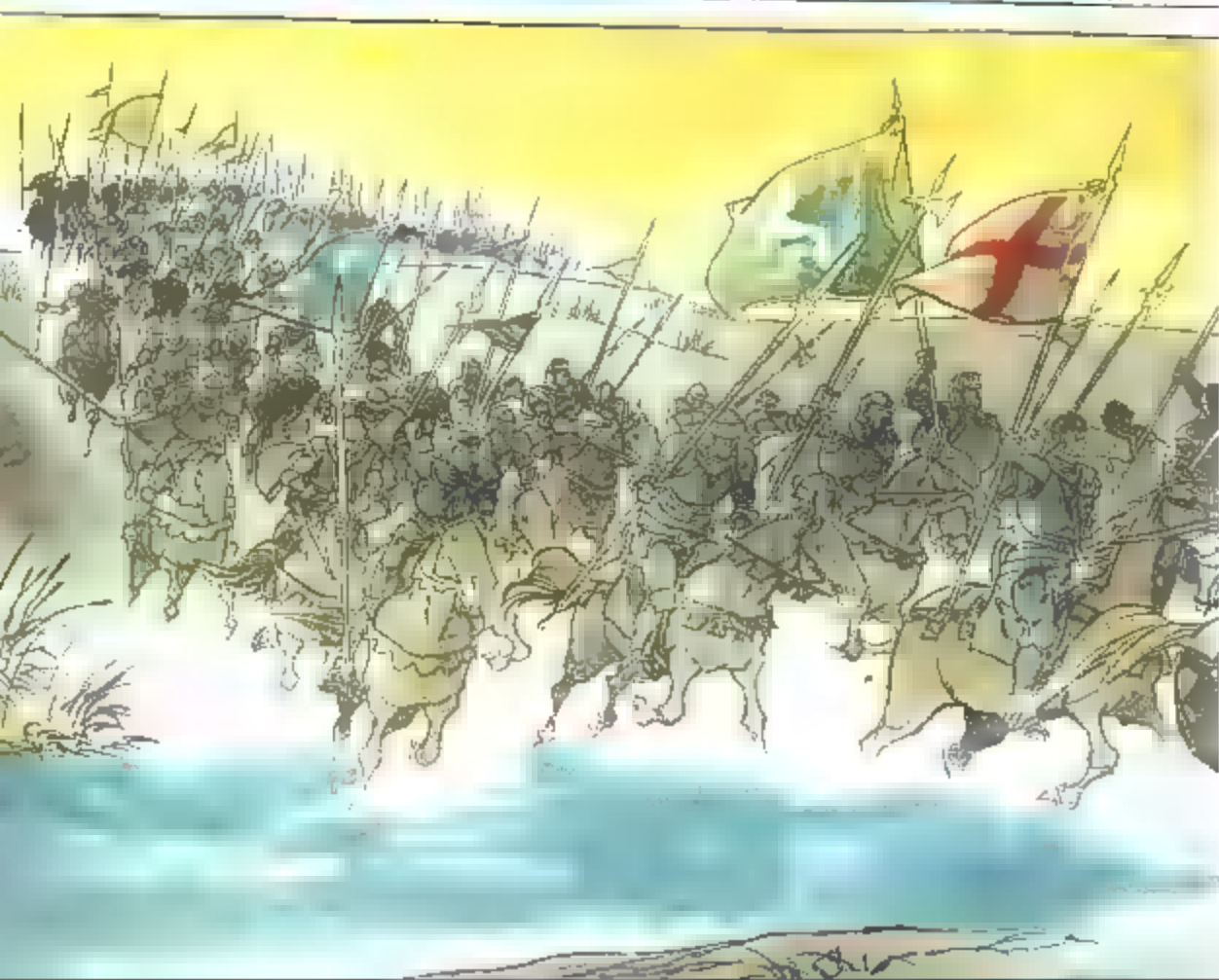
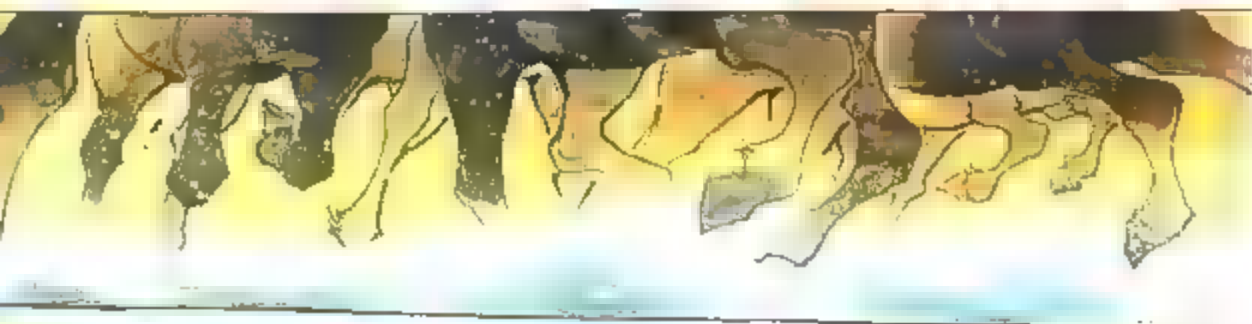
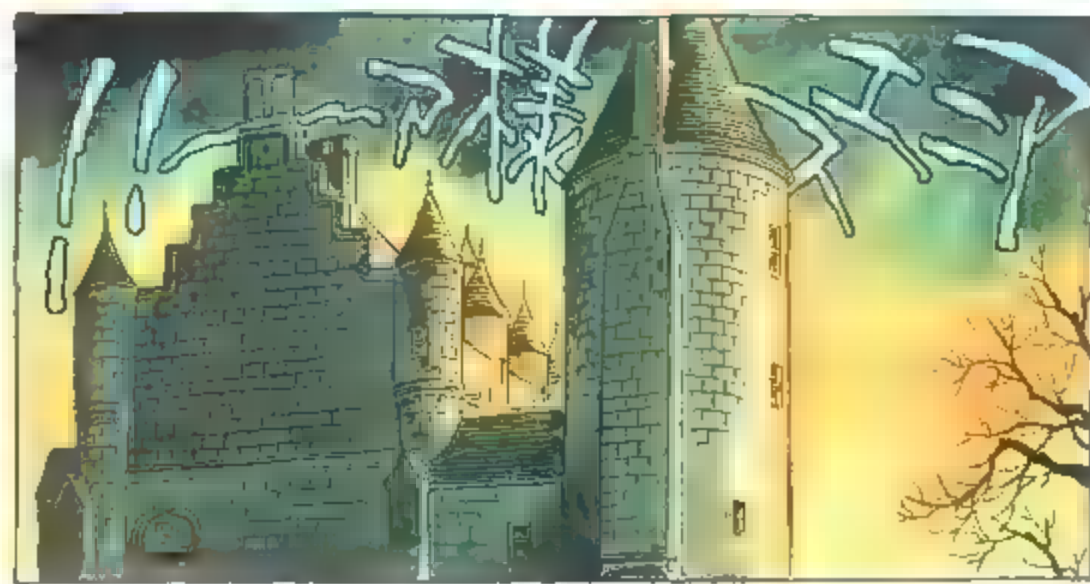
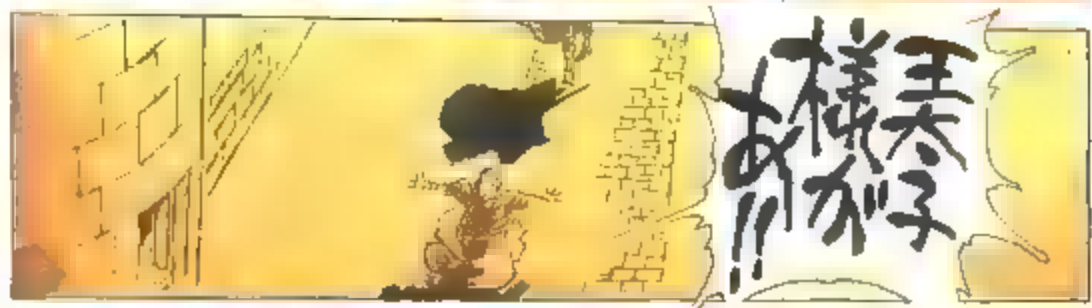
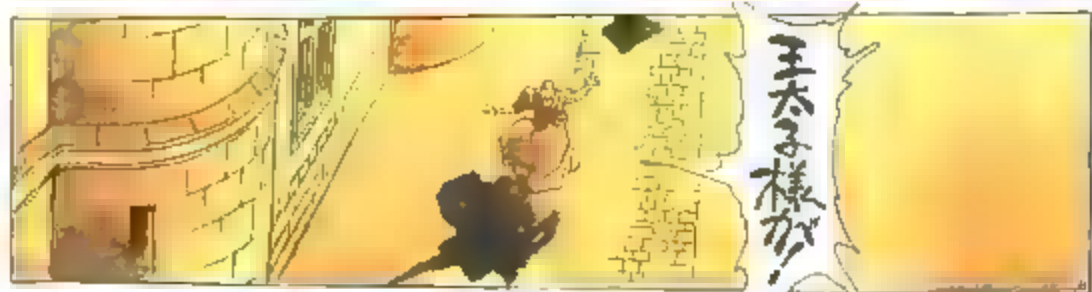
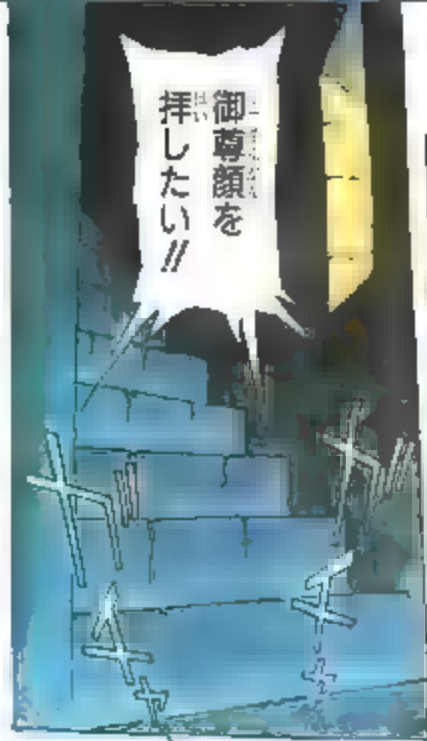
いっきに
決着をつけるぞ!!

アニエス様ーー!!

アニエス様!!
お逃げください!!

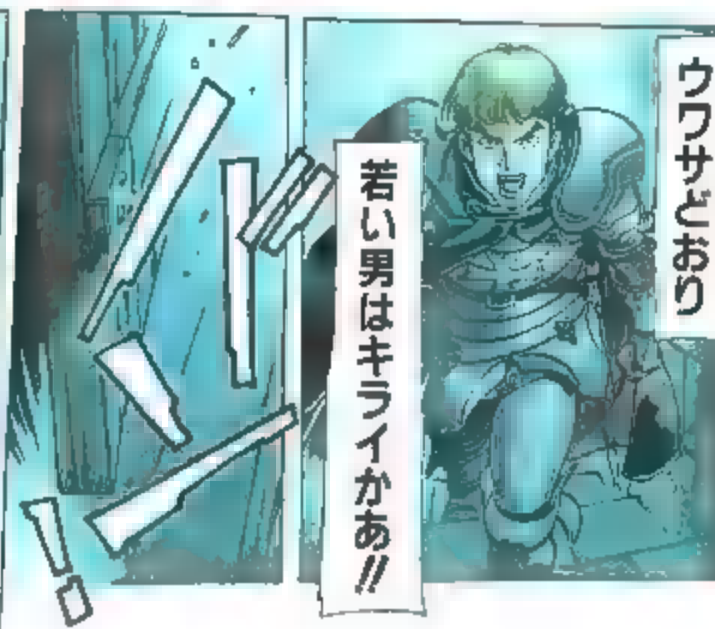
王太子様が!

王太子様があ!!

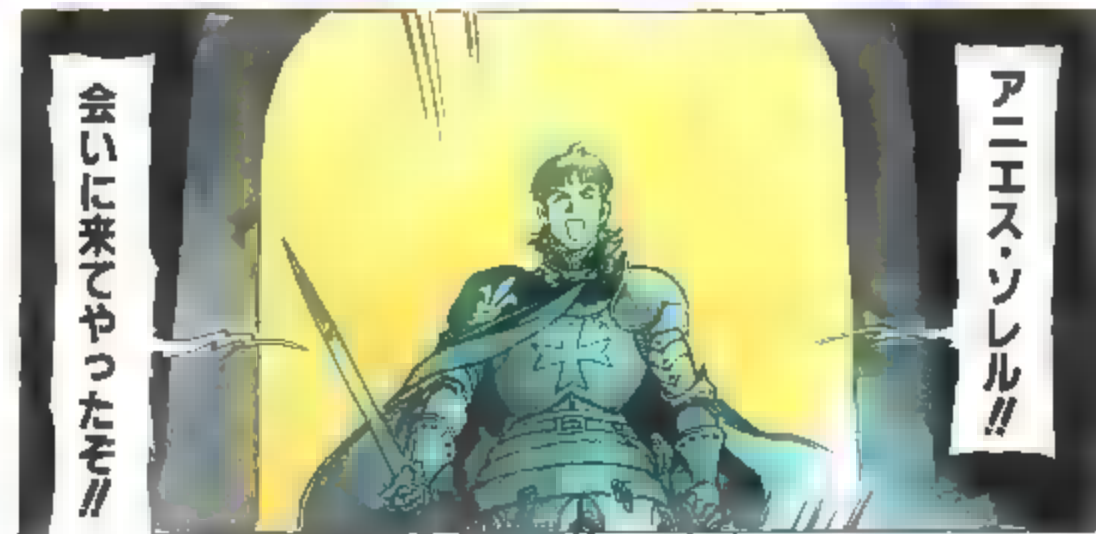
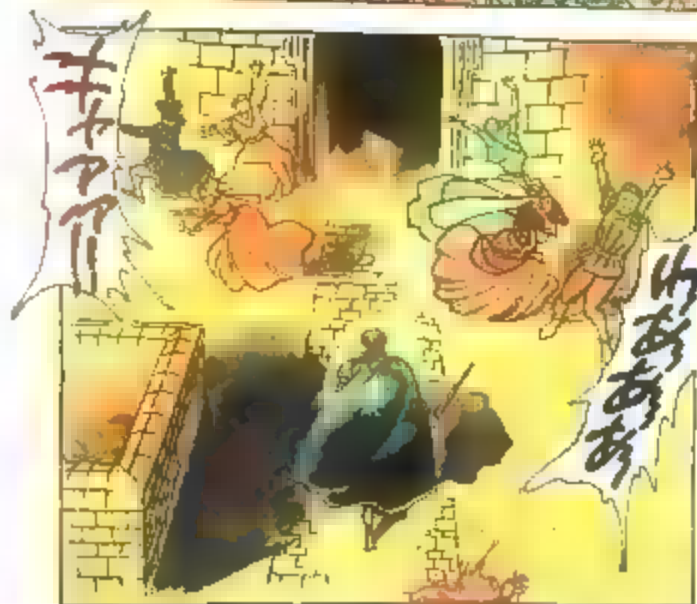
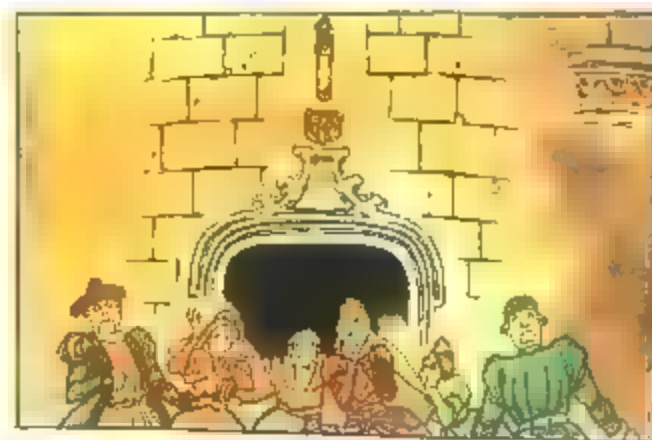
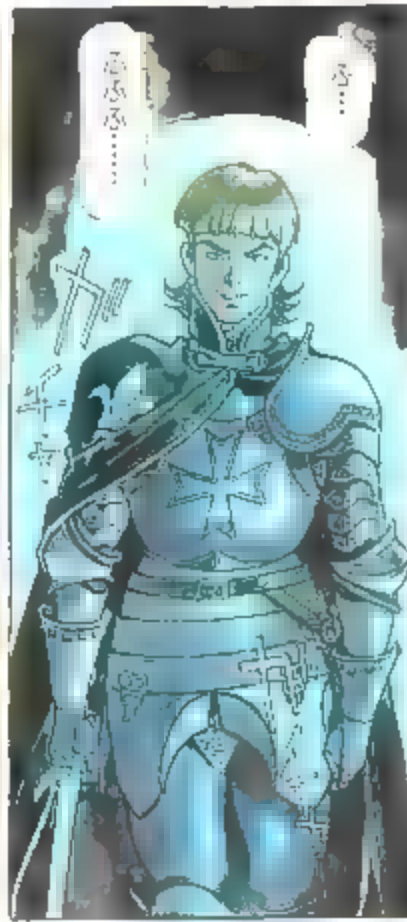
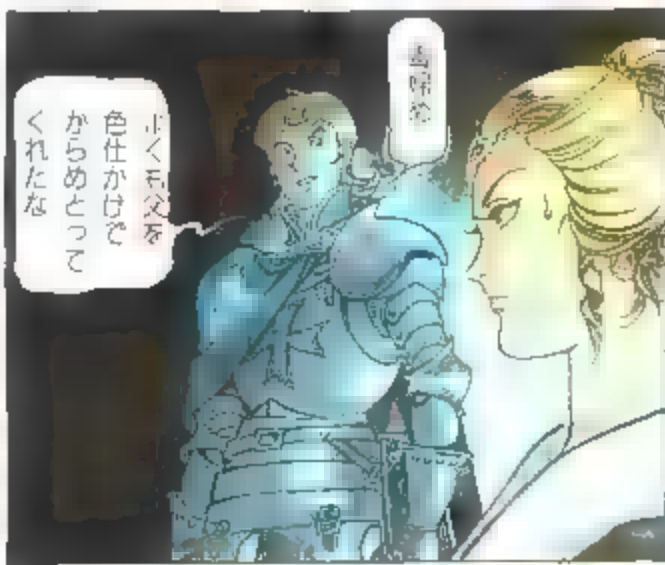
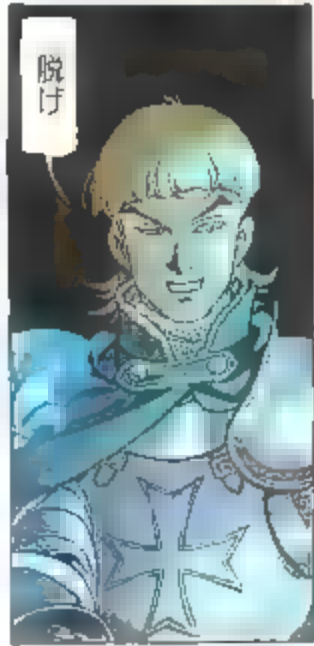
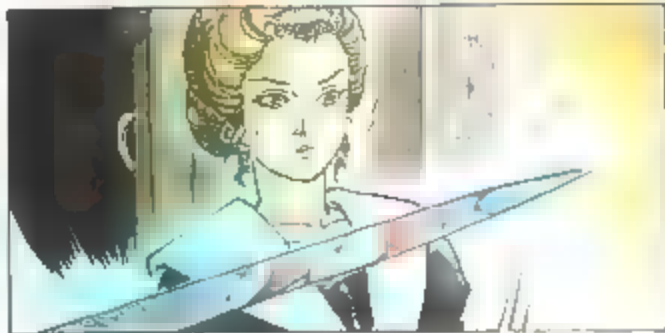
キャアア!!
わあああ

アニエス・ソレル!!
会いに来てやったぞ!!

愛しのルイ王太子だ
父上より先に着いて悪かったな!!

御尊顔を拝したい!!

まさか目どおりかなわぬとは言うまいな!!
それとも

ウワサどおり
若い男はキライかあ!!
……
ふ…

そのおそろしい抜身をおしまいくださいませ
王太子殿

ふ…
ふふふ……

母様を
よくも父を色仕かけでからめとってくれたな

きさまに惑わされてから父はいっそう軟弱になった
政をおろそかにし母を軽んじ戦から腰を引くようになった
きさまはフランスの敵だ!
本当ならここでその細首を打ち落してくれるところだが
脱げ

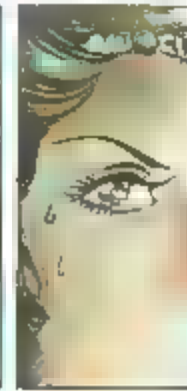
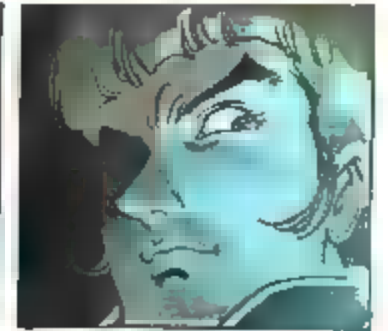
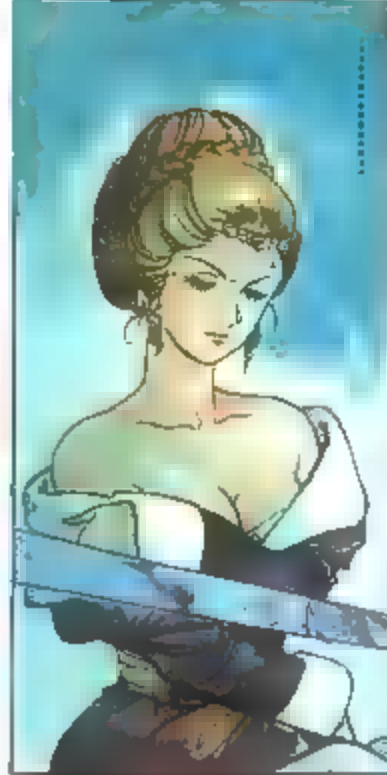
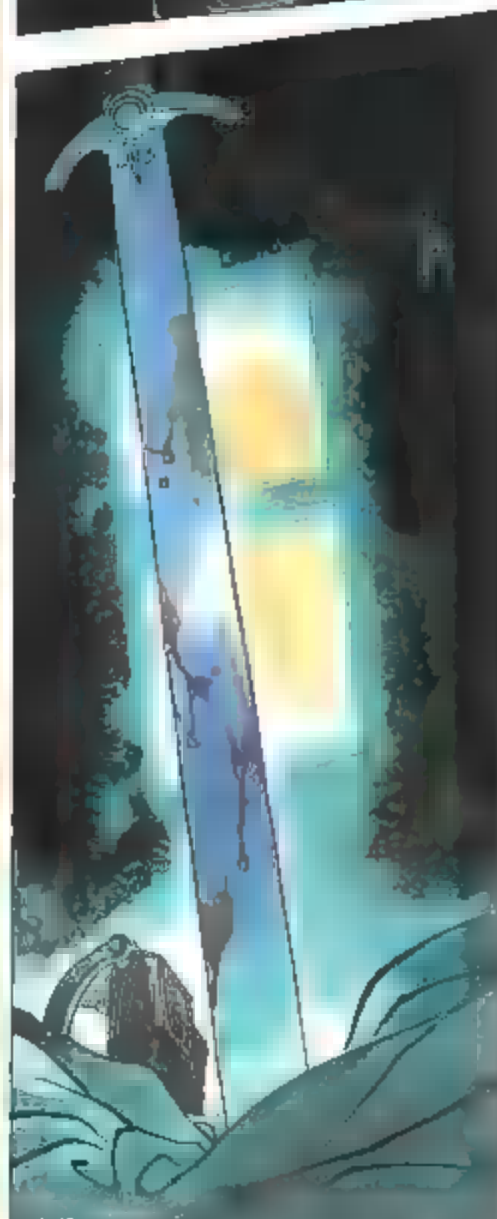
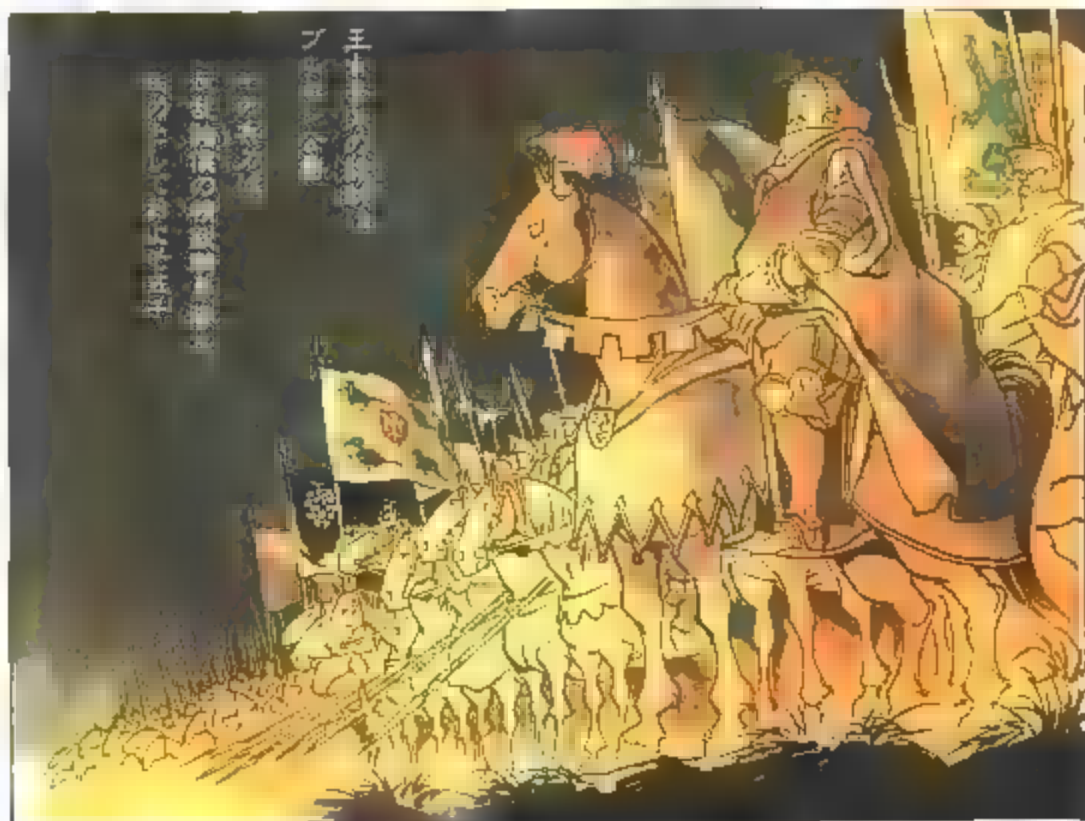
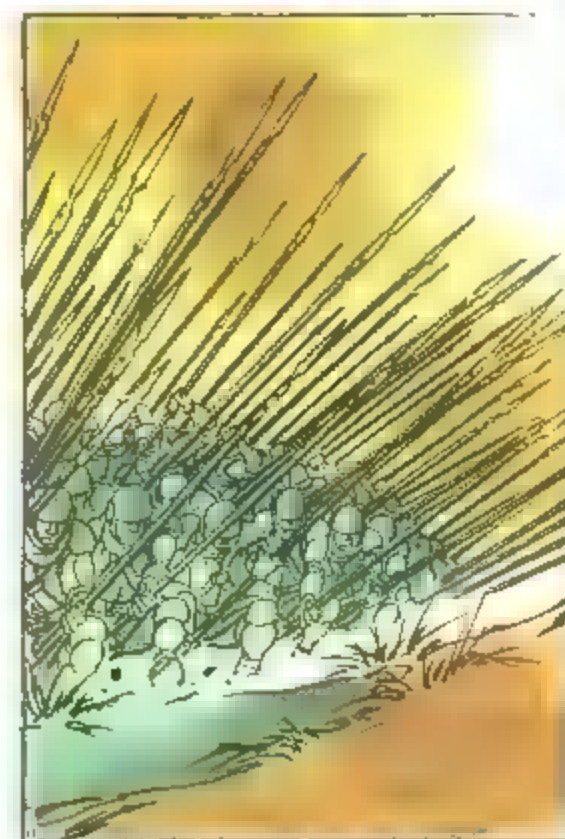
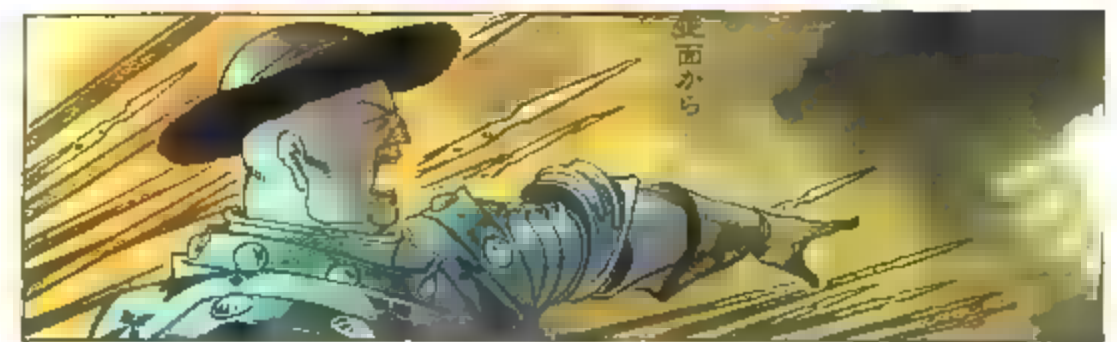
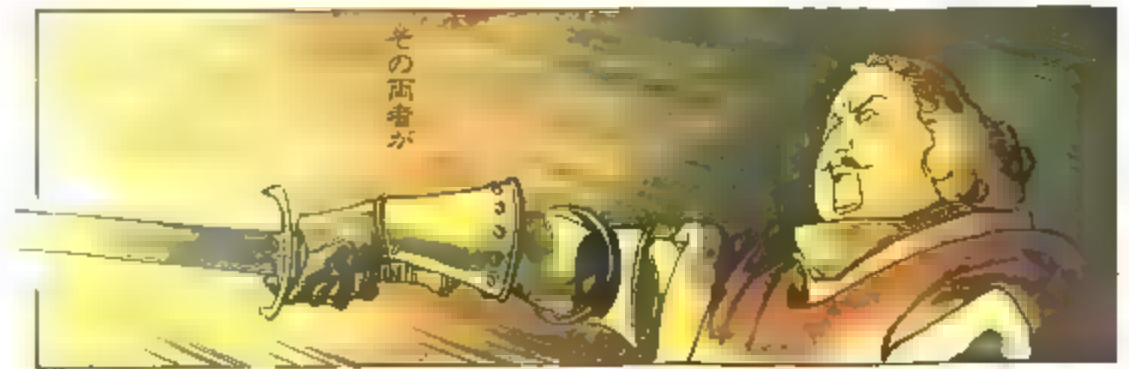
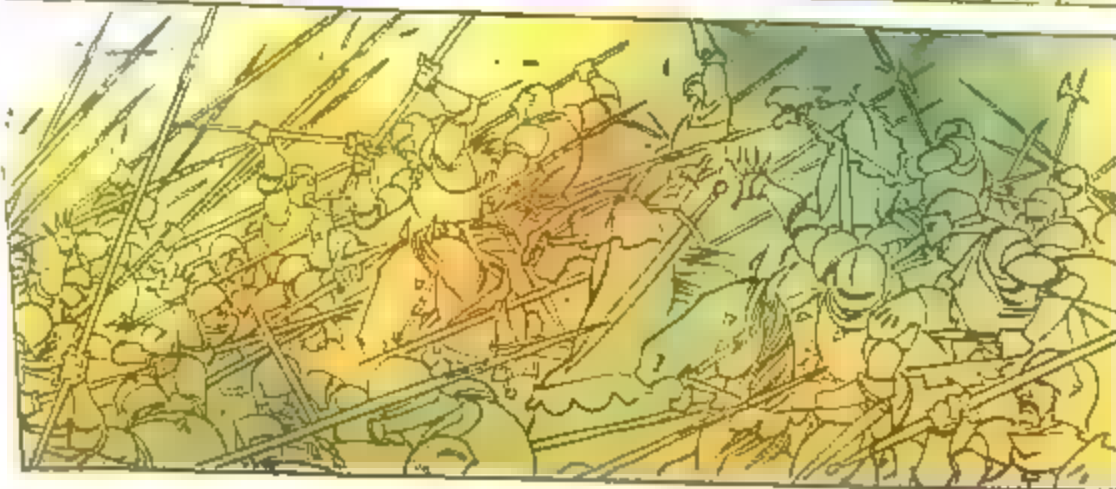
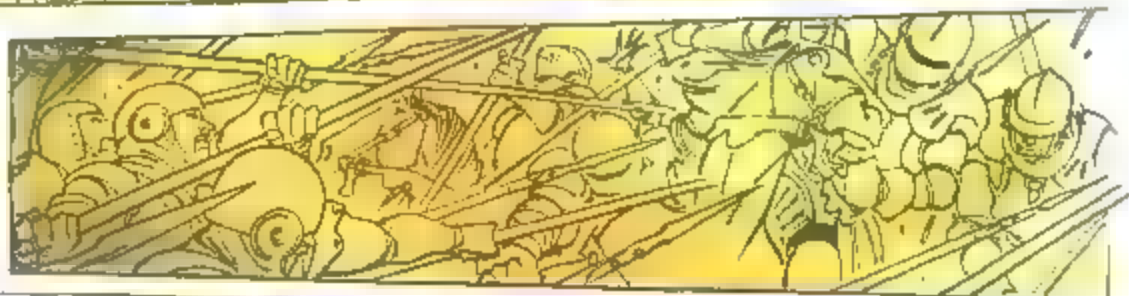
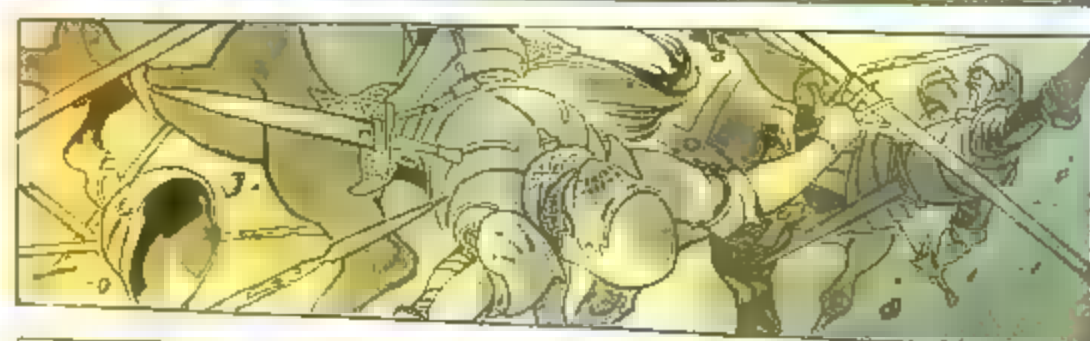
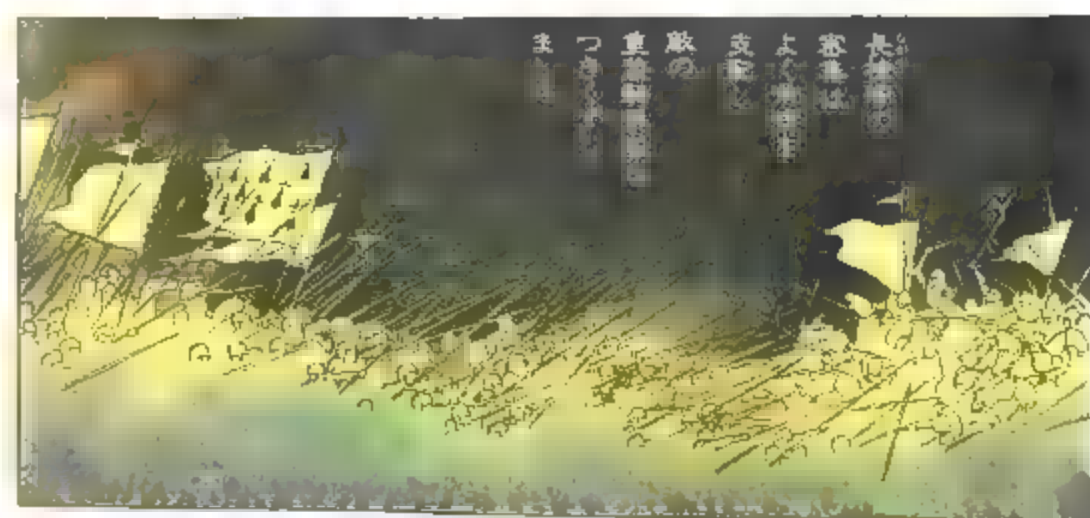
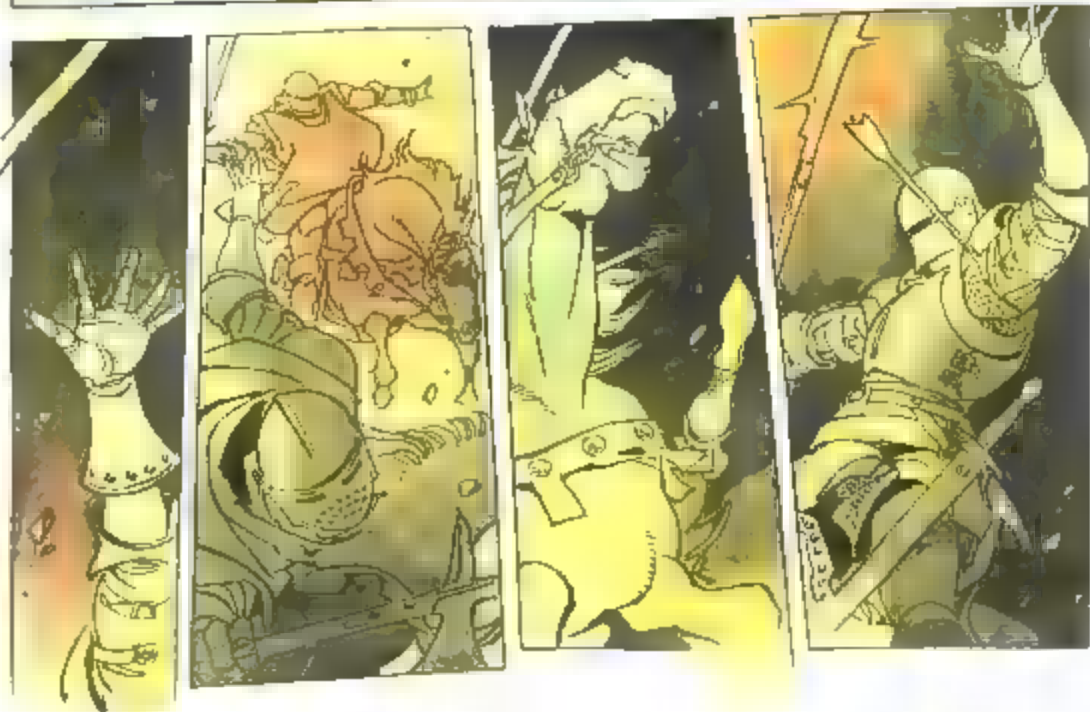
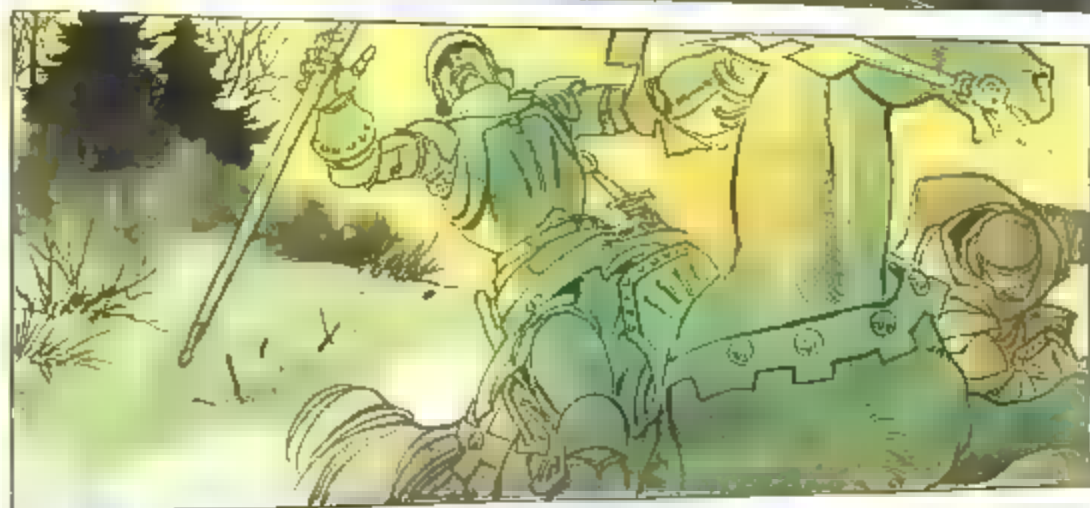
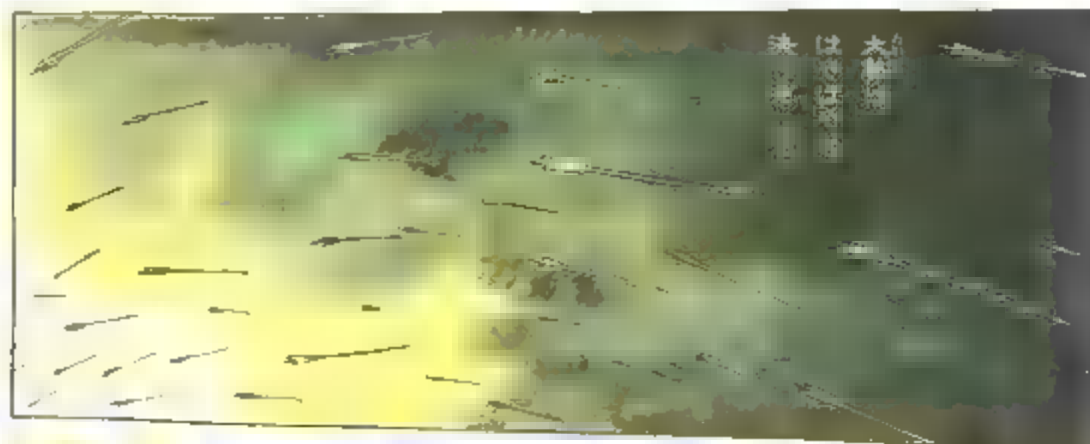
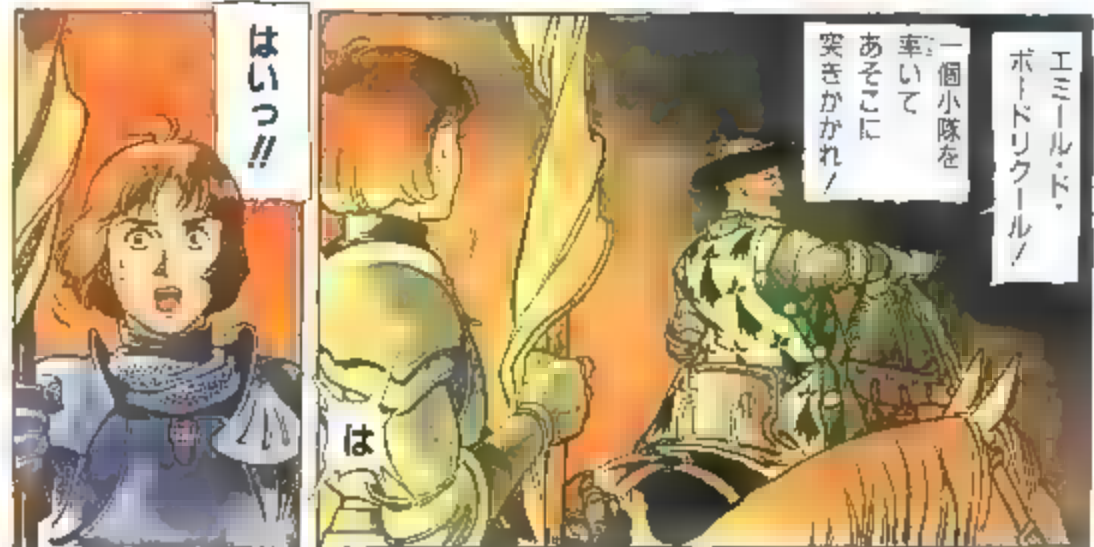
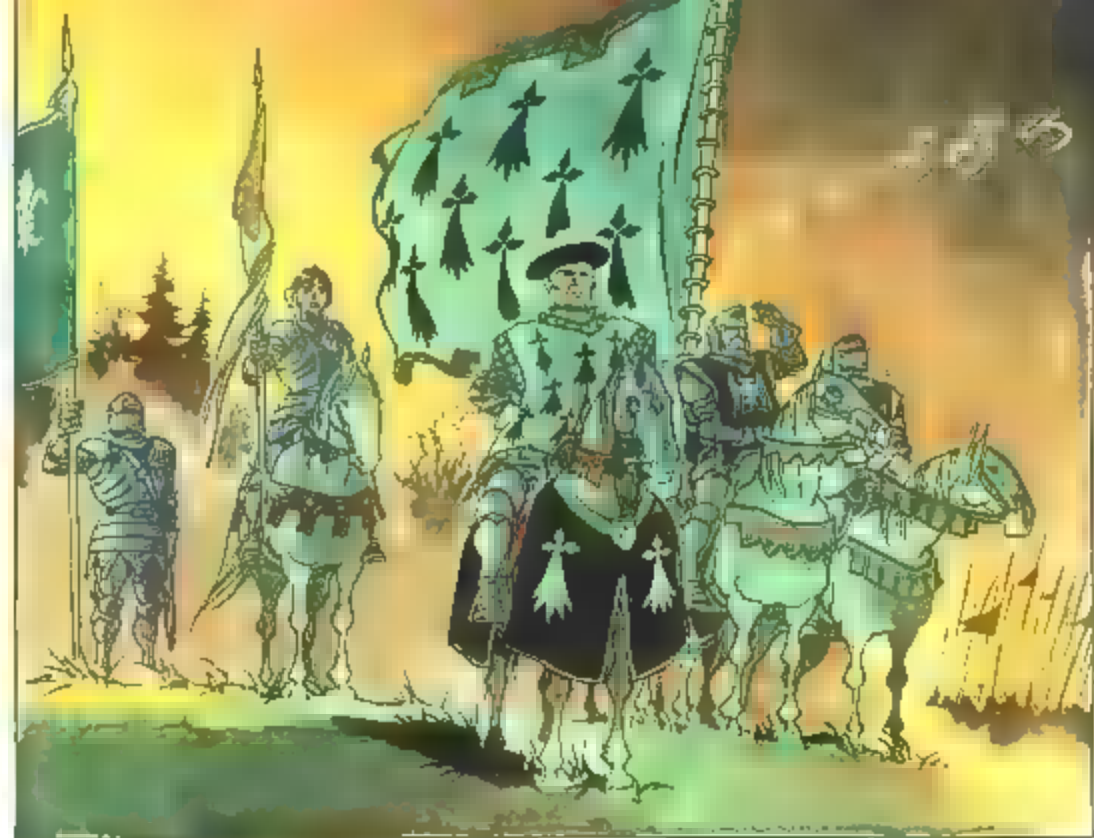
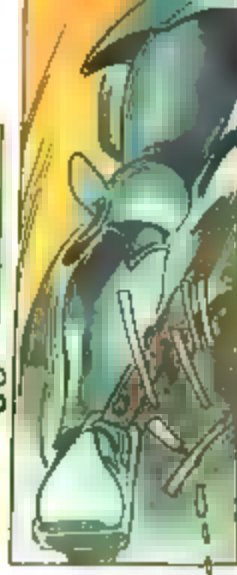
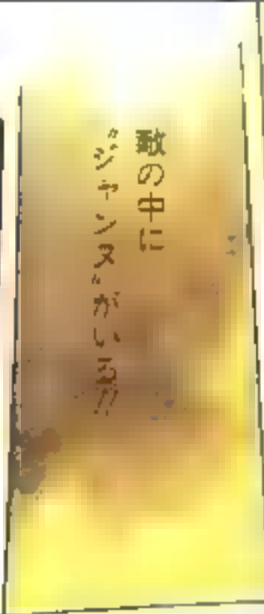
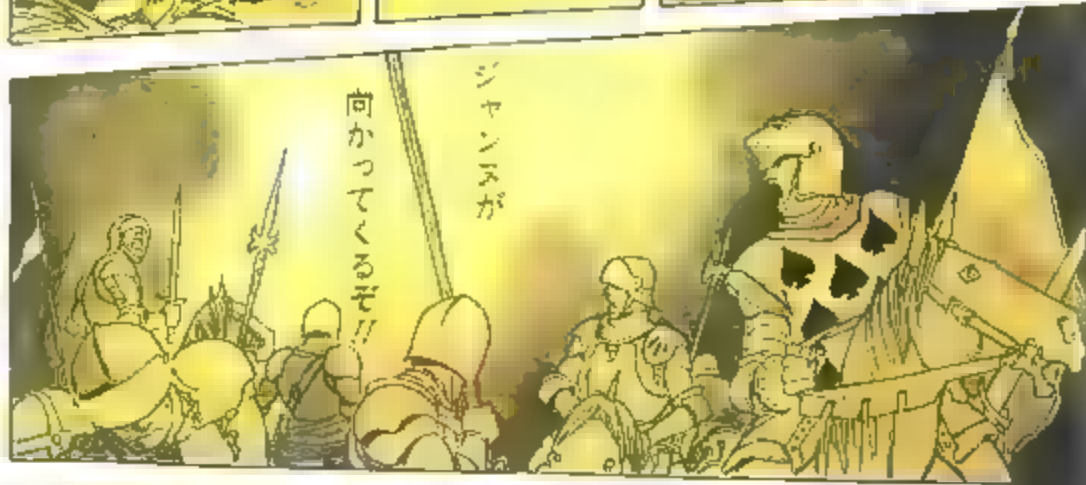
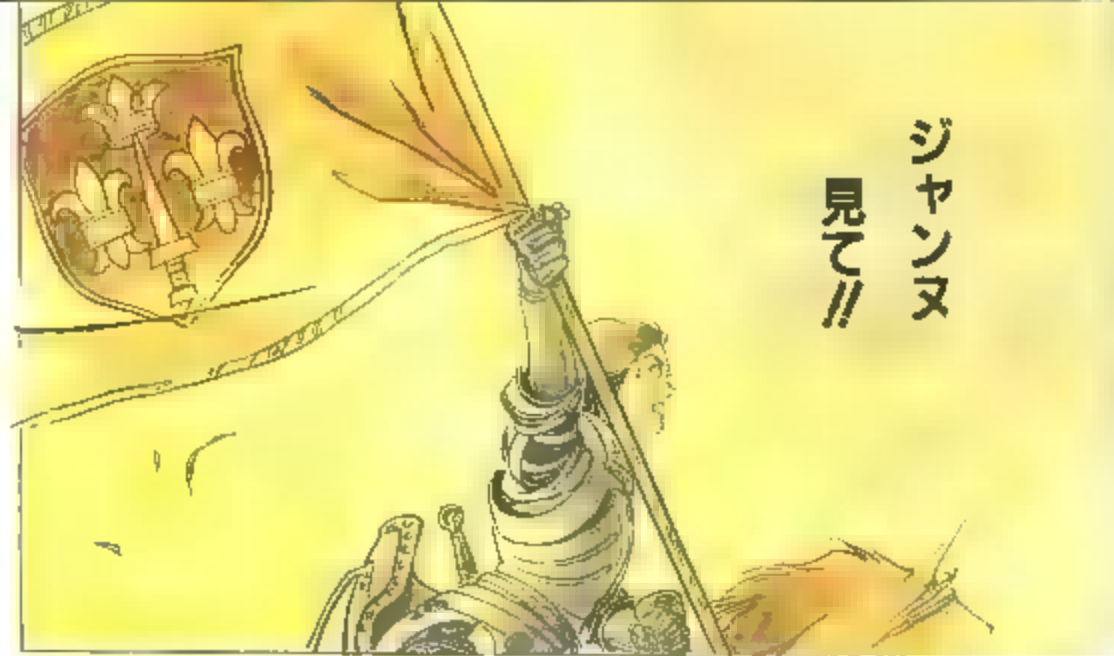
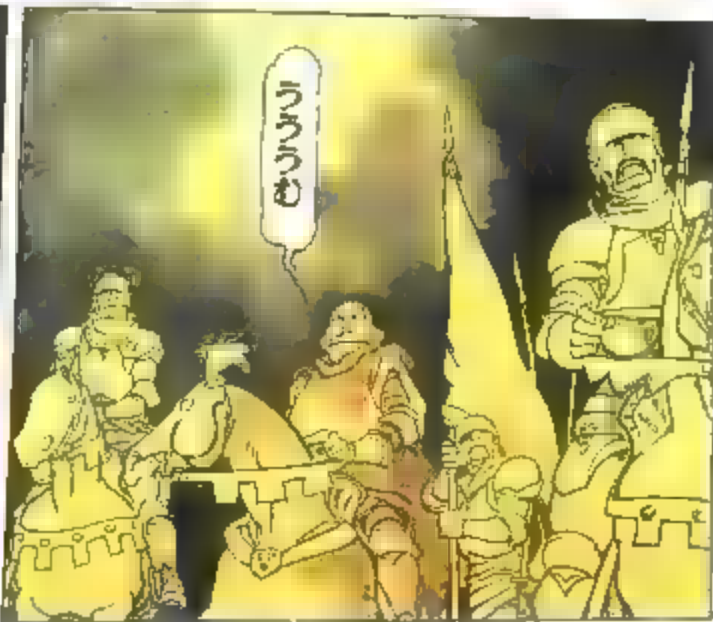
いやかっ
オレの手を借りたいか!
おい!
ブルボン公が見えられたぞ!
早く
?
今いいところだ
?

本当の
なりました

対する国王派軍は
王国大元帥
リッシュモン伯爵の
ブルターニュ公の
通称ブルトン軍
歩兵を中心に
総勢八千

その両者が

正面から

激突したのです

たまらず敵は
引き足を
そこへ
側面に
廻り込んだ
部隊が
鉄砲を
撃ちかけ
矢を
射かけ
ます

左翼も くずれかけて きたな
もう ひと押し だろう
……
エミール・ド・ボードリクール！
一個小隊を 率いて あそこに 突きかかれ！
はいっ!!
は
その旗を 高く掲げて 行け
敵によく 見えるようにな
はっ!!
続けえ!!

少女だ!
敵の中に“ジャンヌ”がいる!!
ジャンヌが復活した――!!
ジャンヌが向かってくるぞ!!
うううむ

どうした ブルボン!!
兵を 下げるな!
たてなおせ!!

ジャンヌ・ダルク だあ?!
ねボケた ことを 言うな!!

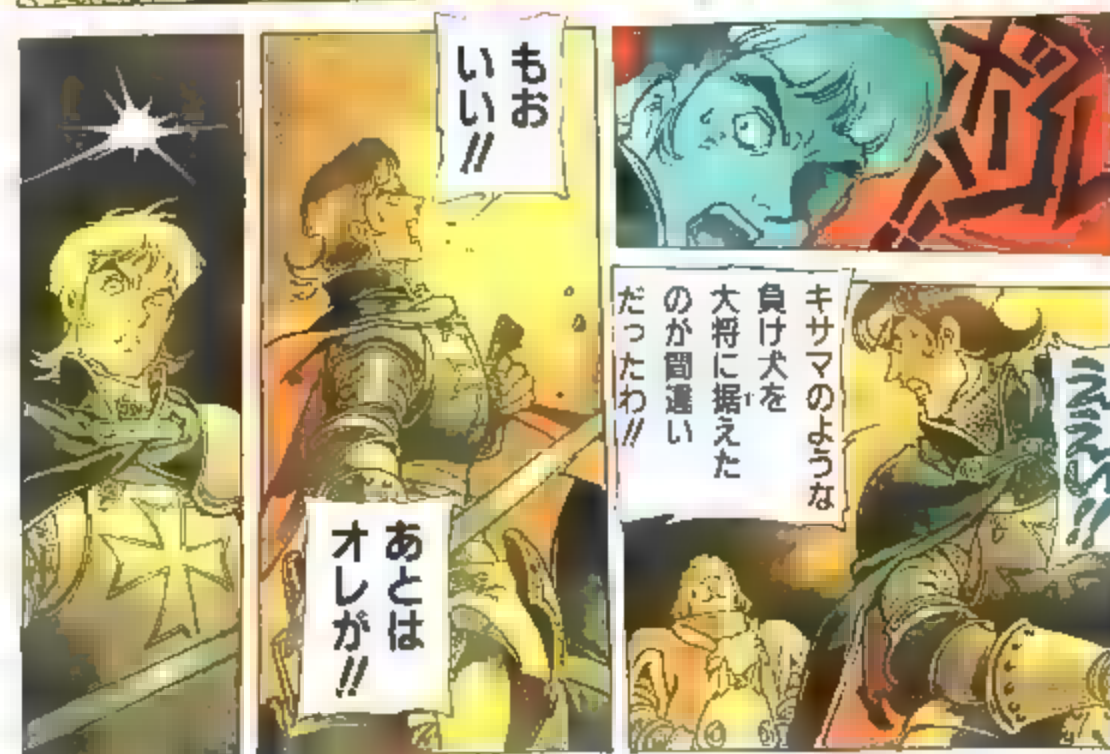
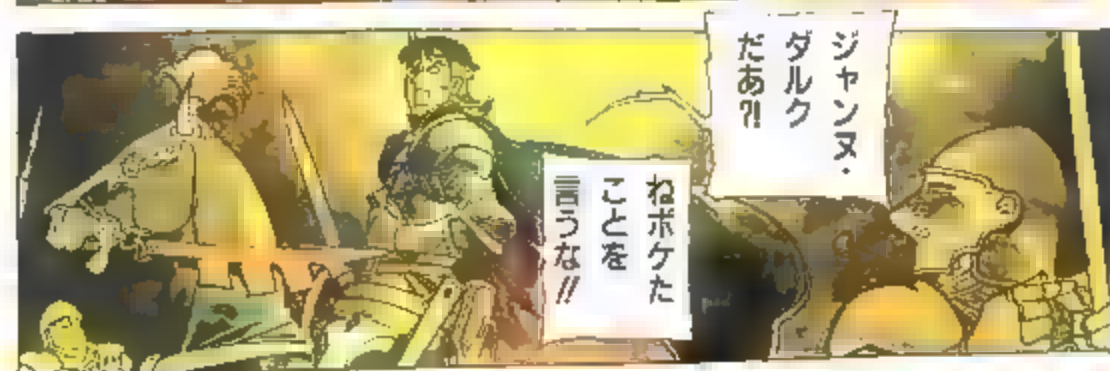
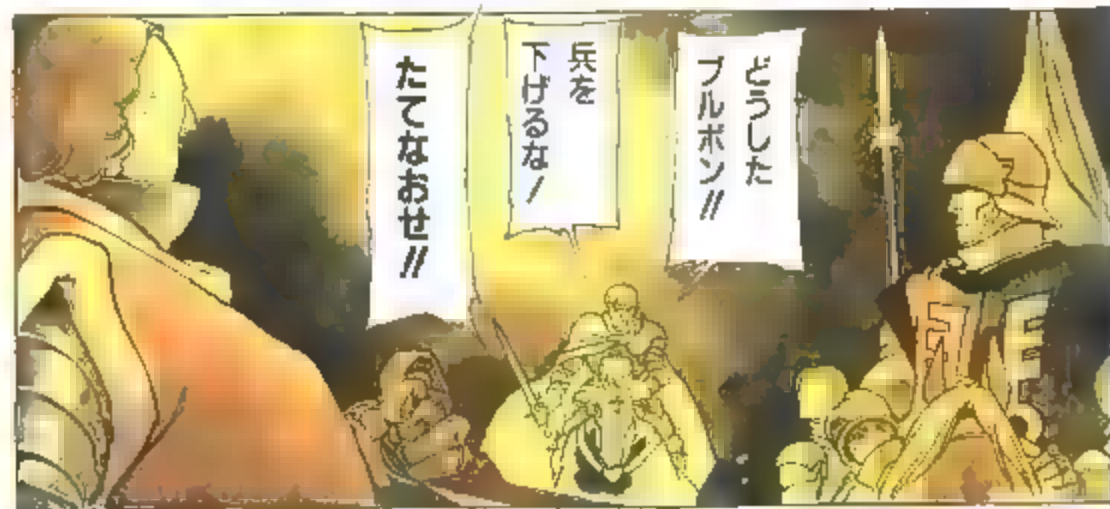
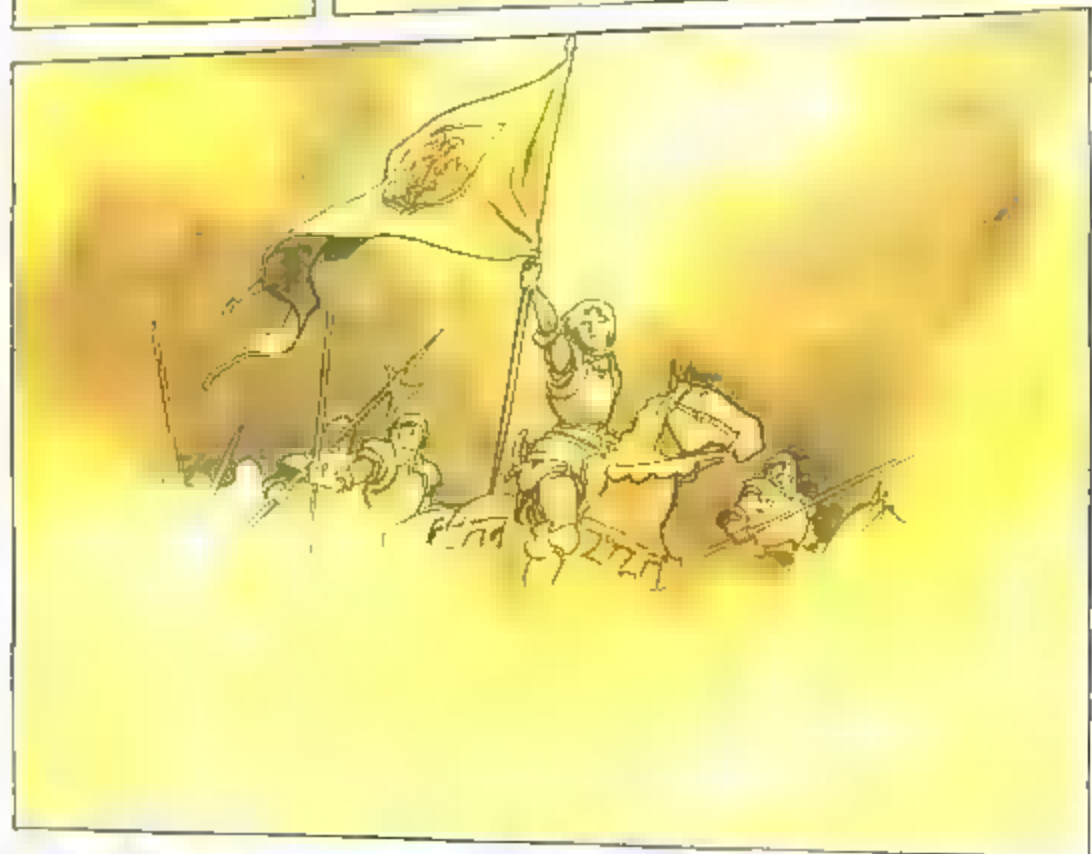
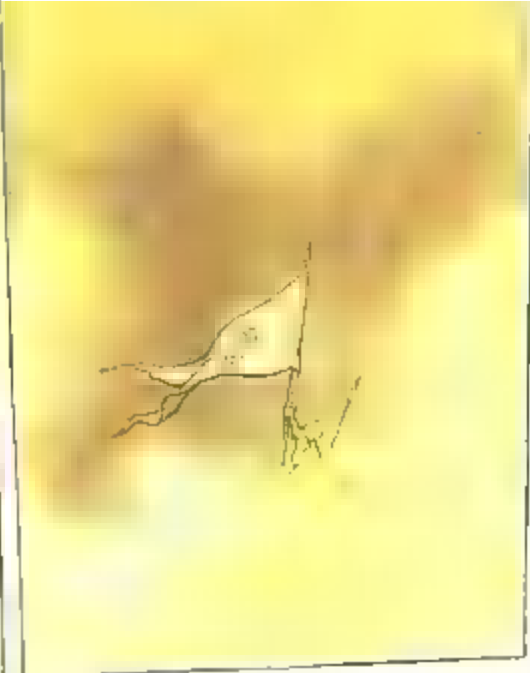
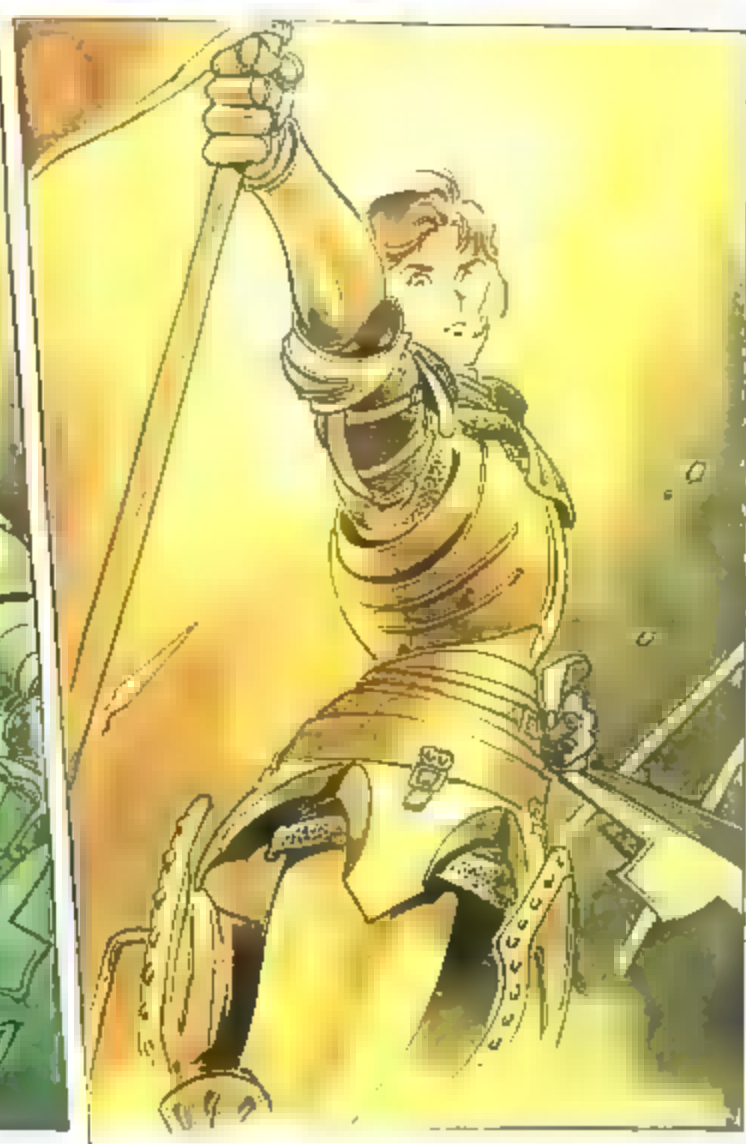
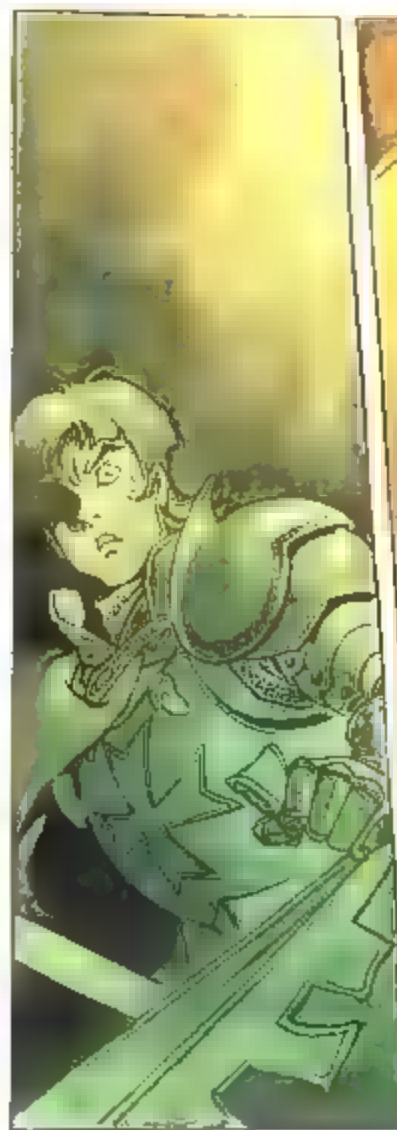
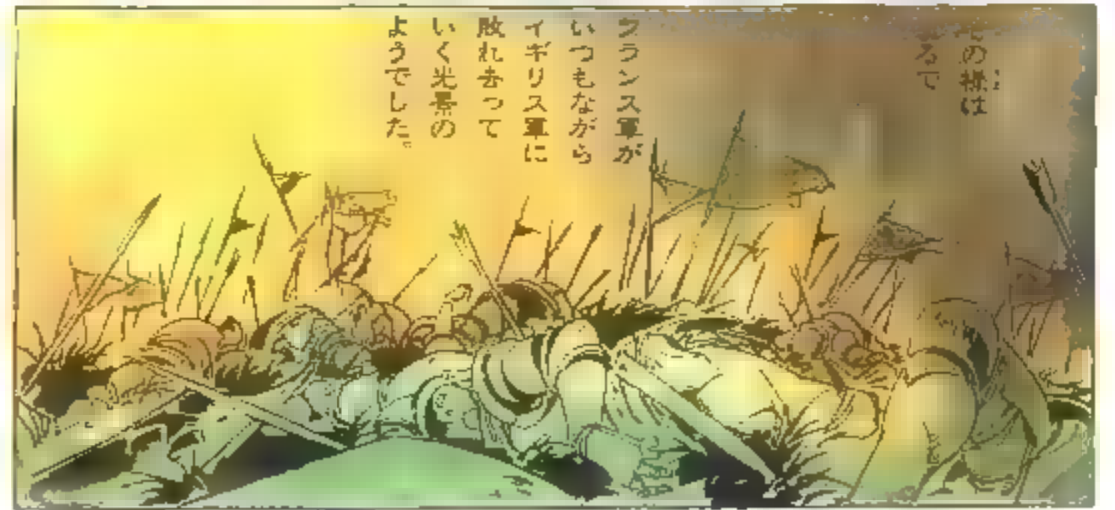
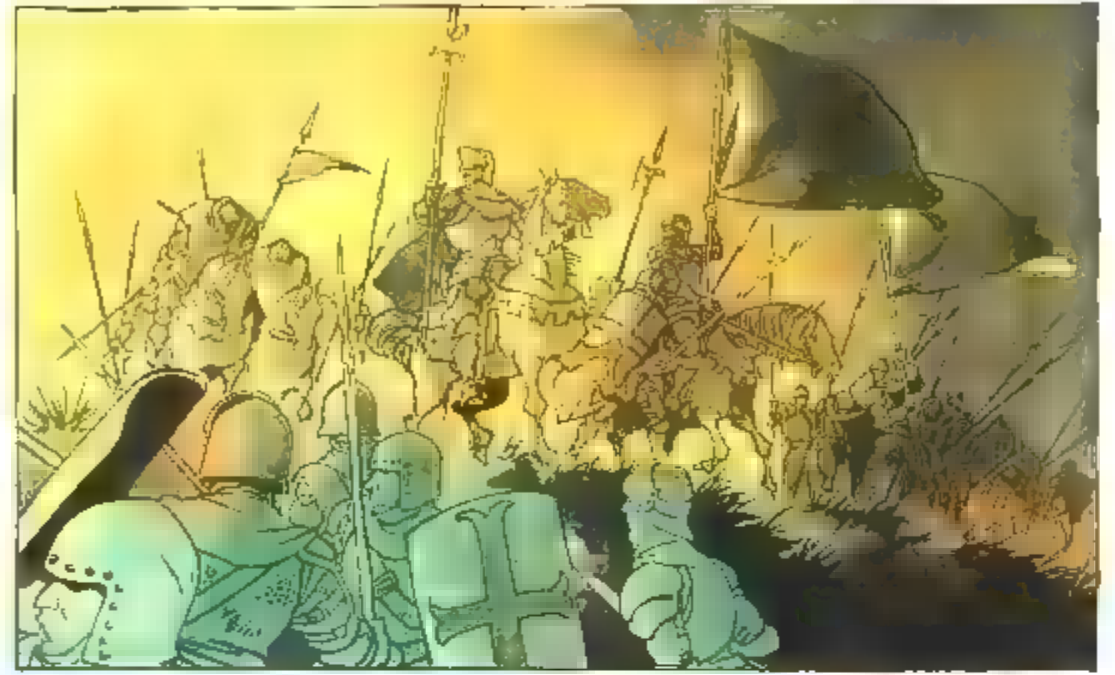
ええい!!
キサマのような 負け犬を 大将に据えた のが間違い だったわ!!
もお いい!!
あとは オレが!!

第2編

ALENCON

アランソン

王太子派は
総崩れに
なりました。

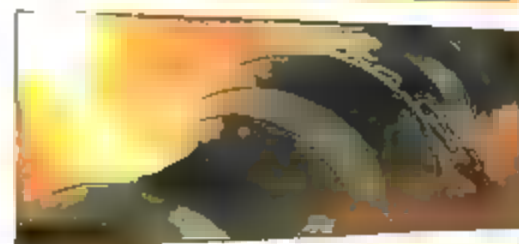
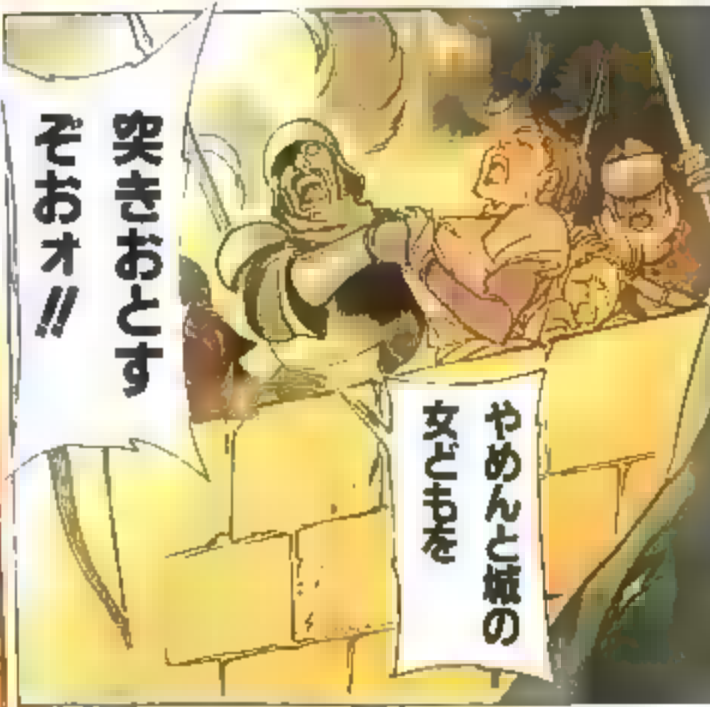
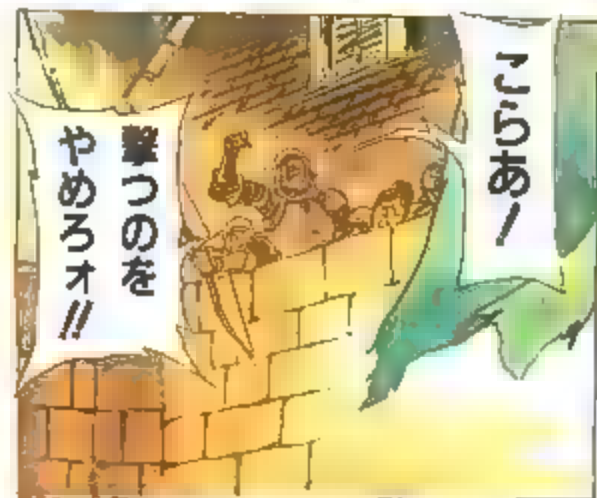
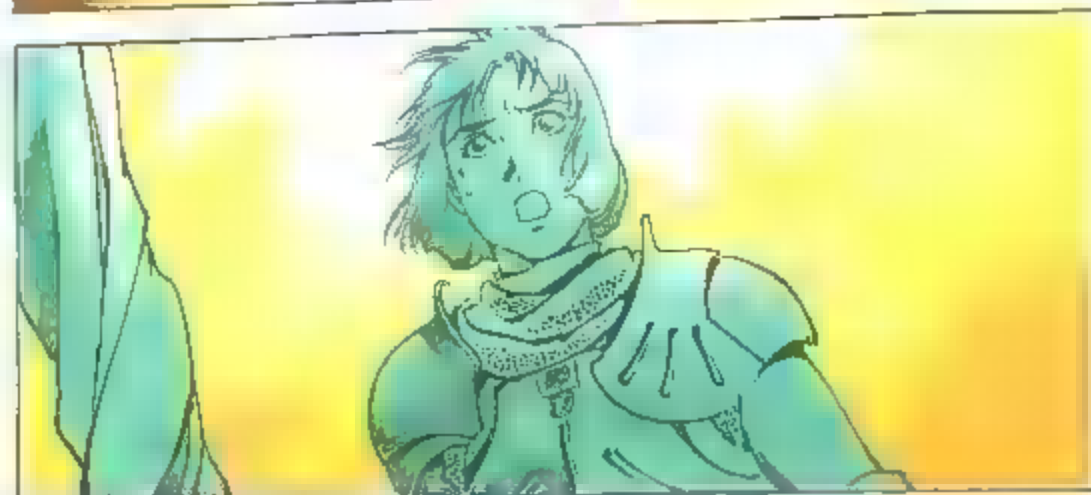
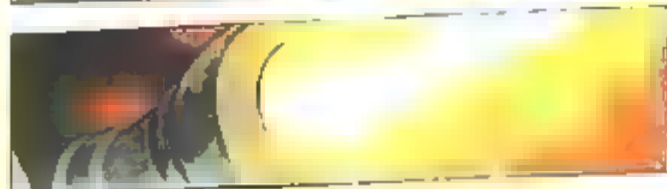
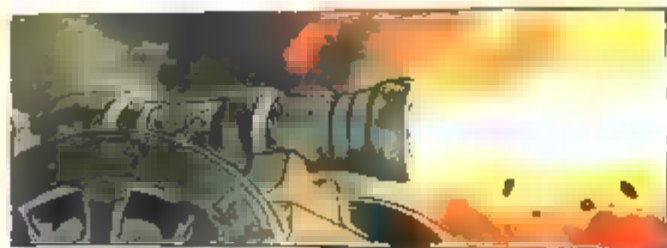
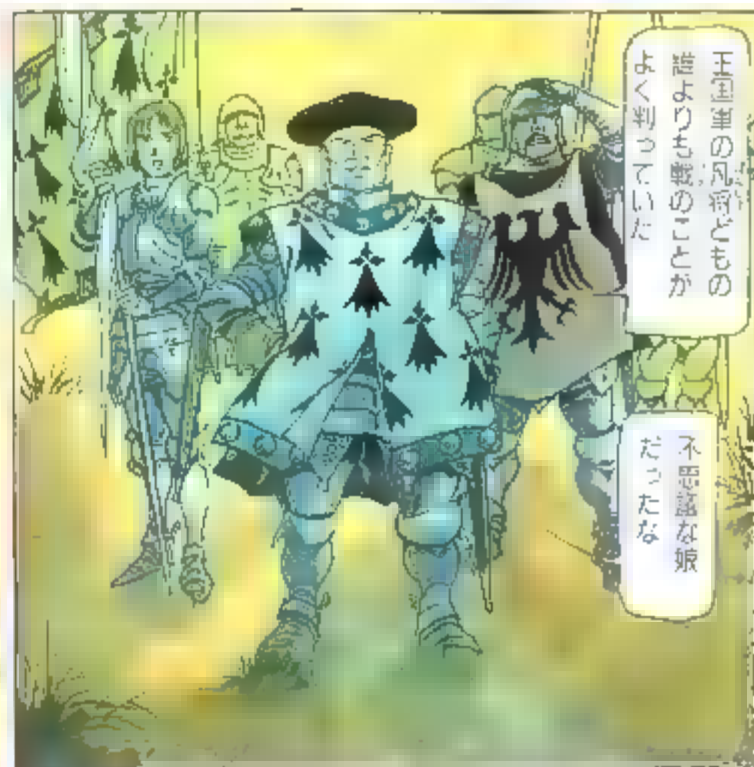
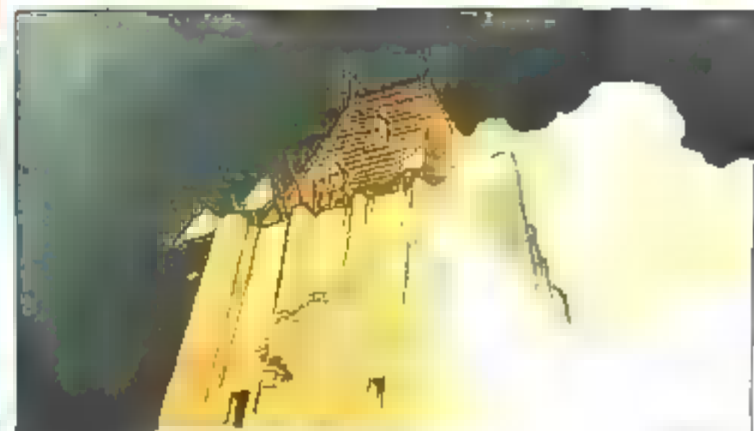
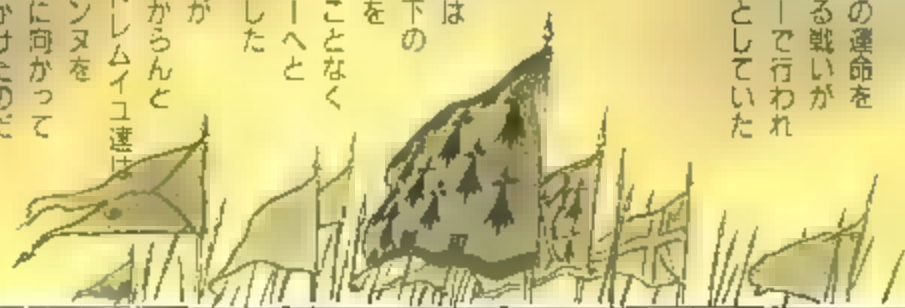
の様は
るで
フランス軍が
いつもながら
イギリス軍に
敗れ去って
いく光景の
ようでした。

が敗れたのです。
国王派が採った
イギリス流の新しい
戦法に……
しかし
それだけでは
ありませんでした。

敗れたのはまず
ルイ王太子自身
なのです。
彼が老獪な
リッシュモン大元帥の策略に
はまったのです。

な諸侯の支持を得て
るかに優勢でさえあったのに
その勢力を結集させて当たることをせず
一人先走った時にもう彼は敗れて
いたのでした。
ニエス・ソレルの名に
踊らされたのです。
女にはやってしまったのです。
さに禁じられての致命的な失態を
彼は緒戦で犯してしまったのです。

こらあ！
撃つのをやめろォ!!

やめんと城の女どもを
突きおとすぞおォ!!

きゃああ

そのジャンヌをシャルル陛下の取り巻きたちは
わしと戦うように仕向けた

オルレアンの囲みを
少女に打ち破られた後
イギリス軍は
タルボットを将として
反撃に出てきた
王国の運命を
決する戦いが
パテーで行われ
ようとしていた
わしは
王陛下の
指示を
待つことなく
パテーへと
出陣した
それが
けしからんと
ラ・トレムイユ達は
ジャンヌを
わしに向かって
けしかけたのだ
ジャンヌの軍とわしは
ボージャンシーの近くで
相対した。
わしとあの娘との
ただ一度の出会いの
場所がそこだ
わしは言った
「ジャンヌ　あなたは私と
戦うつもりだと聞いた
あなたが神の使いか
悪魔の使いか知らぬが
私は恐れますまい」
ジャンヌは
ひざまずいて
わしの膝を抱いた
その時　もし
あの娘と戦って
いたら
果たして
今日のように
苦もなく
勝っていたか
どうか……
……
わあああ

アニエスを助けよ！
アニエスを早く!!

アニエスは塔だ!!
館の塔にいるはずだ!!

助けよオ!!

あれです!!
あれがたしか「アニエスの塔」です!!
よし!
続け!!
お!
おおっ!!
わあっ!
お
ジャンヌだ!
少女だあ!!

アニエス様
アニエス・ソレル様!
おられるのですか?!
お迎えに参りました!
アニエス――!
の手の者ですか
それとも
誰です

!

アニエース!!

アニエス!!
おおおお

無事であったか!!

よかったよかったよかった!!
心配していたぞ!
叛徒どもの目を逃れるためやむなくここを出て各地を転々としていた時も決しておまえを忘れたことはなかった!!
どれほど会いたかったことか!!

わしが来たからにはもう大丈夫だ!
おそろしいことはない

かわいそうに…
この人たちは
いったいなんのために
死んだのだろう

武器をとって
戦ったわけでもないのに…
こんなに
むごたらしく
殺されるほどの
罪深いことを
この人たちがしたと
いうのだろうか…

国王様でも
王妃でも
名もない召し使いも
女子供もみんな
ひとつきりの命を持って
幸せを求めて
生きていただろうに

神様はまだ
これ以上の死を
お望みなのかしら
ジャンヌに辛い死を
おまめになったうえで
まだ……

この教会の方?
いいえ
旅の修道士ですよ
教会には誰もおりません

告解を
聞いてあげておられたのですね?

ええ
そうです

誰も?
立派なお坊様が大勢おられたのでしょうに…

……

あの…
お名前は?
マルタン・ラヴニュと申します

マルタン修道士様
お教えください

告解をせずに死んでも
人は天国に行けるのですか?

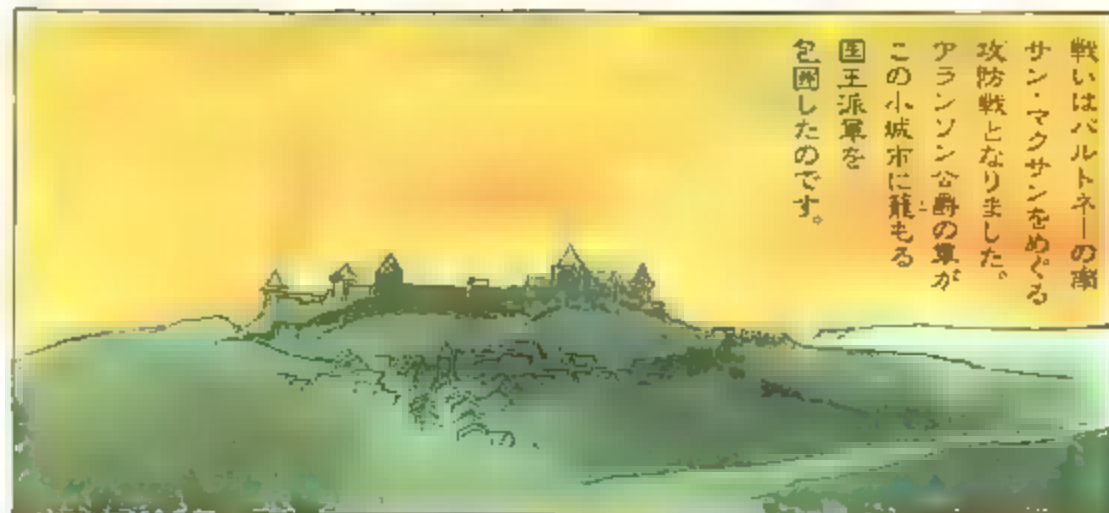
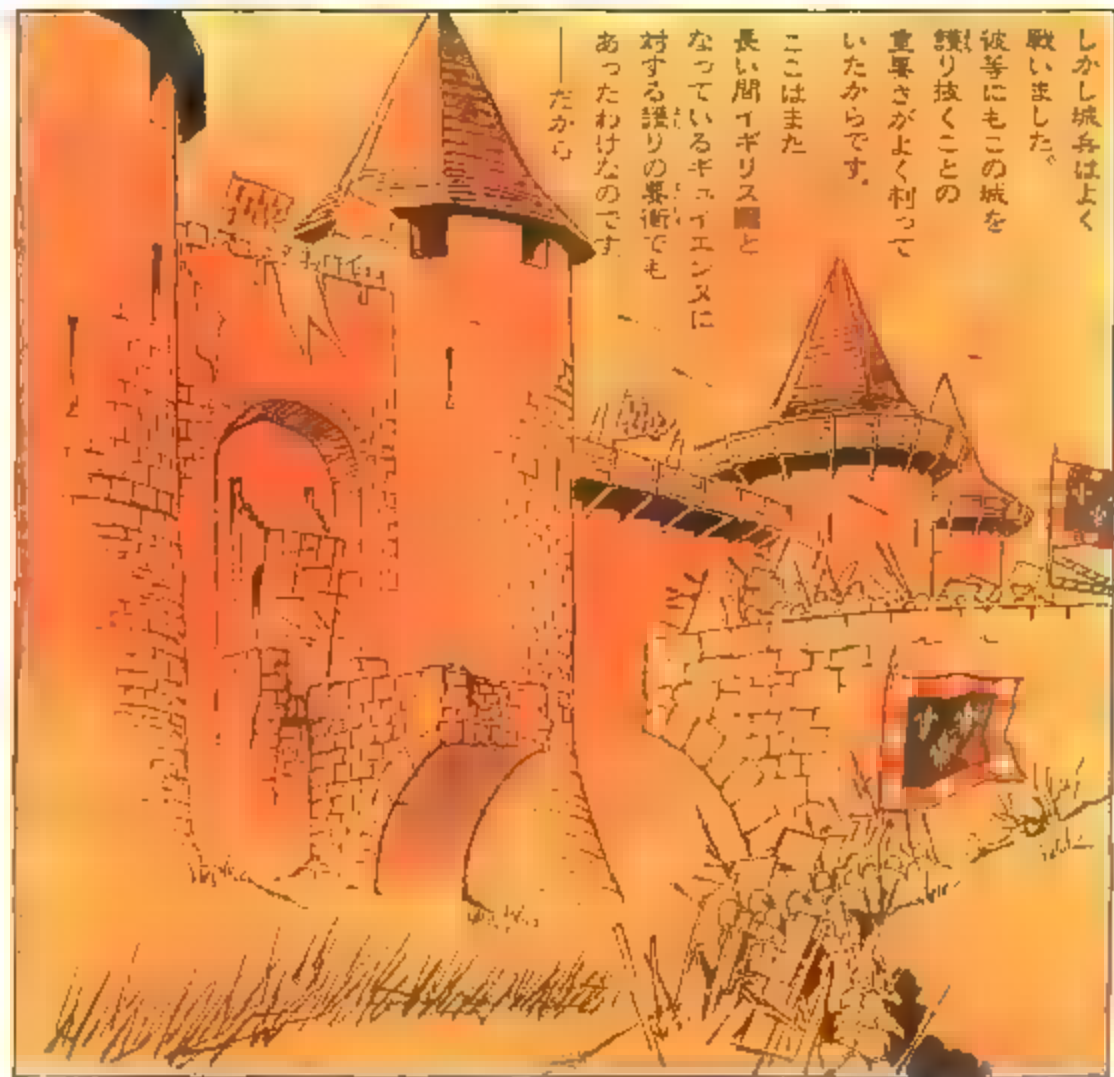
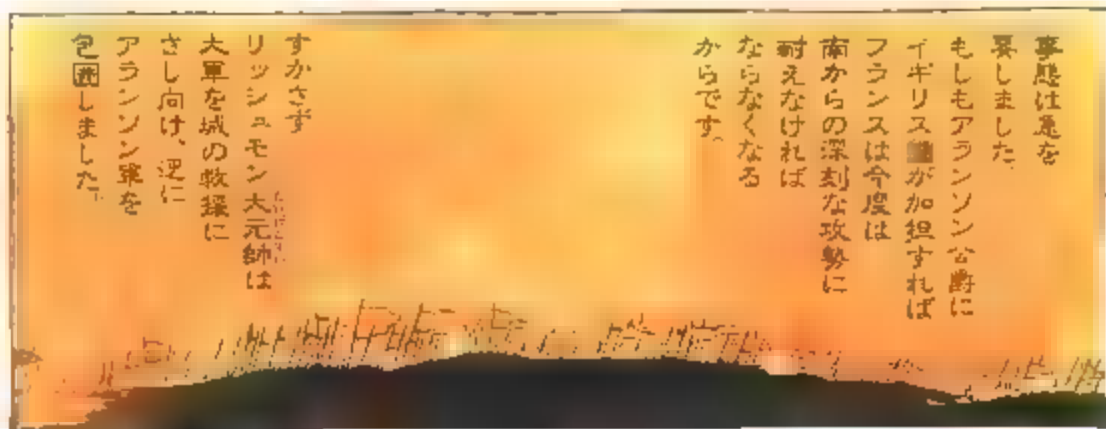
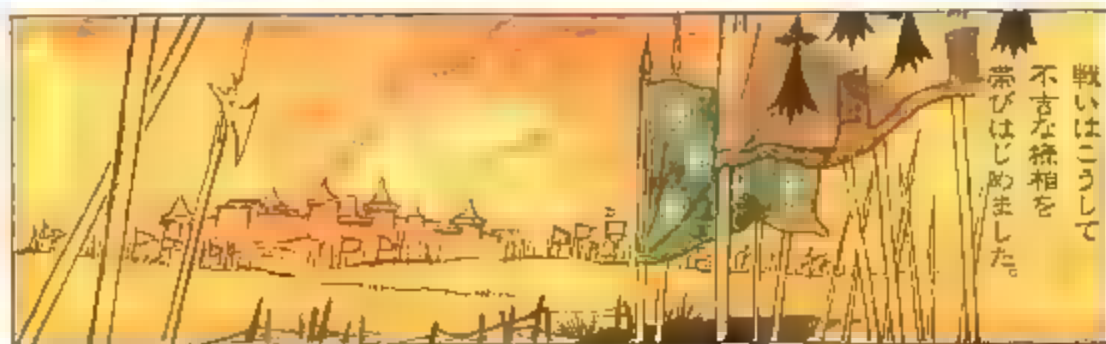
行けますとも
告解は罪を裁くためにあるのではありませんから
神は何人をも拒みません

人はみな神の羊です
迷える羊ですよ そうでしょう
だから死にのぞんで神を畏れるのです
だから告解を求めるのです
聞いてやりたいのですよ
それで天国への道行きが少しでも楽になるなら

全国を揺るがせた
プラグリーの大反乱

しかし反乱そのものが終息したというわけではありません。あくまでもリッシュモン大元帥に刃向かおうとした武将がまだ残っていたのです。
それがあのアランソン公爵です。

公爵は捨身の戦術に出ました。ロッシュ攻略の隙をついていっきにリッシュモン大元帥の領地パルトネーに攻撃をかけたのです。
アンジュ
アンボワーズ
オルレアン
トゥール
ロワール河
ブールジュ
シノン
ロッシュ
パルトネー
ポワティエ
サン・マクサン
オーベルニュ
ドーフィネ
(太子領)
ギュイエンヌ

戦いはバルトネーの南
サン・マクサンをめぐる
攻防戦となりました。
アランソン公爵の軍が
この小城市に籠もる
国王派軍を
包囲したのです。

しかし城兵はよく
戦いました。
彼等にもこの城を
護り抜くことの
重要さがよく判って
いたからです。
ここはまた
長い間イギリス側と
なっているギュイエンヌに
対する護りの要衝でも
あったわけなのです
——だから

事態は急を
要しました。
もしもアランソン公爵に
イギリス側が加担すれば
フランスは今度は
南からの深刻な攻勢に
耐えなければ
ならなくなる
からです。
すかさず
リッシュモン大元帥は
大軍を城の救援に
さし向け、逆に
アランソン軍を
包囲しました。

戦いはこうして
不吉な様相を
帯びはじめました。

どのように結着するにせよ
ロッシュを上回るような
むごたらしい殺戮が
また行われることは
確かなようでした。
わたしはいたたまれず
自ら申し出て
使者に立ちました。
フランス人同士の
無益な殺し合いを
避けたいという気持ちで
いっぱいだったのです。

ひさしぶりだな
たしか以前にオルレアンで会っているな
バタール・ドルレアンの館で――

ロッシュに出没した偽ジャンヌというのは
おまえだったのか

お言葉ですが
私は偽ジャンヌなどではありません

嘘をつけ!!

ロレーヌのボードリクールの子エミール・ド・ボードリクールでございます
父の命を受けシャルル王陛下の下に参陣いたしました

それでは何故
ボードリクールの
旗幟を立てず
ジャンヌの旗を
かざす?!
それが
少女・ジャンヌの
名を■ることで
なくてなんだと
いうのだ!!

この旗は
王陛下から
直じきに
賜わったのです
それを拒む
ことが
出来ましょう
か?!
少女・ジャンヌと
同じようにお呼び
することを
お許しください
「うるわしき
公爵様」
すでに決裁は
下されたので
ございます!
ふん
まことに
過分な
御厚意を
陛下も
おまえごときに
与えたもうた
ものよ…
それで
私に何を
勧めようと
いうのだ?
そのことで
ございます!
旗を巻いて
リッシュモンの
軍門に降れ
というのか?

ブルボン公も
ルイ王太子も
兵を収められ
ました!
ロッシュでは
たくさんの血が
流されました
もう充分では
ございませんか!
これ以上戦って
いったい王国と
貴方様に
どんな良い報いが
ございましょう?!
王陛下も
リッシュモン大元帥も
今ならば決して
厳しいお咎めは
なさらないと
言っておられます!

戦をおやめ
ください!
かつて貴方様を
お慕いした少女も
きっと
そう望んで
いるはずです!!

ボードリクールの子
他の者は
知らぬ
が 私の前で
だけは
もう二度と
ジャンヌの
名を
口に
するな…

はっきり言ってやろう
私は…

シャルル王陛下をお恨みしているのだ!!

!

王陛下は私をジャンヌから引き離した
何故だと思う?
私が更に名を高め
王の威をおびやかすことを畏れたからだ!

あの方はそういう人間だ
器量が小さく
嫉妬深くてしかもいつも我が身のことだけをしか考えぬ……

あのような人を国王に戴くくらいなら
この　いっそイギリスにくれてやりたいわ!!

公爵様……

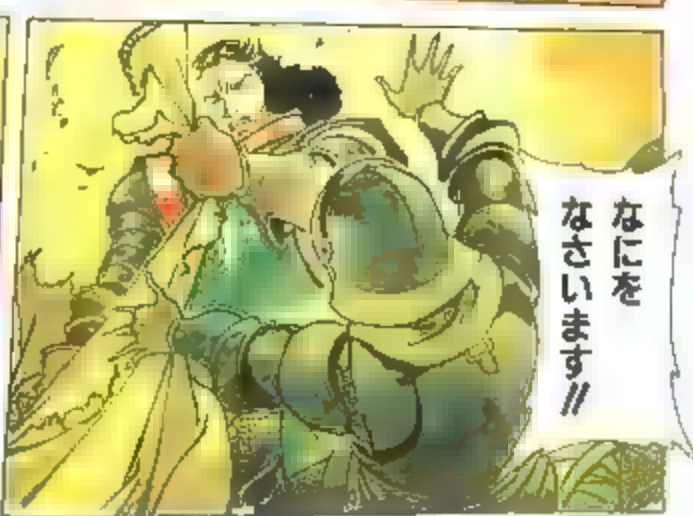
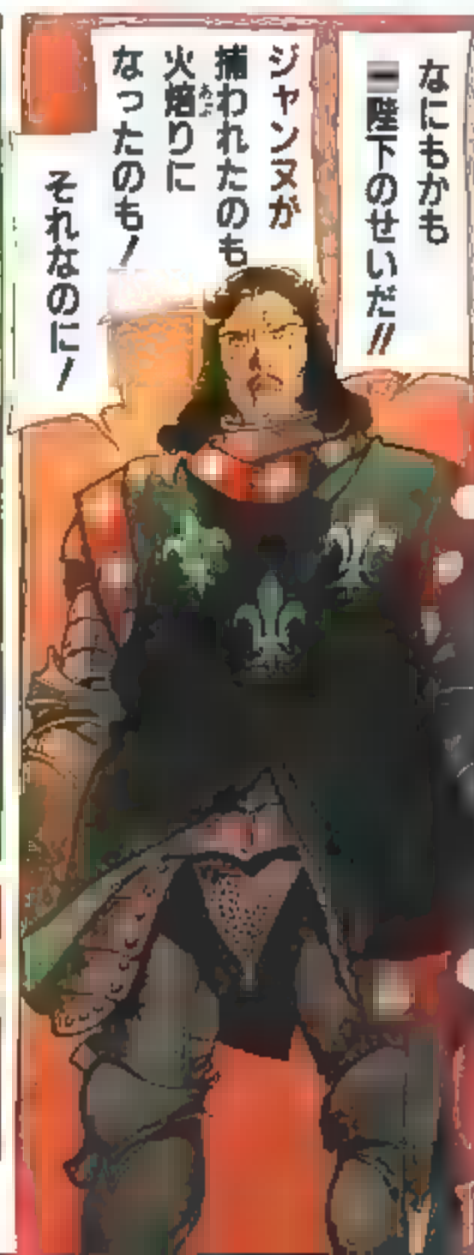
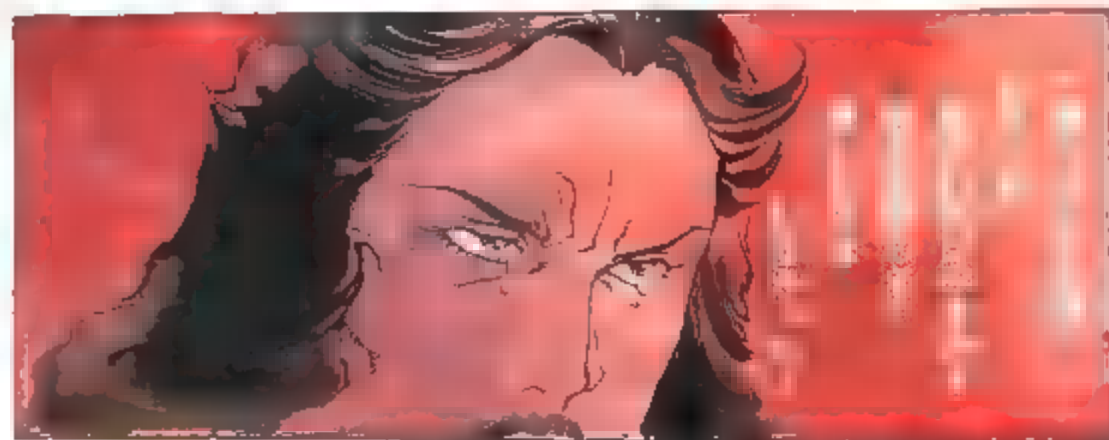
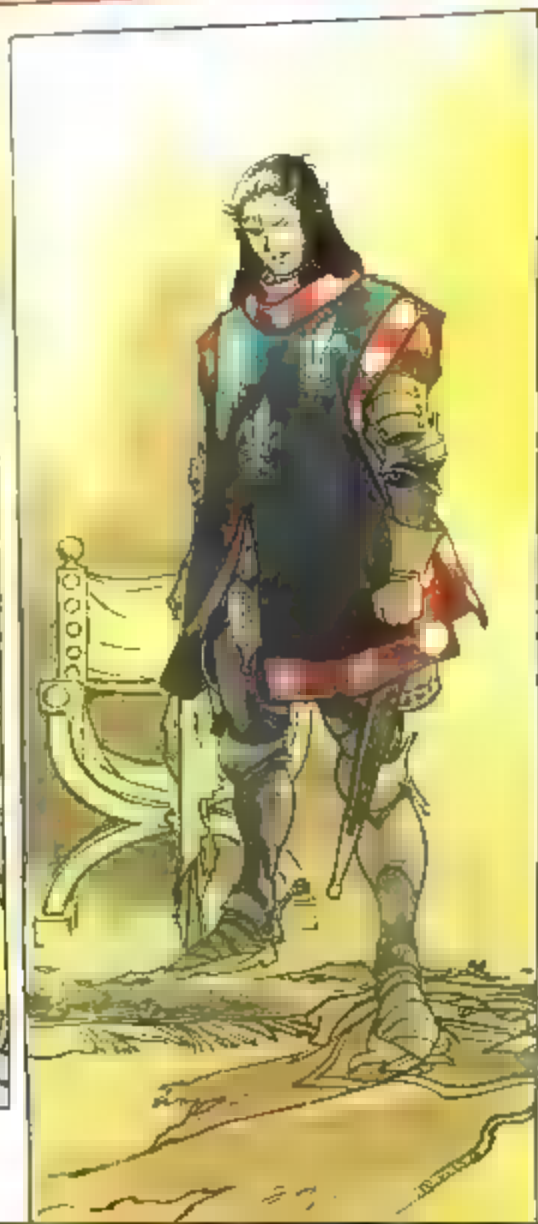
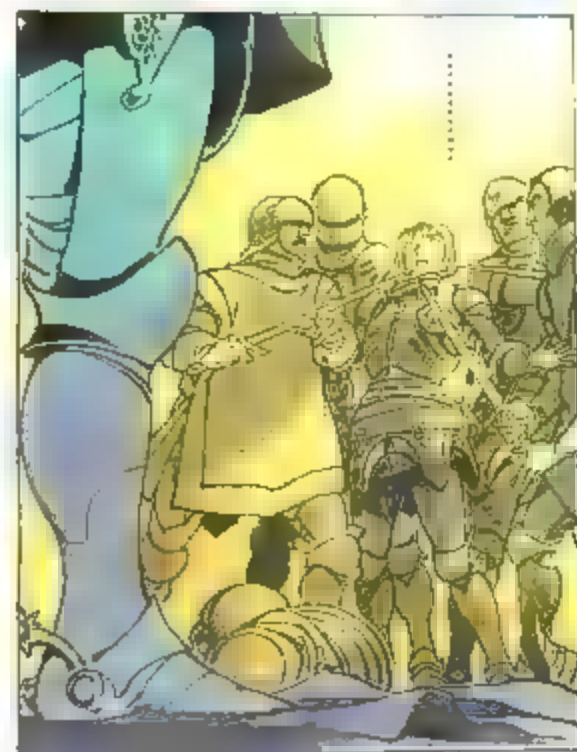
なにもかも陛下のせいだ//
ジャンヌが捕われたのも火焙りになったのも!
それなのに!
いまさらこんな手を使って
ジャンヌを利用しようなどと//

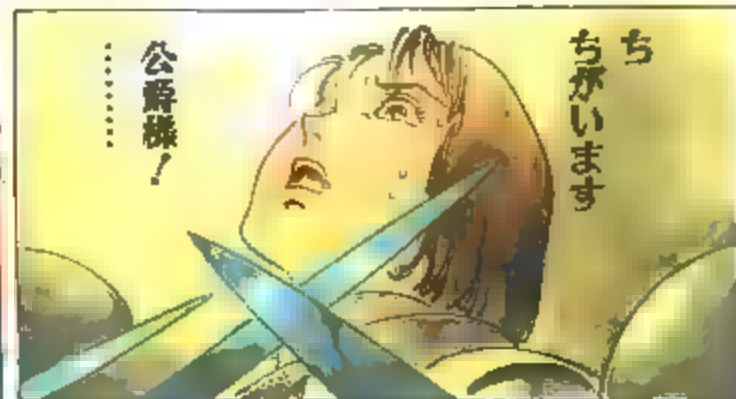
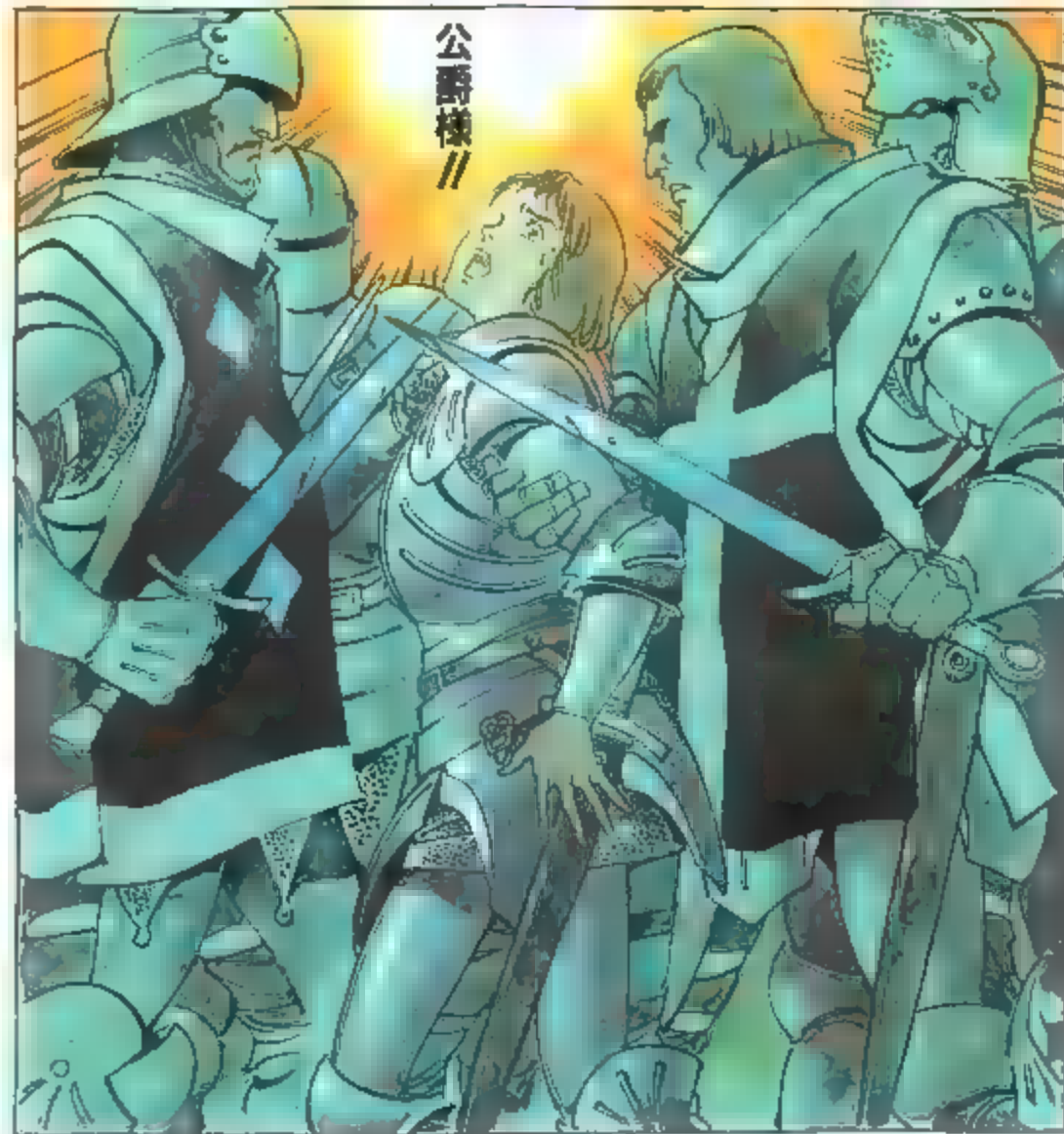
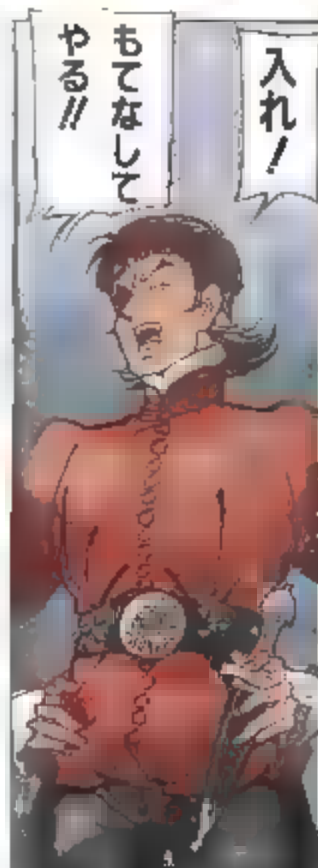
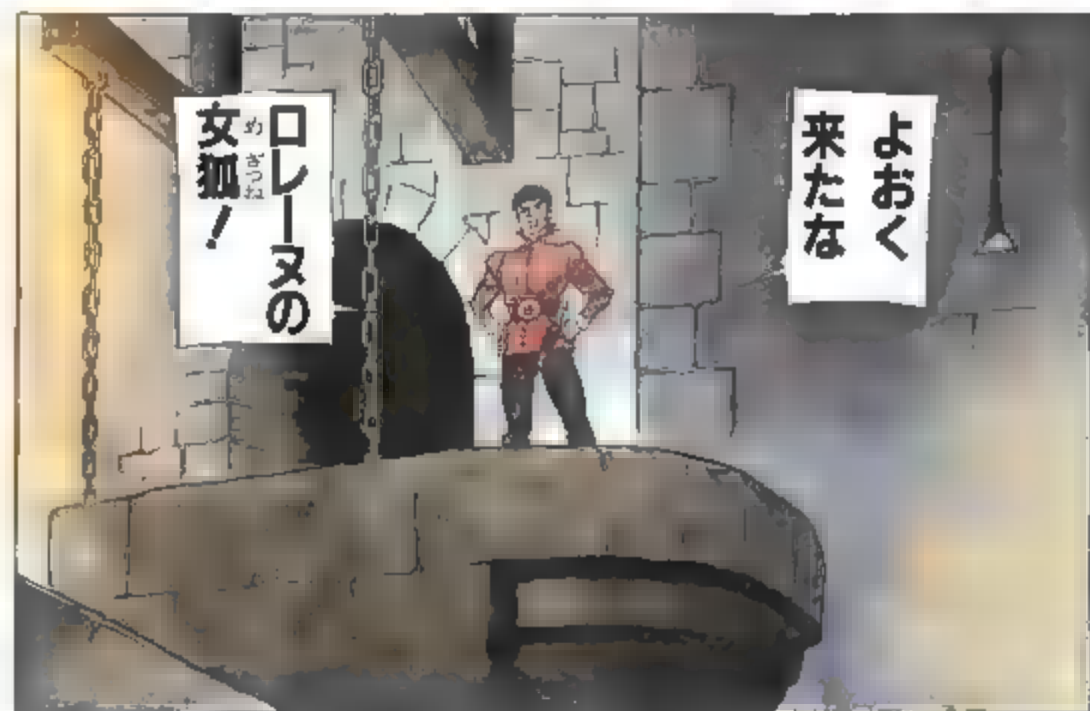
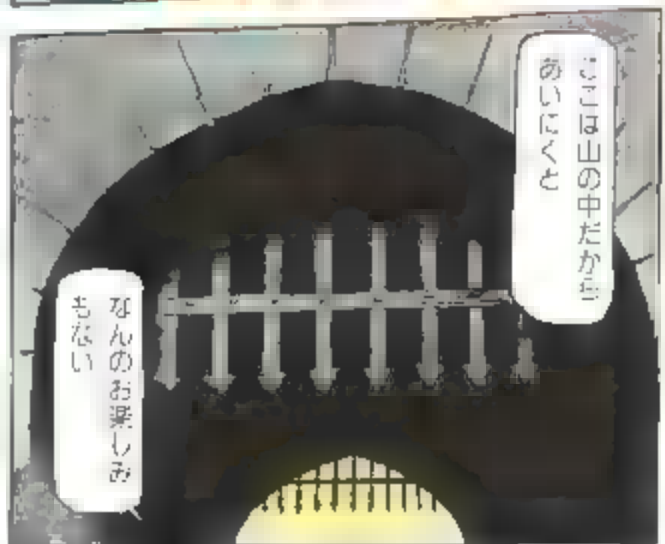
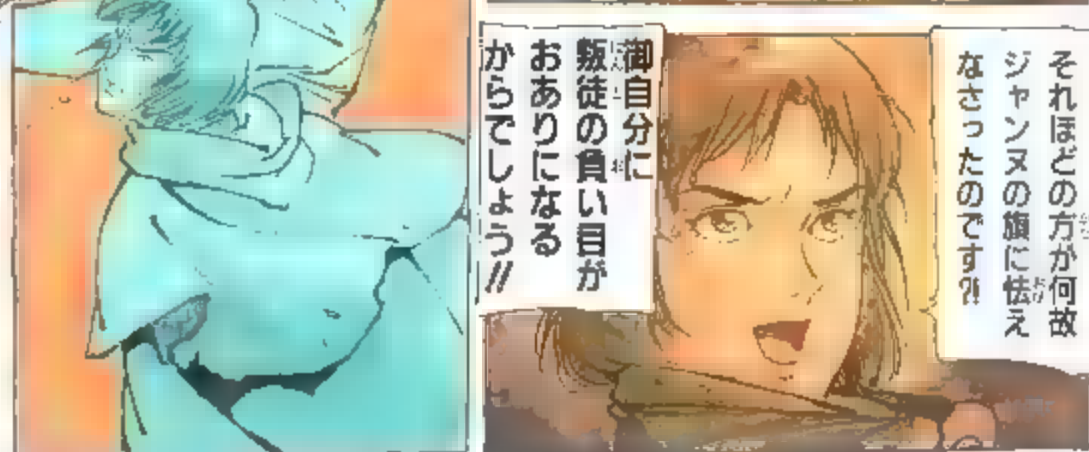
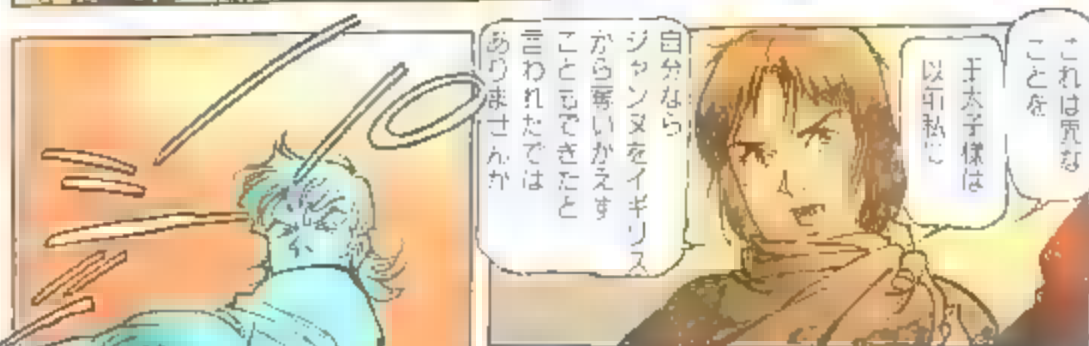
……

……

ひとおもいに殺させなかったのを私の慈悲だなどとは思うなよ
おまえごときの血で私の陣屋を汚させたくなかったからだ

ジャンヌの名を傷つけることになるのも心得ず主に乗せられたうつけ者め！
愚かというだけで許すほどに私は甘くないぞ
いずれたっぷりと罪の償いはさせてやる

第3章

MARGUERITE

マルグリット

フランス中部高地・
オーベルニュ地方
シャトー・ダリューズ

よおく来たな
ロレーヌの女狐(めぎつね)！

退屈していたところだ！
いいところに来た！
入れ！
もてなしてやる!!

さすがにアランソンだ
オレの所へよこすとはよく気がきく
なによりの戦利品だ
?!
ここは山の中だからなあいにくと
なんのお楽しみもない

ここから見渡せば
天下の情勢は一望の
もとだ

まるで天上の
神の座にいるような
心地がする

なんだな…
下界では
まだ

つまらんいざこざが
続いているようだな

……

あああ
いやだ
いやだ

無能な王を
いただく
俗世間は
うんざりだ

女!!

エミールと
言ったな?!

はて

いったいなにをお訊きになりたいのでしょう?

わたしははじめから今までエミール・ド・ボードリクール

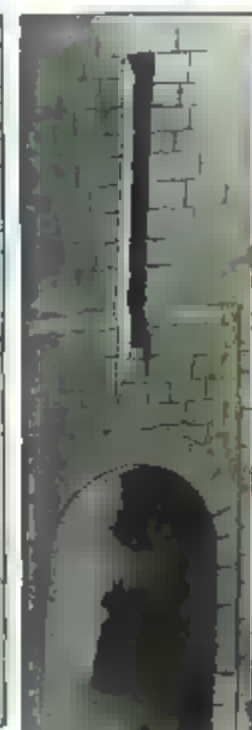
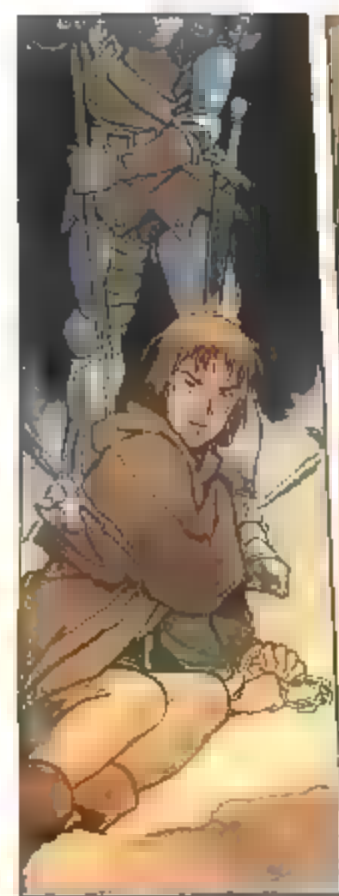
一度もジャンヌを名乗ったことなどございません

理屈だなたしかに

しかしおまえは女なのに男のなりで戦場に出た

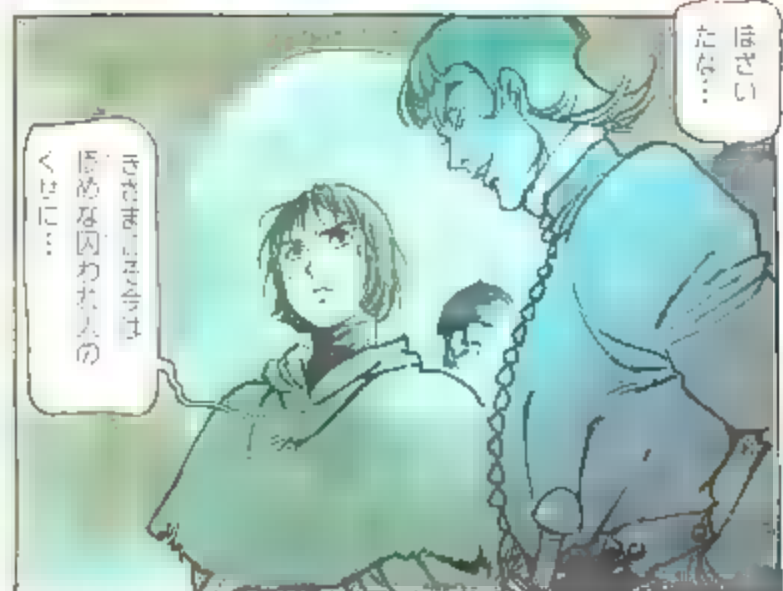
しかもジャンヌの紋章の旗を持ってた

おまえ自身がどうであれおまえはジャンヌを演じさせられたんだ

我々を畏れ浮足だたせるためにな!

オレは血をみるのがキライじゃない
しかも 言うことをきかぬ者には容赦しない主義だ
男であれ女であれ
な!!

王太子様
あなたはもう
充分すぎる
くらいに
人々の血を
流しました

それもただ
早くその頭に
王冠を載せたいと
いうそれだけの
理由で…
いずれあなたの
良き臣民に
なったかもしれない
ロッシュの人々をも
多く死なせて
しまいました

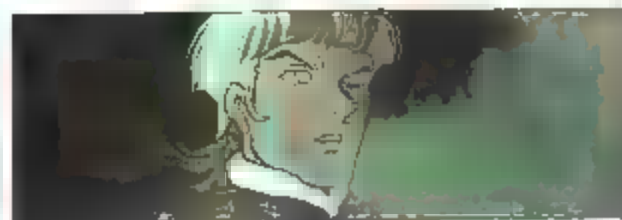
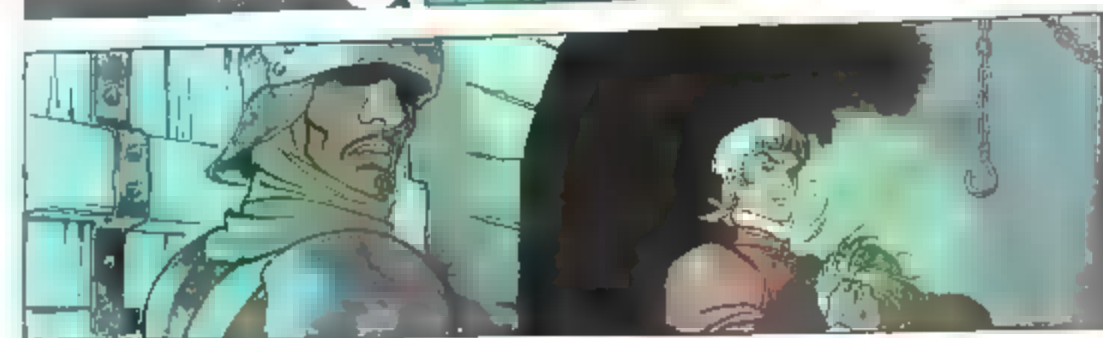
しかもあなたは
負けたのですよ!
恥をお知り
なさい!!
男なら
いさぎよく
王陛下の
軍門に降り
サン・マクサンの
アランソン公にも
降伏をお勧めに
なることです!!

ふ
ふふ…
ほざい
たな…
きさまこそ今は
囚われ人の
くせに…

オレは
負けて
なんか
いない!!
だまされた
だけだ!!
汚い古狸
どもにな!!
それを負けおしみと
いうのです!!
いいかげんに
お認めなさい!!

あなたはまだ
お若いのです
べきです
今は王陛下と
お力をあわせて
…
誰が聞くか!
まっぴらだ
あんな父親に
これ以上
へつらうことなぞ…
オレはただ
誰がオレを嵌めたか
それを知りたいんだ
悪知恵の源を
探り当てたら
こんどは…
そいつからまず
血祭りに
あげてやる!!
言え!!
キサマ
いったい誰の
さしがねで
動いた!!

誰でもありません！
わたしはただジャンヌの意志を！

そんなたわ言をまだ口にするか!!
オレをどこまでも怒らせようというんだな！
よおおし!!

拷問は悪魔のすることです！
ジャンヌを殺したイギリスの手先のあの審問官たちだって…
汚すことはしなかったのですよ…
それなのにあなたは…
ああ やってやる
地獄の悪魔のようにキサマをいじめぬいてやる

マルグリット……

マルグリット
なぜこんな所に来た
マルグリットマ

その方をどう
なさるのです?

どう
なさるのです?!

どう…って

ふん!

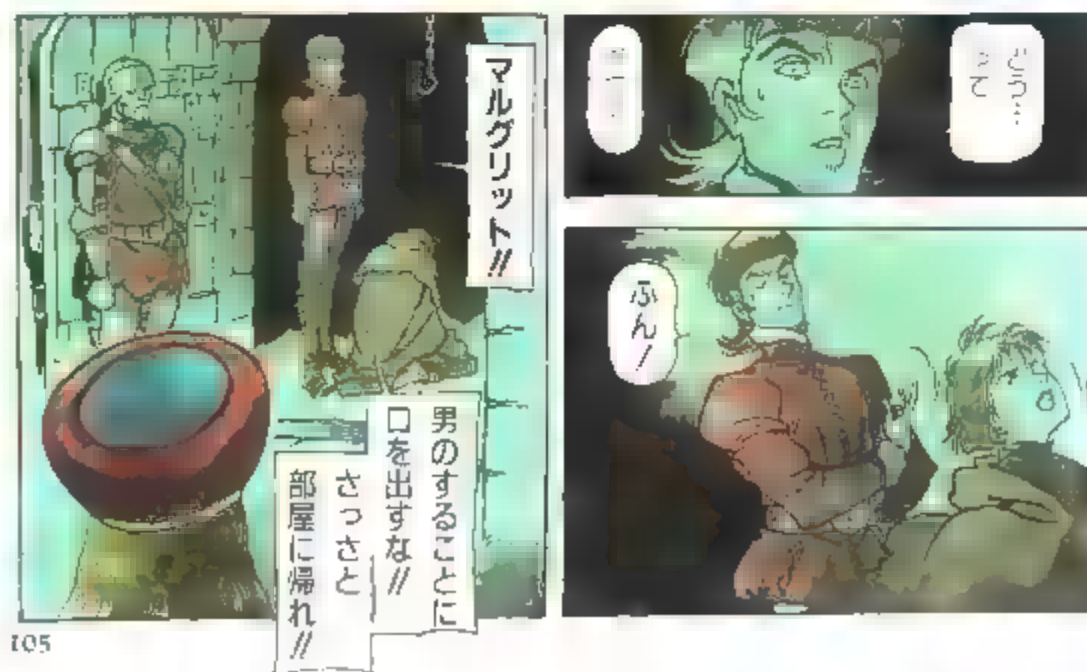
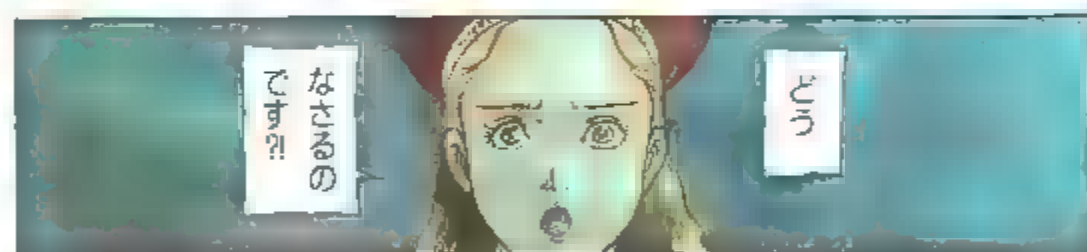
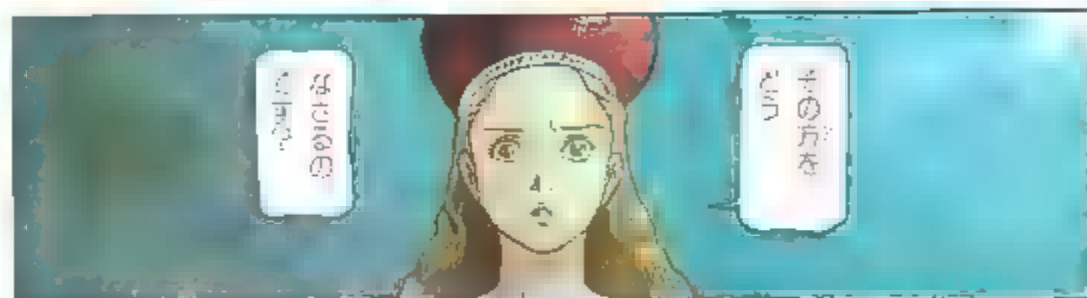
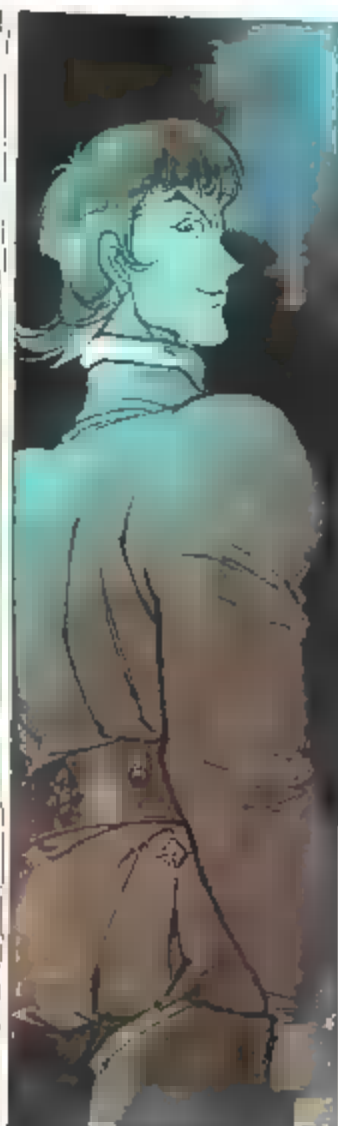
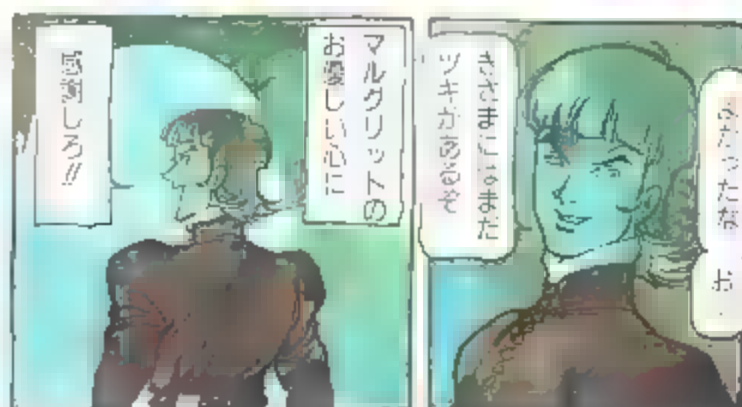
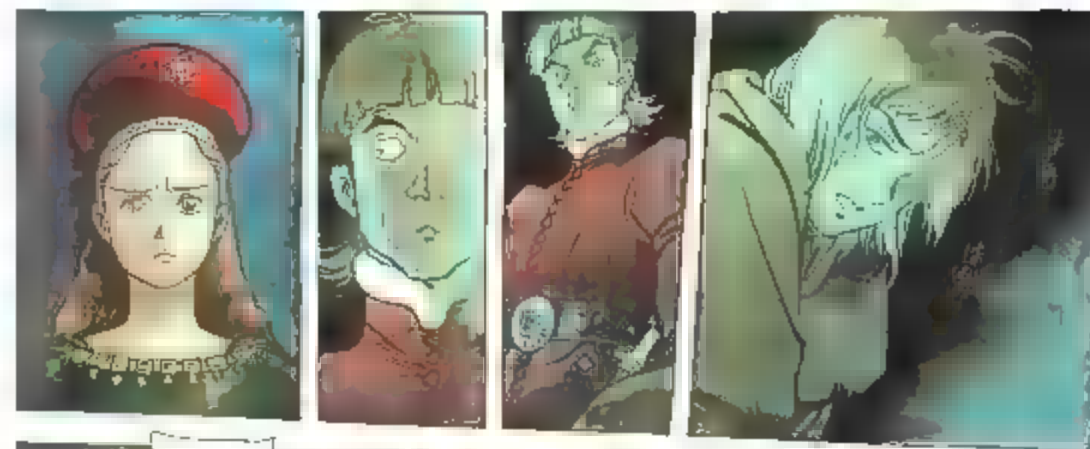
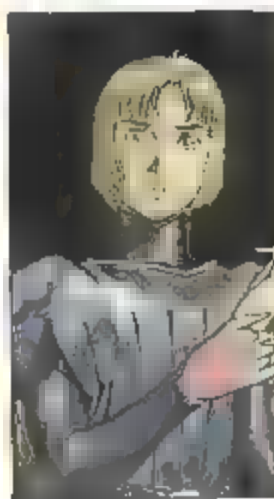
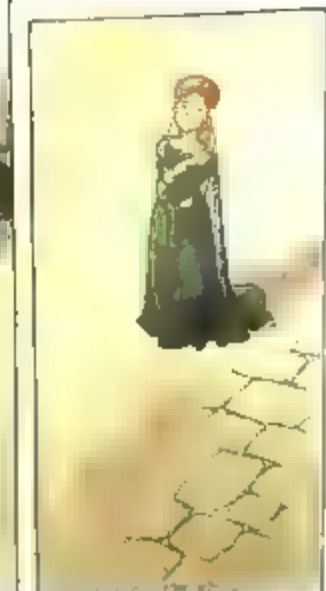
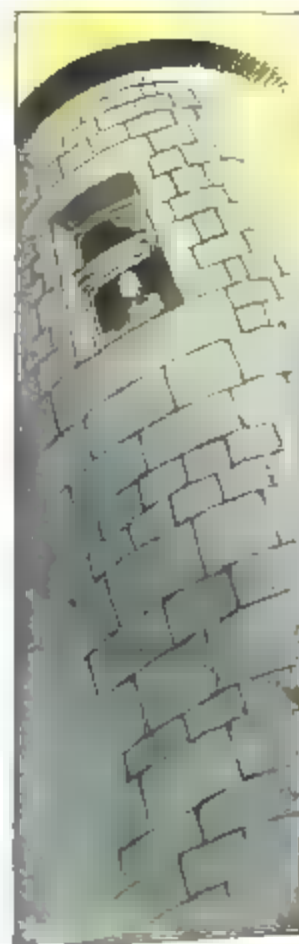
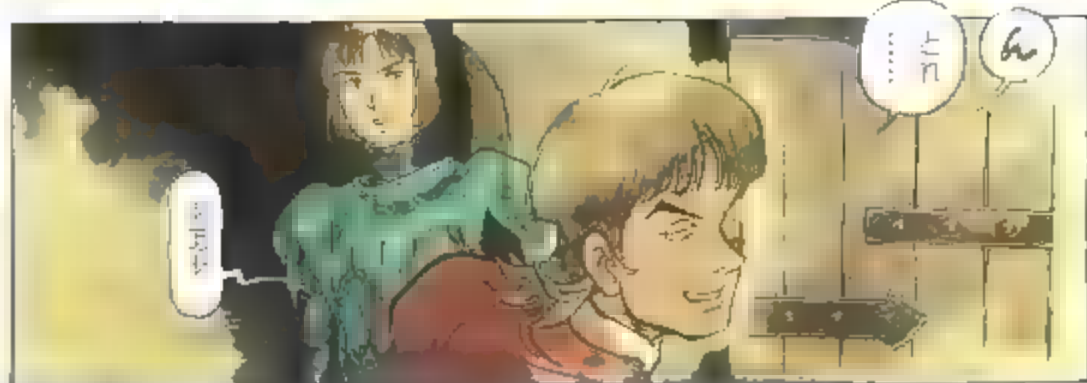
マルグリット!!
男のすることに口を出すな!!
さっさと部屋に帰れ!!

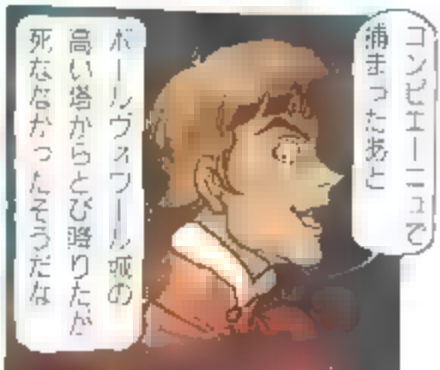
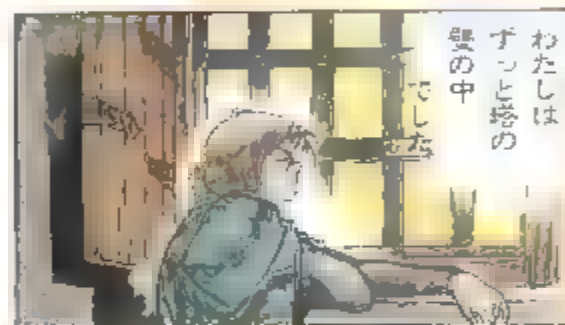
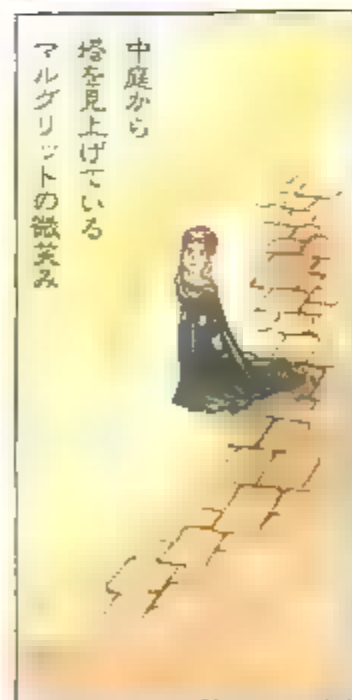
こいつの手錠をはずせ!
服もクサいとりかえろ!
部屋は西の塔だ!!
きさまにはまだツキがあるぞ
マルグリットのお優しい心に
感謝しろ!!

……

ふふ……

案外
むずかしいぞ

ん
どれ……

オレの姫だ
スコットランド娘だ
歳はまだ
十三
なかなかの
シャジャ馬だぞ
乗りこなすのには
けっこう
ホネがおれる
おまえが
気にいったようだ
ありがたく思え
未来の王妃に
ひきたてて貰えば
きさまの将来は
バラ色だぞ
ただし
命があったら
の話だ!
オレは
キサマを
生かしたまま
ここから出す
つもりはない!

それがイヤなら
逃げて見せろ!
オルレアンでの
魔法もどきを
もう一度ここで
やってみせろ!
なんでもジャンヌは
ガチャ
コンピエーニュで
捕まったあと
ボールヴォワール城の
高い塔からとび降りたが
死ななかったそうだな
オレの目の前で
その真似事が
出来たら
なるほどきさまは
ジャンヌの再来だ
いうことをきいて
やってもいいぞ
……

囚われの日々は
空しく
うたかたのように
過ぎてゆきました。
狭い中庭に
射す日ざしも
いつしか
春から初夏の
色合いに変わりつつ
あるというのに
わたしは
ずっと塔の
壁の中
でした
深い水槽の底で
息づくような毎日
そこに訪れる
かすかな波立ちといえば
中庭から
塔を見上げている
マルグリットの微笑み
でもそれは
危うそうな
悲しげな
微笑み
なのです。
水槽の外からの
微笑み
だからわたしには
微笑み返せない
微笑み
むしろわたしには
つらい微笑み
その微笑みだけが
なぐさめの毎日は
まるで
ルイ王太子が
わたしに加えている
拷問のようでした
カカカッ
カカッ

アランソンが降伏した?!

はい
公の軍隊はよく戦いましたが
リッシュモンの軍包囲によって糧道を絶たれ 最後は城兵を追いつめましたものの
城の内外からのはさみうちとなり あえなく……
……

腰抜けめ…

アランソンも所詮はその程度の男かっ!!

お言葉ですが 公は御立派です!

増援もなくよく今日まで持ちこたえられました!!

わかっているっ!!
ブルボンやバタールやラ・トレムイユ達がもっとふがいないからいかんのだ!!

それとブルゴーニュ公…フイリップ・ル・ボン…
なぜあいつはオレに味方しないんだ…
今こそ父を倒す好機だというのに…

マルグリットオオ!!

またどこかに隠れているな!!

マルグリットオ!!

出て来い!

出て来てオレの足を舐めろ!!

!

もしや!

マルグリット様?!

もっと早く来たかったわ
見張りが厳しくて…
いけません マルグリット様

やっと隙を見つけたの!

お会いしたかった……!

こんな所を王太子様に見つかったら…
早くお帰りになってください!

ルイ様は私のことを
なんとも思っていないわ
ただ利用して
あとは時々ケモノのように弄ぶだけ!

愛がほしいの!
優しい本当の愛!!
ずうっと待っていたわ!
わたしを愛してくれる人が来るのを!!

エミール・ド・ボードリクール!
わたしを愛して!

お願い 愛して!
わたしを好きになって!!

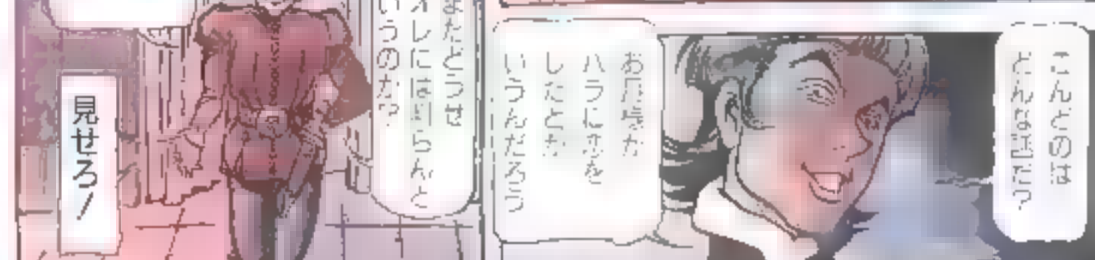
そうしたらあなたを逃がしてあげるわ!
今はまだムリだけど
そのうちにきっと!!

ああでも…
その時にはわたしも連れて逃げて!
あなたと一緒ならどこへでも行くから!!

接吻して!
エミール!!

お願いよ
くちづけして！
ここに！
この手に！

今夜は遅くまで部屋をあけていたのに
えらく早いおめざめだな

なんだ?
また「詩」とかいうものを
書いているのかな?
こんどのはどんな話だ?
おや
なぜ隠す?
またどうせオレには判らんというのか?
ところが今回はどうも判りそうな気がするんだ
見せろ!
見せろ
オレが批評してやる

見せろと
言っているんだ!!

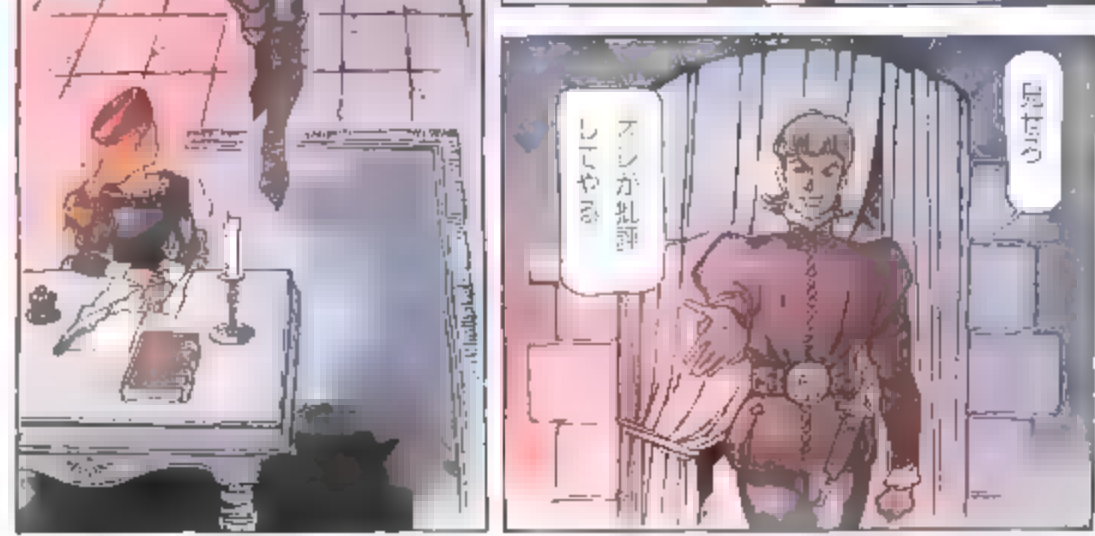
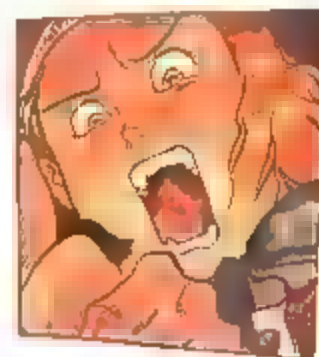
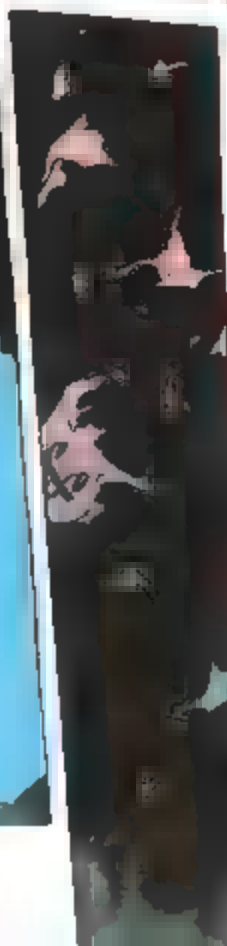
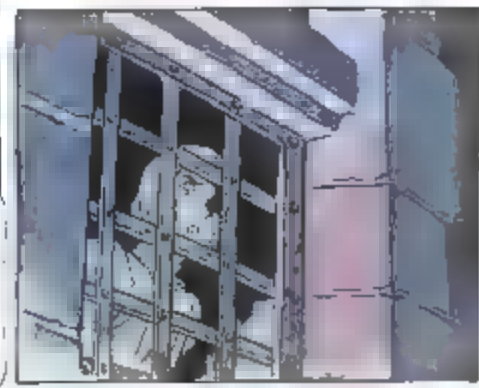
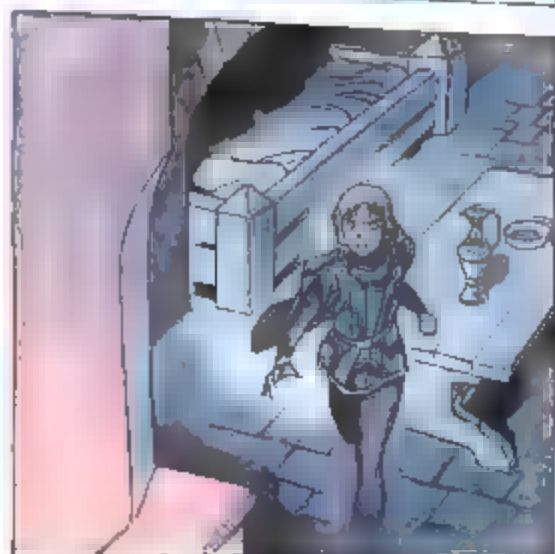
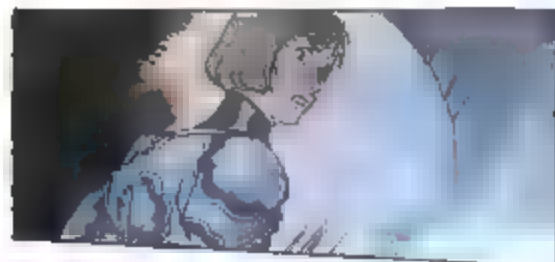
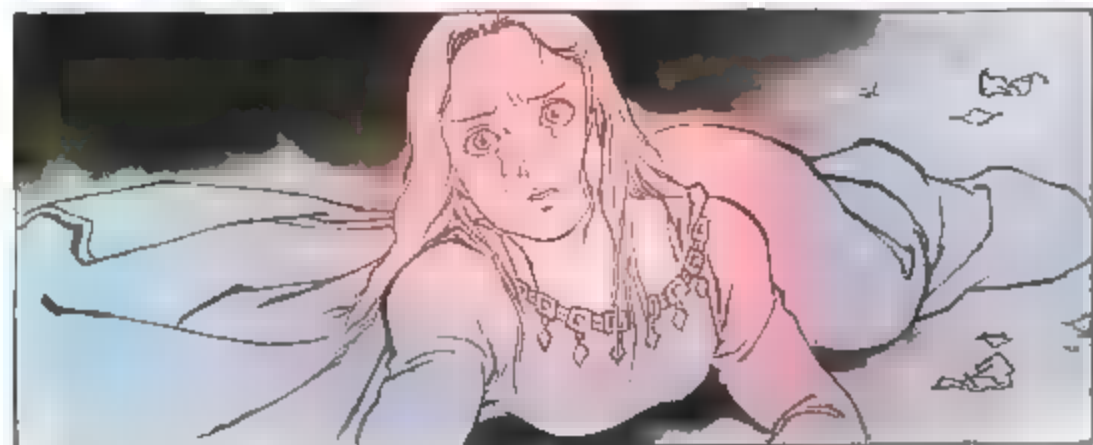
いやです!!

見せろ!!
あなたに見せるくらいなら
破いて食べてしまう!!

……

声が聞こえたような気がしたけど……

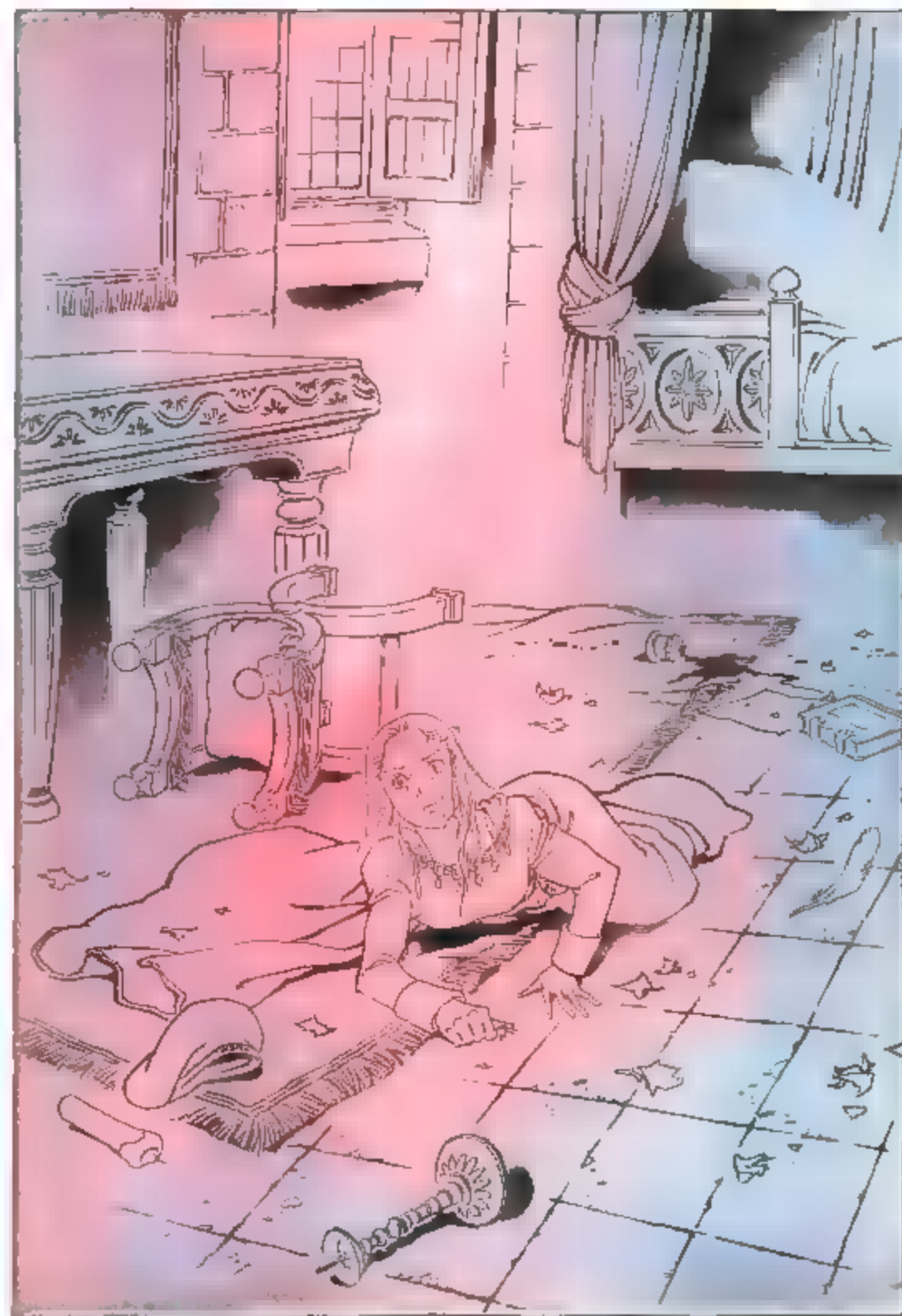
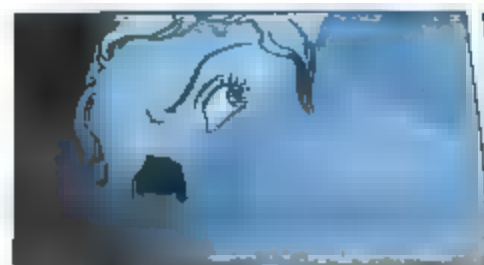
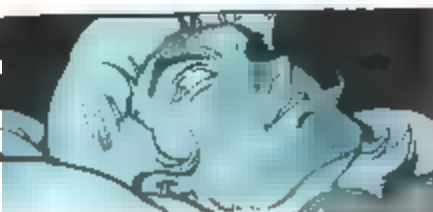
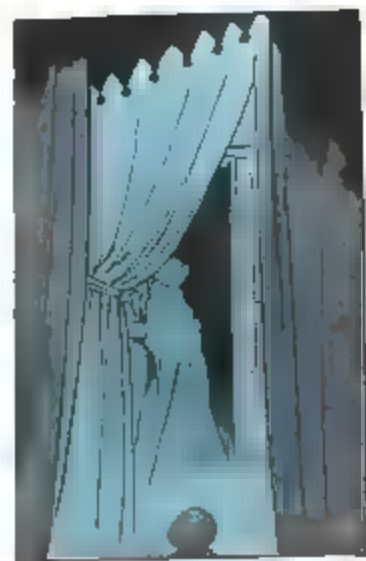
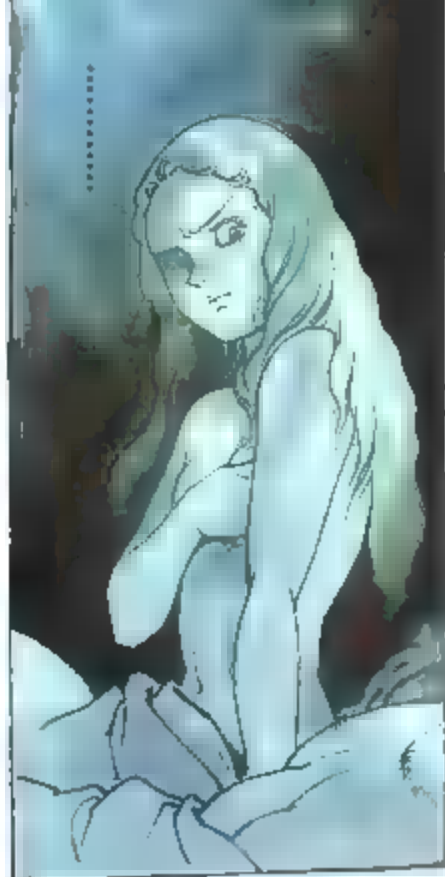
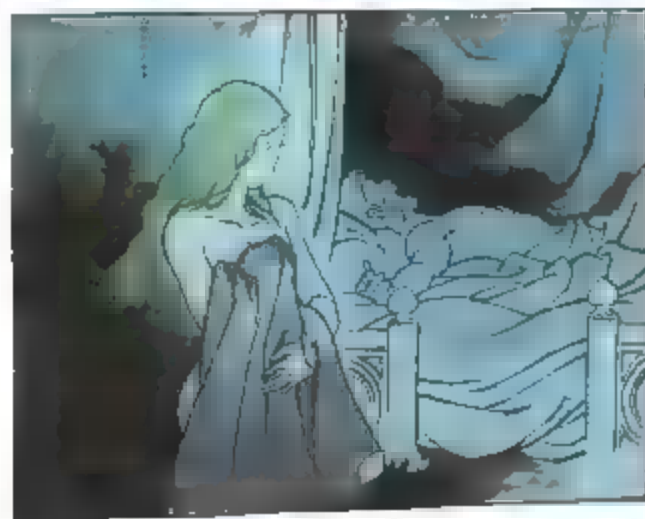
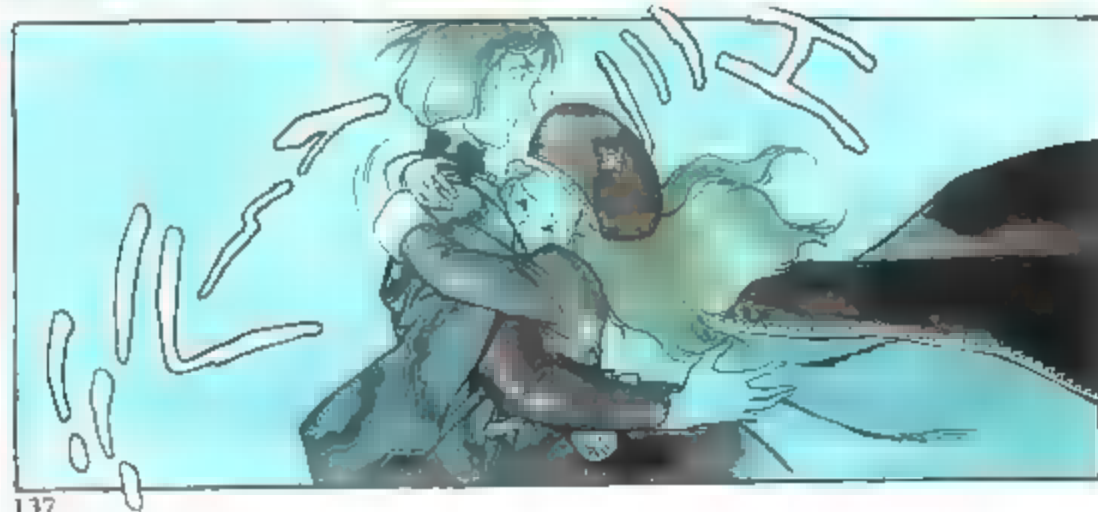
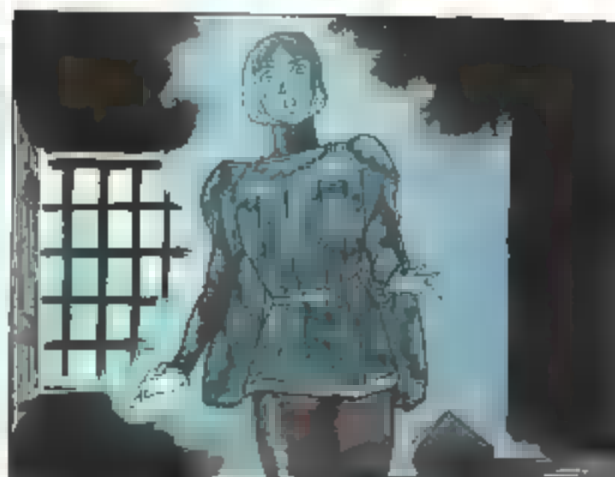
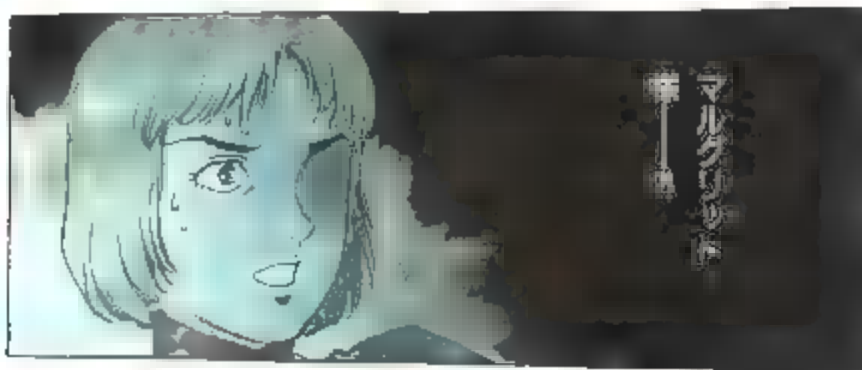
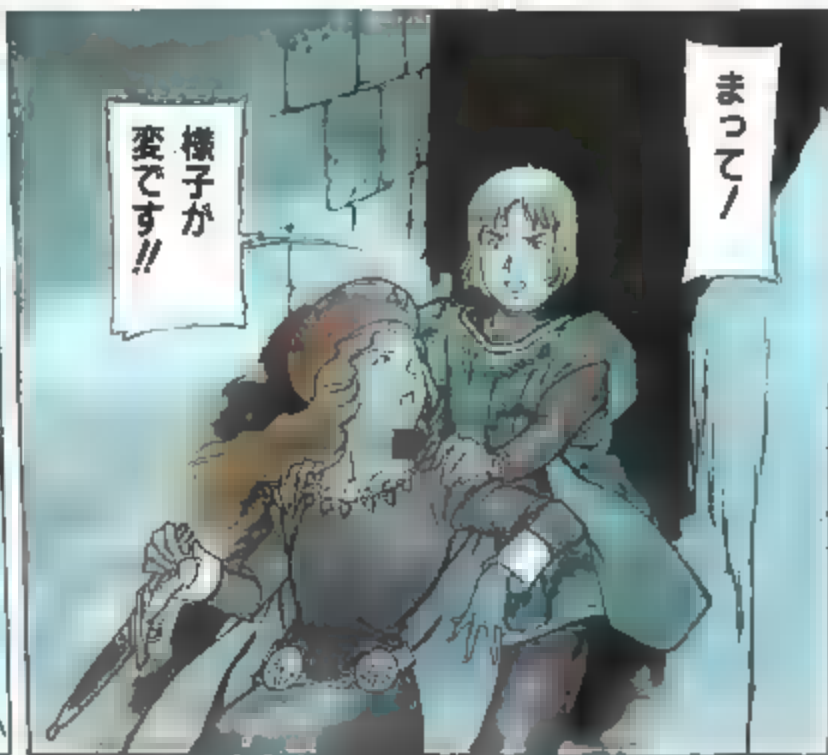
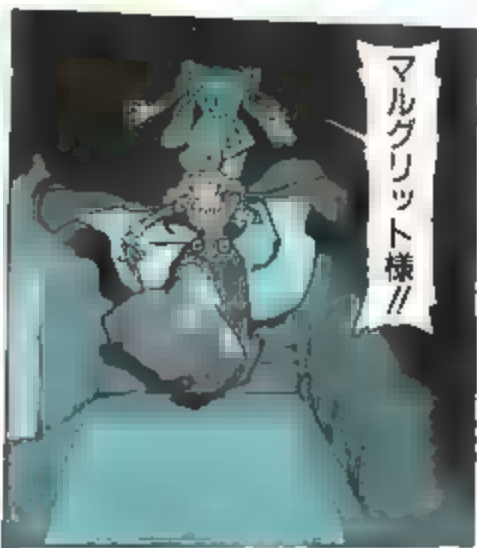
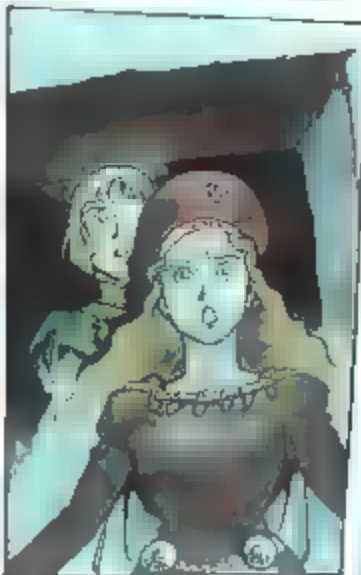
気のせいだったかしら

ウ…
ウ
ウ
ウ……

第4章

FEU DE LA PUCELLE

ジャンヌの火

マルグリット

エミール……

ああエミール！
わたしのエミール！
あなたのような方をいったいどれほど待ったことかしら！
そして
この時が来るのを待つ間がどれほどつらかったか！
一目見ただけでわかったわ
あなたこそわたしの待っていた人だって!!
わたしをこの暗い■籠から解き放ってくれる■の騎士だって!!
何度も何度も夢に見たわ
あなたを助けだしていっしょにここから逃げる日のことを!!
マルグリット様
いけません
わたしのような者とお逃げになるなんて
あなたはいずれ王位を継がれる方の妃様なのです
お逃げになったりすれば
いったいどんな面倒なことになるか…
いや!!
こんな国なんかどうなったっていいわ！
王太子妃がなによっ！
愛のない結婚生活なんて 砂でつくった花飾りだわ!!
来て！
こっちよ!!

シャルル国王が王太子と私を結婚させたのは
スコットランドを味方にしておきたかったからよ！
それだけ！
愛なんか最初からありはしないわ！
妃なんて名ばかり！
まるで人質よ！
わたしは騙されて利用されたんだわ!!
罠ー!!
まって！
様子が変です!!
何かある！ダメです今日は！
なにを言うの！イヤよいまさら!!
マルグリット様!!

ずいぶんと早いお目覚めでどこへお出かけかな?
マルグリット
なんとか言ええマルグリットオ!!
しかも勝手に伴を連れてだ
いつ 誰がおまえにそんなわがままを許した?
……
!
ほお しかもこいつはオレの剣だ
どこへやったかと思えば…
おまえが持ち出していたのか

エミール!!
うまく考えたな
うぶなマルグリットをまるめこんで手引きをさせたわけだ……
そうだな!!
そうです
だから マルグリット様は なにも…
そうだろう
ズルイおまえの やりそうな 手口だ……
そうだとも
げてえええ
泣くなマルグリット!!
おまえは 悪くない!
おまえは 騙され たんだ!
見ろ!!
こいつは 悪いヤツだ!
大嘘つきだ!!

わかっただろう
マルグリット
こいつは
こういう
やつなんだ
女のくせに男の
なりをして
人を欺く！
とんだバチ当たりの
女狐さ‼

父の周りには
こんな不潔な
ヤツ等が大勢
のさばっている！
よく
見識って
おけ！

あこがれの騎士じゃなくて
残念だったな

いやあ
そんなのいやっ!!

弱い女をいたぶり
山あこんな
小さなお城で
僅かばかりの
家来を前に空威張りを
することぐらいではありませんか!

ほざけええ…
男装の異端者めが
慈悲を乞わなければならんのはおまえの方だ！
それも今すぐ！

このオレにな!!

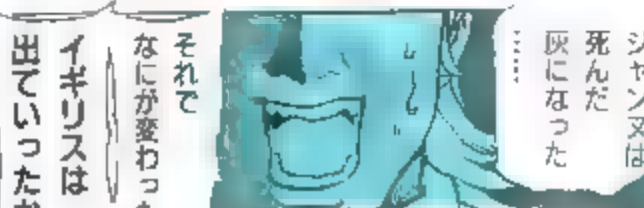
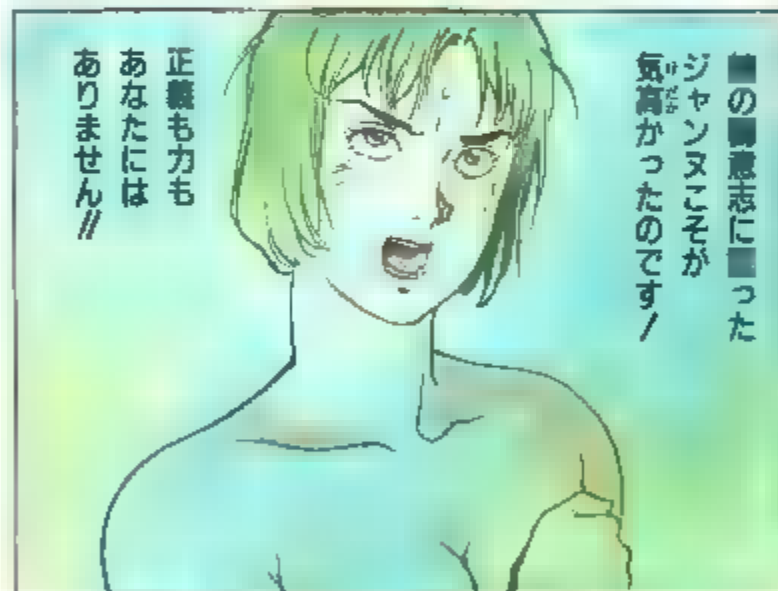
着換えだ
どちらかを選べ
男の服と女の服だ
そのままでは困るだろう好きなほうを着ろ
さあどっちにする？

素直に女に戻って女の服を着るというなら情けをかけてやろう
望むなら妾にしてやってもいいぞ
だがこのうえまだ男のふりをしたいというのなら
それほどどこまでも神の定めた掟に背きこのオレにも逆らうというこどだ
その時は…

どうした!!
早く選べ!!

ルイ様…あなたは
どうあってもわたしを試みたいのですね…

ジャンヌと共に戦っていたならとおっしゃったあの御言葉は
なんとひどい偽りだったのでしょう……
あなたもよもやジャンヌが女の服を着ることを拒みそのために火焙りにされたのを
知らないはずはないでしょうに！

無論知っているさ！
だからおまえにもそれをしてみろと言っているんだ！
ジャンヌを気取るおまえなら服と一緒に生き死にを選ぶことも真似られるだろうよ！
オレはジャンヌが好きだ！オレはたぶんジャンヌとうまくやれただろう！
ただし！
戦が上手でイギリスを憎んでいるジャンヌとならばだ！
神がかりで説教じみたジャンヌなら用はない
それよりも十万の軍勢と鋼の武器をオレは味方にして神の祝福する勝利をもぎとってやる！
ジャンヌは死んだ 灰になった……
それでなにが変わった!?
イギリスは出ていったか!?

神が正義を実現してくれるなら聖書の民はもっと幸せだったろう！
同じことだ！
力以外の何にひざまずけというんだ!!

畏れるべきです 神の御意志を
神の御意志に従ったジャンヌこそが気高かったのです！
正義も力もあなたにはありません!!

上等だああ//
殺してやるウ//

ドドスン!!
ドドスン!!

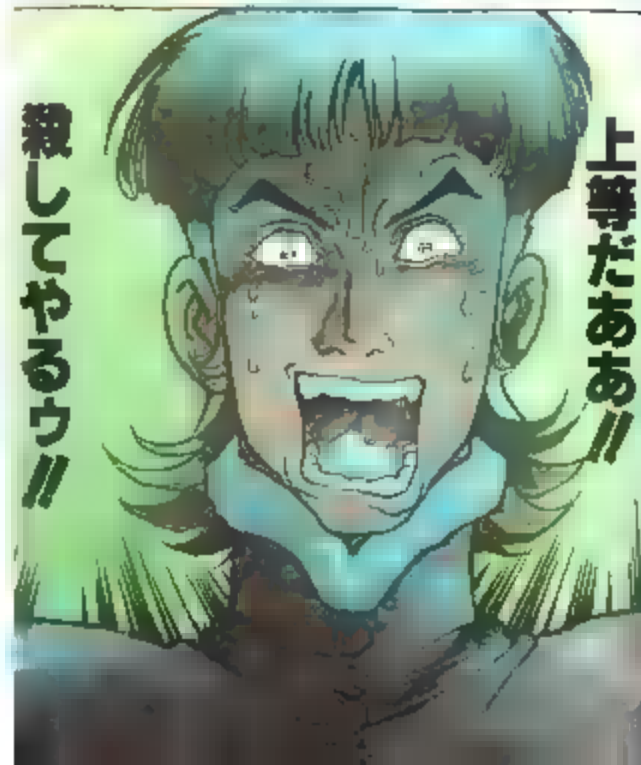
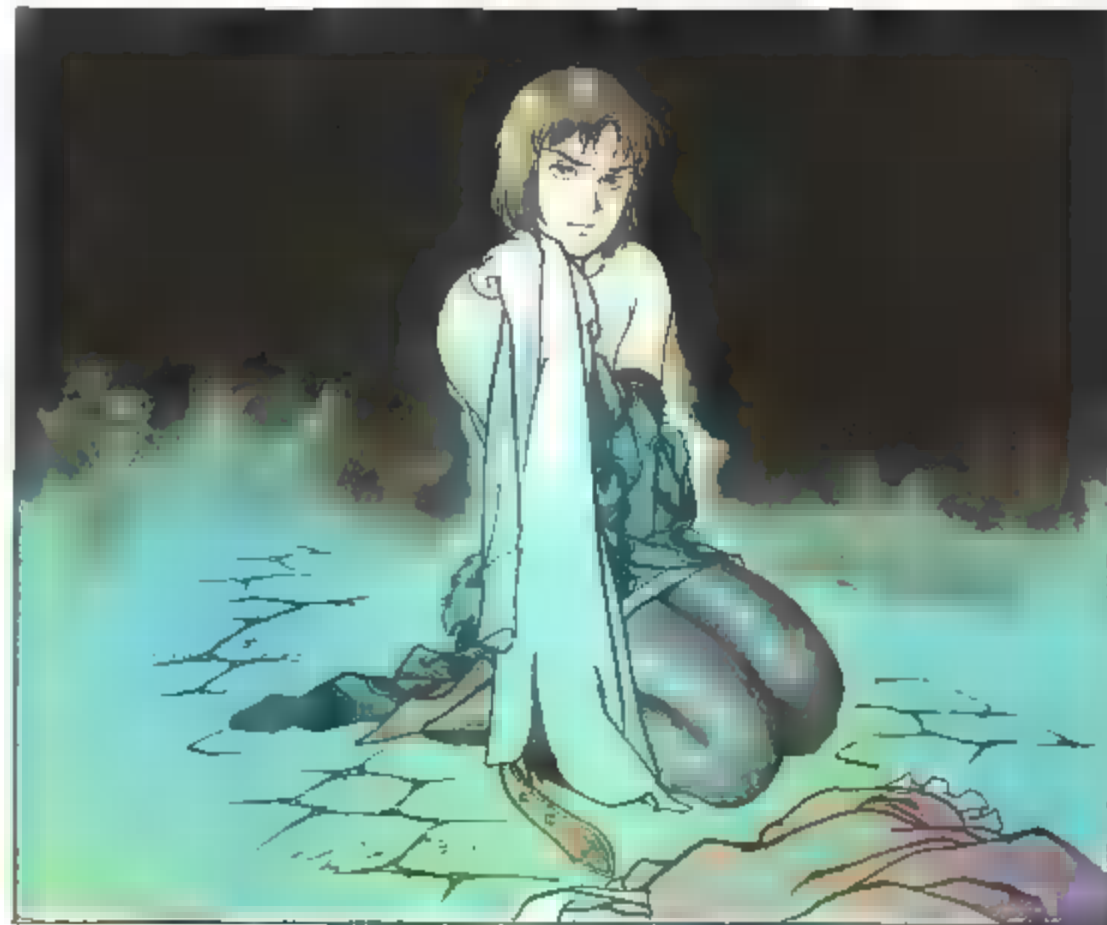
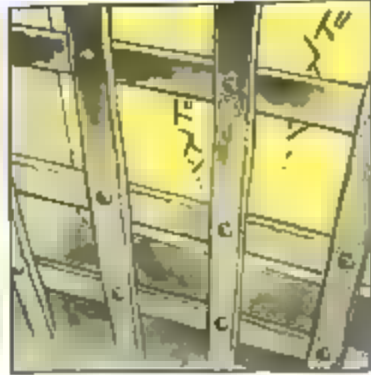
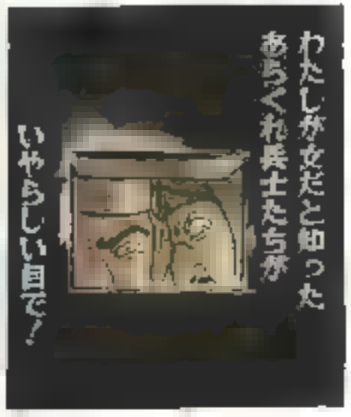
ドスン!!
ドスン!!

ドスン
ドスン
ドスン

ズズン…
ドスン…

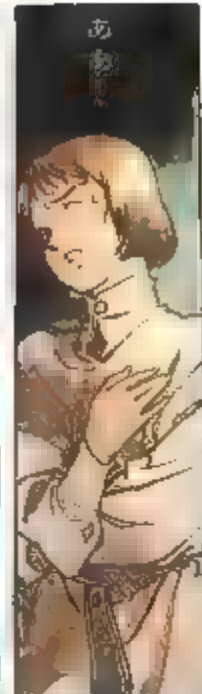
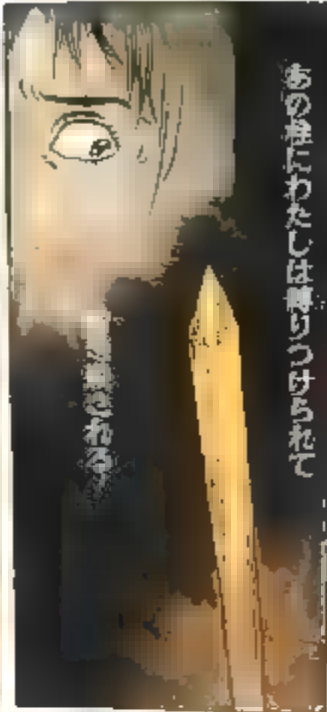
こわい……！
あの柱にわたしは縛りつけられて
される？

カタ

あ あ…

またのぞいている

わたしが女だと知った
あらくれ兵士たちが
いやらしい目で！

もしも…

男たちが扉を開けて
入って来たら

わたしは
どうすることも
できない
ああ いやだ！
いやだ いやだ!!

ジャンヌ
助けて！

どうか助けて！
——ジャンヌ!!

ジャンヌ
どうしてずっと
顕れてくれないの？

シノンでの
あの時
わたしは
なにか

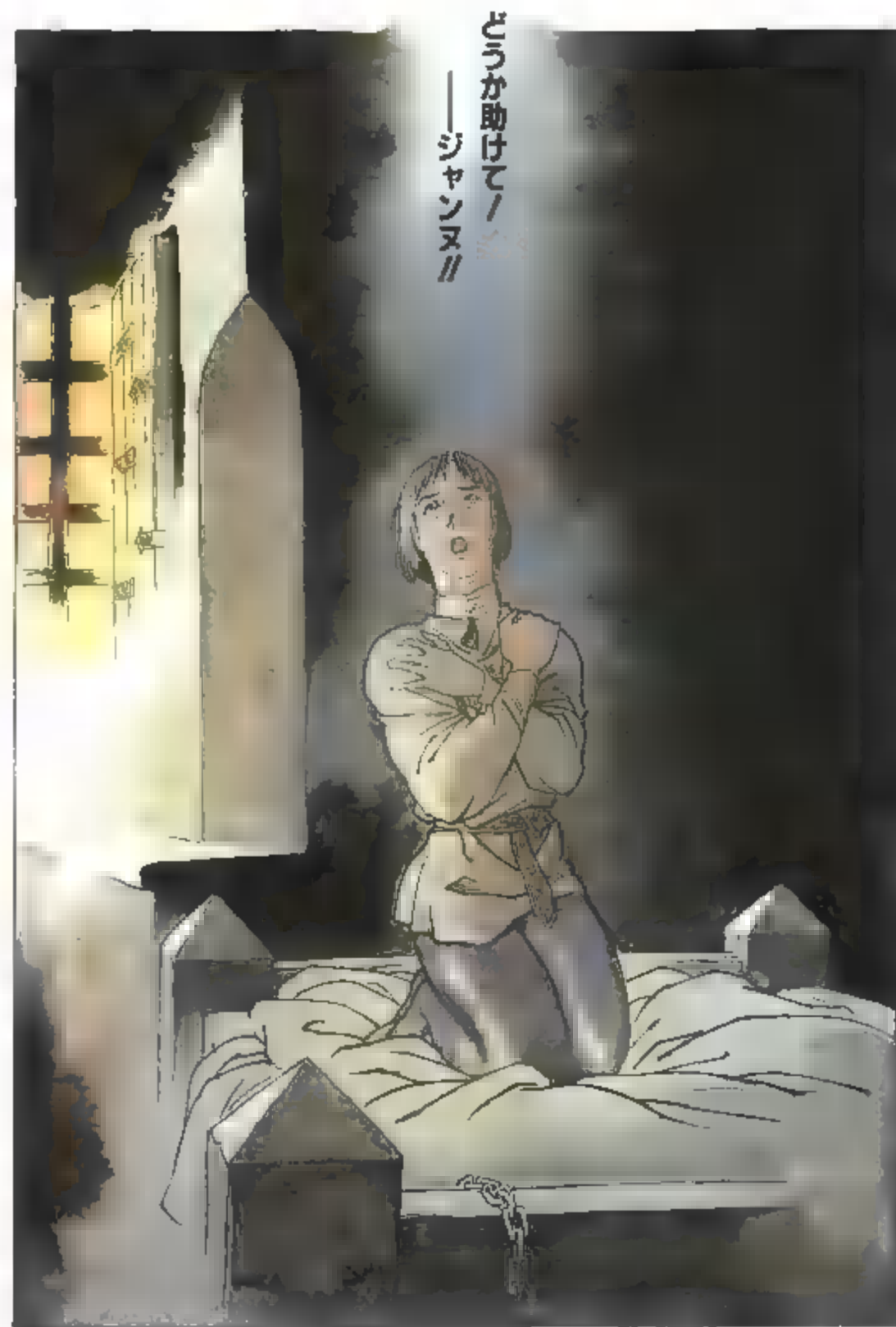
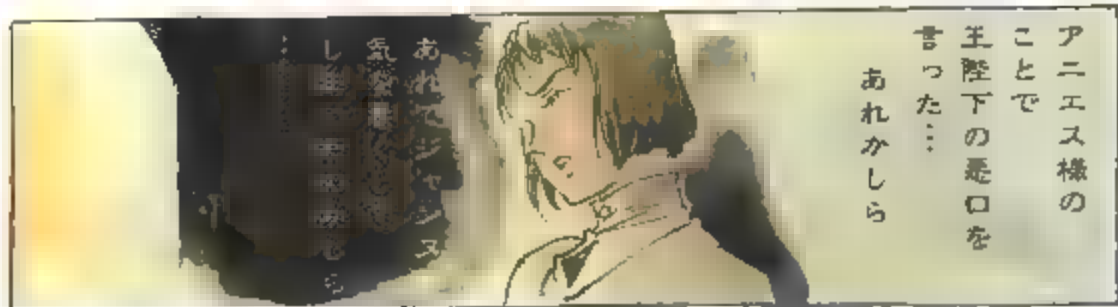
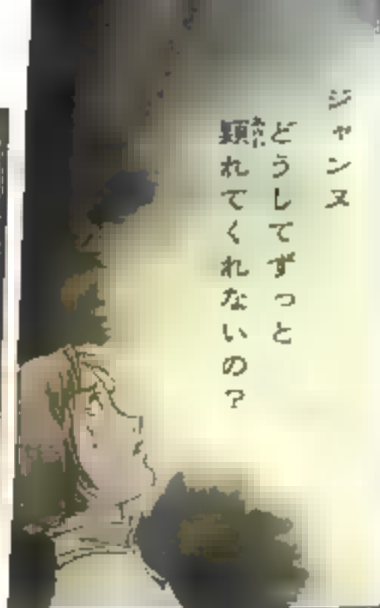
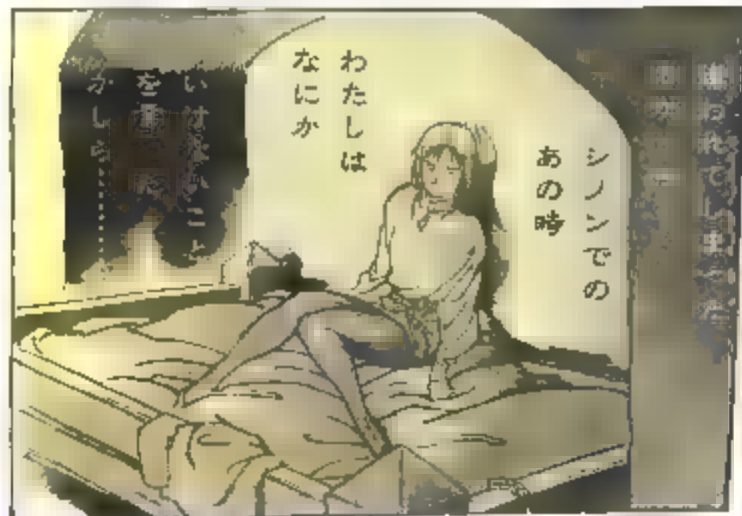
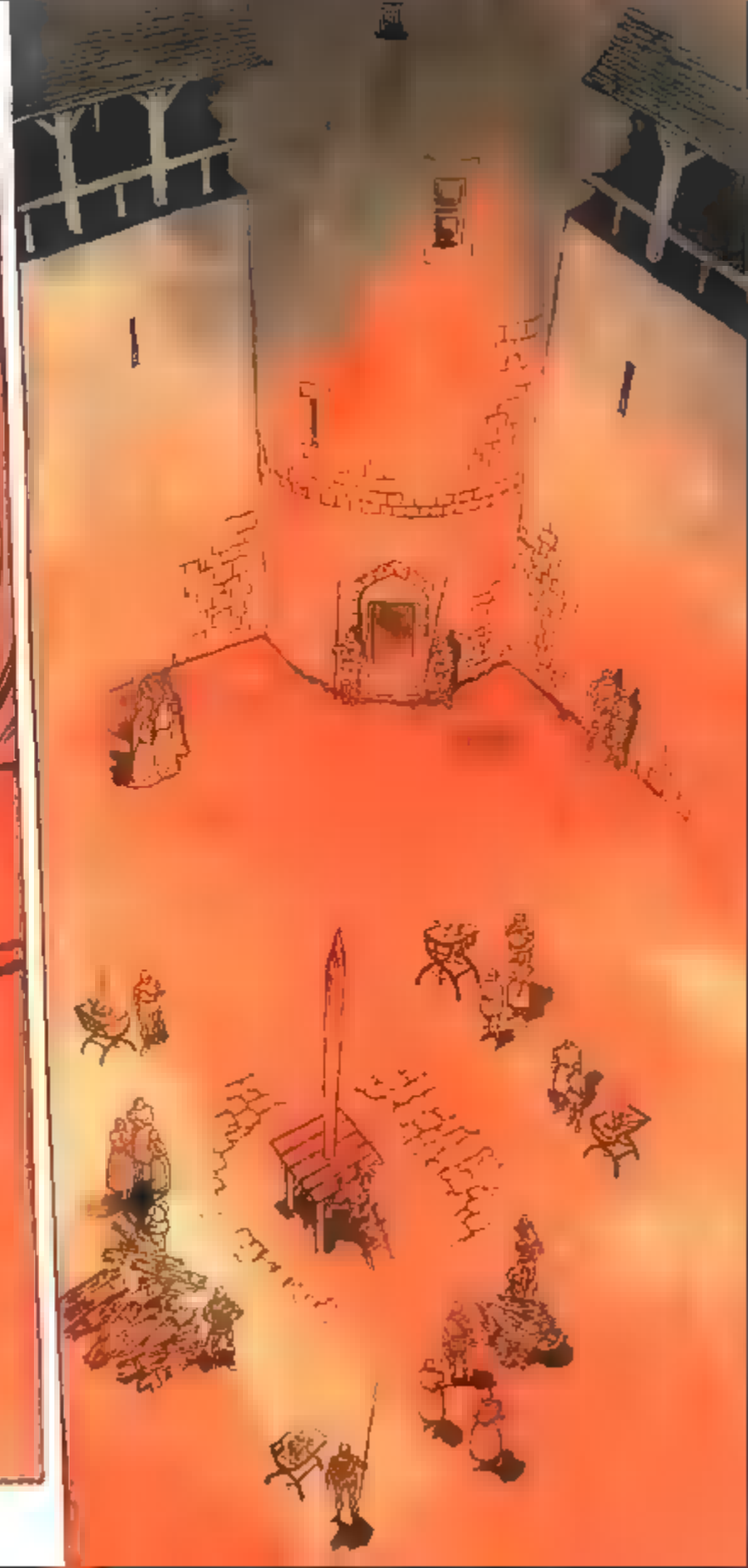
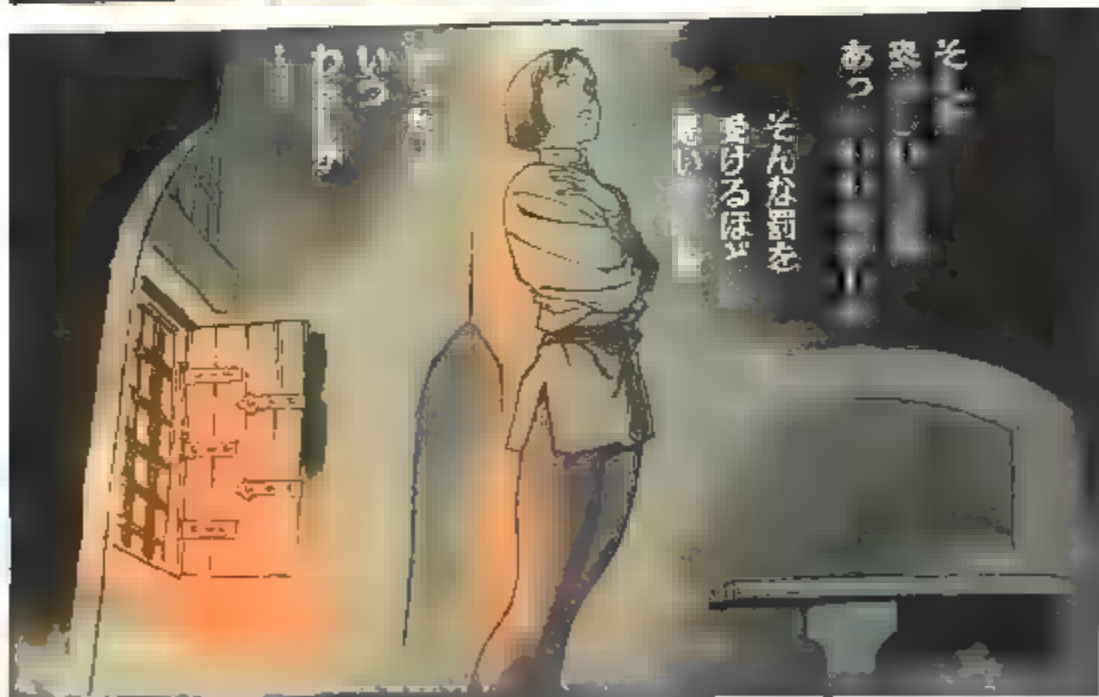
アニエス様の
ことで
王陛下の悪口を
言った…
あれかしら

だったら
ごめんなさい！
悪気じゃ
なかったの
ただ…
あなたと
お友達になった
ようなつもりで
つい気安く……

カーン

ああ！

もうだめ！
なんて恐ろしい！
しまう

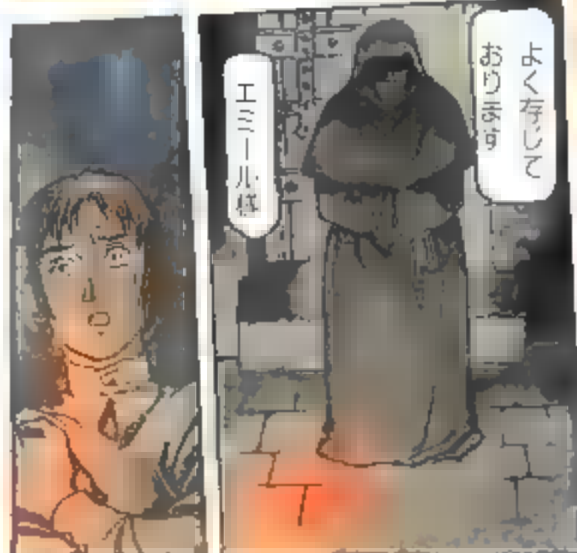
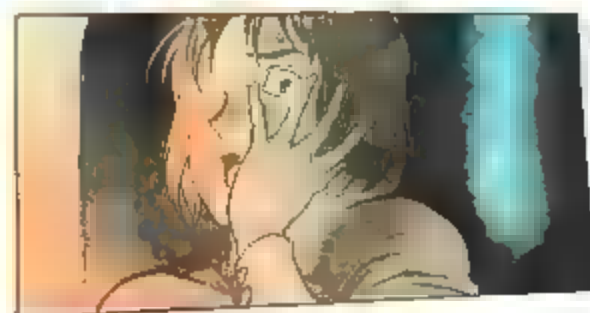
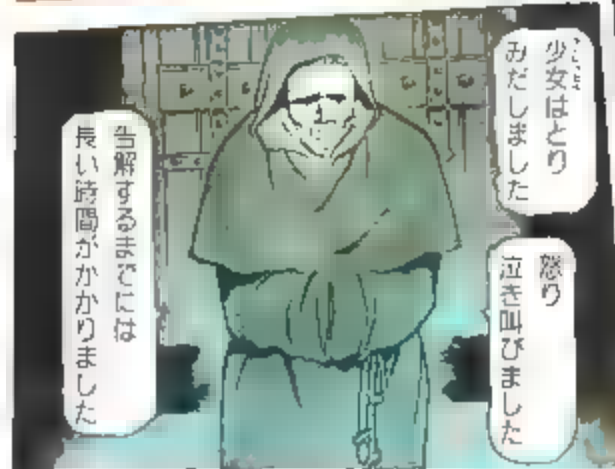
そんな罰を受けるほど

あんな人に
屈服する
くらいなら
死んだほうがまし!!
死んだほうが
ああああ
でも
エミール・ド・ボードリクール!
王太子様の
御命令により
明朝おまえを
火焙りの刑に処す!!
神の国に
容れられたければ
今宵のうちに
現世の罪を
告白して
許しを乞うて
おけ

わたくしを
覚えておいでですか?

……!?
そうです
ロッシュでお会いしました
マルタン修道士でございます

あなたに聖体を授けるよう仰せつかりました
数奇なお導きでございます

いや!!
わたしは告解なんかしない!!

いったいなにがわたしの罪だというんです?!
ただフランスと国王様のお役に立ちたかっただけ!!
王太子様こそ王に背き神様を冒瀆なさっているではありませんか!!
よく存じております
エミール様
わたしは悪いことなんかしていない!!

わたくしは十年前ルーアンで少女・ジャンヌの
告解を聞いた者なのです
ブーヴルーユ城の塔に閉じ込められていた少女に死の宣告を伝え聖体を授けました
つらい務めでした
少女はとりみだしました
怒り泣き叫びました
告解するまでには長い時間がかかりました
その姿に打たれてわたくしも祈りました
願わくは神の恩寵によってこの者が死を免がれますようにと

その日
火刑台の上で
少女・ジャンヌは十字架を
ほしがりましたから
わたしはそれを
かざしました
心の中では
ひそかに
奇蹟の訪れを願いつつ
そのうちに火がつけられ
薪の山が燃えあがるとジャンヌは
やけどをするから
さがるようにとわたしに
言ったのです

わたくしは
彼女の躰が灰に
なるまで
その場にいて
すべてを
見届けました

奇蹟は
起きませんでした

でも
わたくしは
思いました

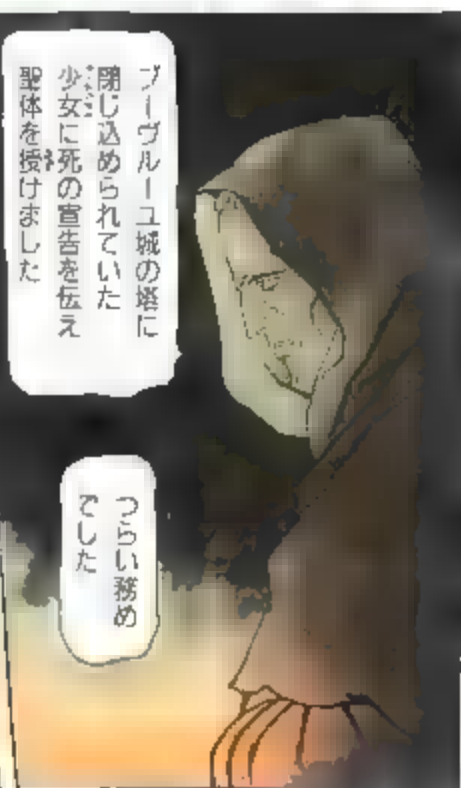
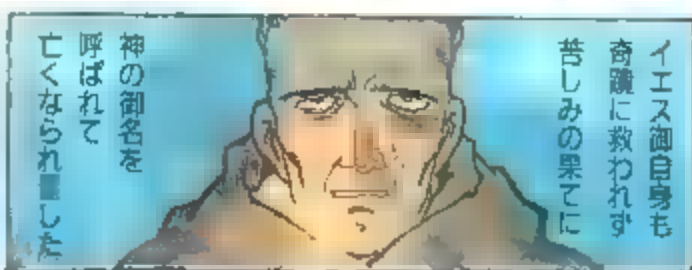
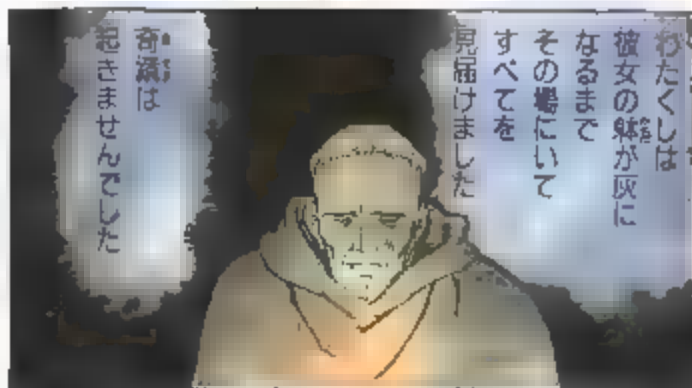
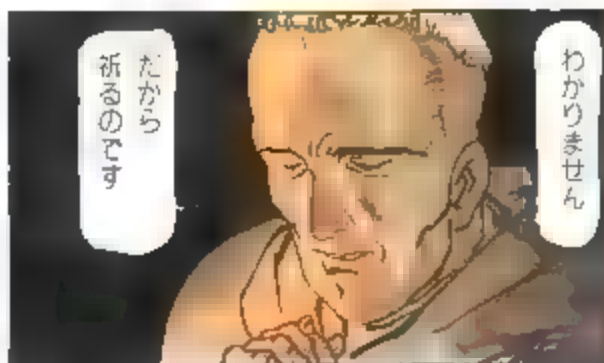
イエスの
十字架の死も
このようでは
なかったかと…

イエス御自身も
奇蹟に救われず
苦しみの果てに

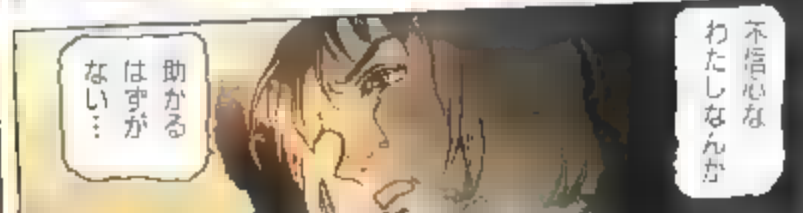
神の御名を
呼ばれて
亡くなられました

でも御存知の
ように

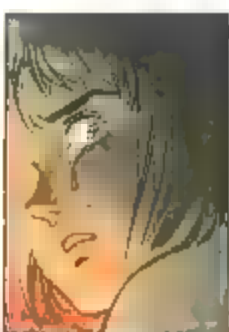
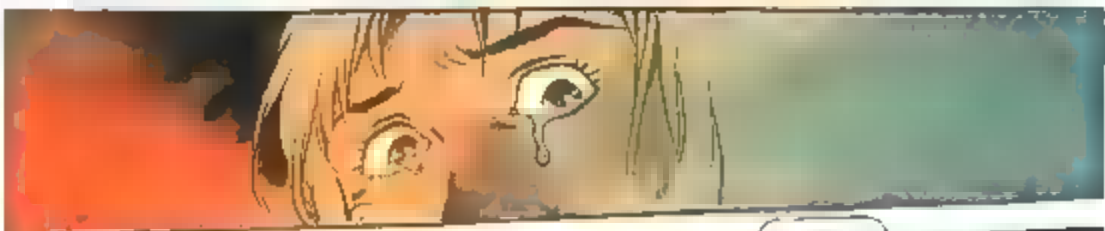
三日後に
甦られ

故郷のガリラヤへ
お帰りになられたのです

でも…わたしは死ぬのでしょうか?
わかりません
だから祈るのです

お祈りなんかしても駄目に決まってるわ! だって——
イエス様やジャンヌでさえ殺されたのだもの!
わたしなんか…

神は
信仰の深さ浅さで人を選んだりはいたしません

不信心なわたしなんか
助かるはずがない…

神の御心を推測することはできません
ただ願うのです

正直に申しましょう
わたくしも見たいのです
一度 奇蹟というものを

そして 信じたいのです
愚かしく罪深い人間の浅慮よりも神の御意志がお強いということを
人の理性が悪い欲望に屈することがいかに多くとも
いつかはその理性の正しさの支えとなる我々の力を越えた力が聖なる御意志としてこの世に示されることを
信じたいのです ……

イエス・キリストとジャンヌに祈ります あなたが救われますようにと!
だから

どうか
お気を強く…

気味の悪い
空だなああ

血の色
かなあ
それとも
火焙りの
火の色か?

どうもこりゃ
妖しい雲ゆき
だな…

さあ
歩け！

泣いてオレに許しをこえ!!

王太子様 空模様が…

ひと雨来るかもしれません 火焙りは少し…

かまわん！早く片付けてしまえ！

こいつ

登らんかこら!!

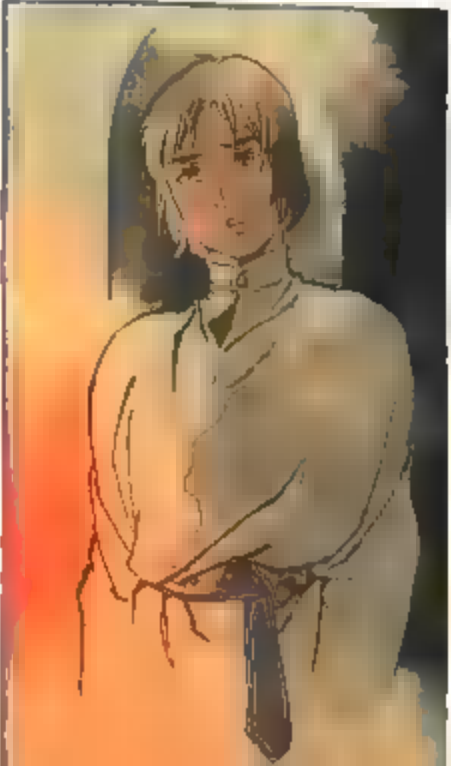
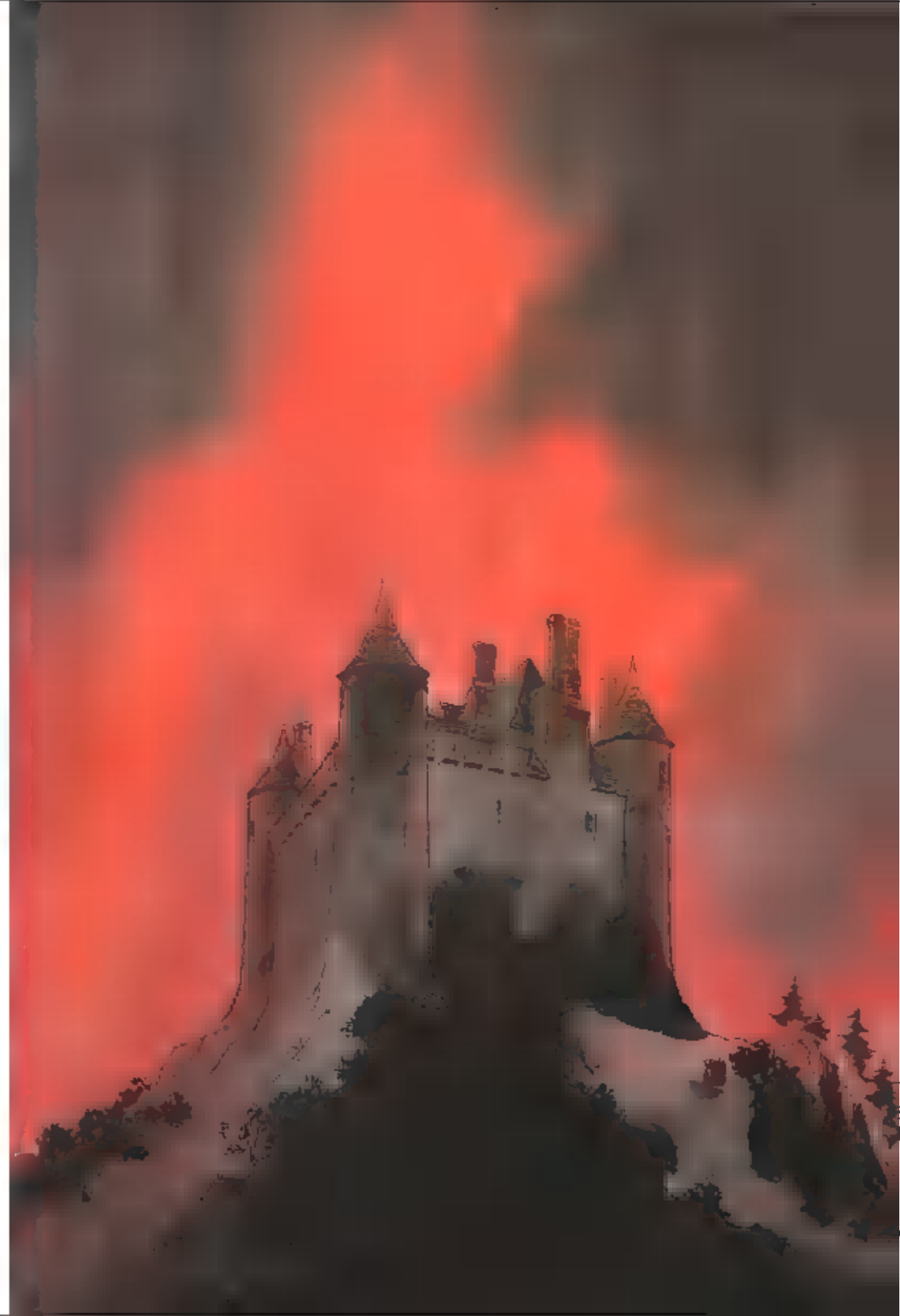
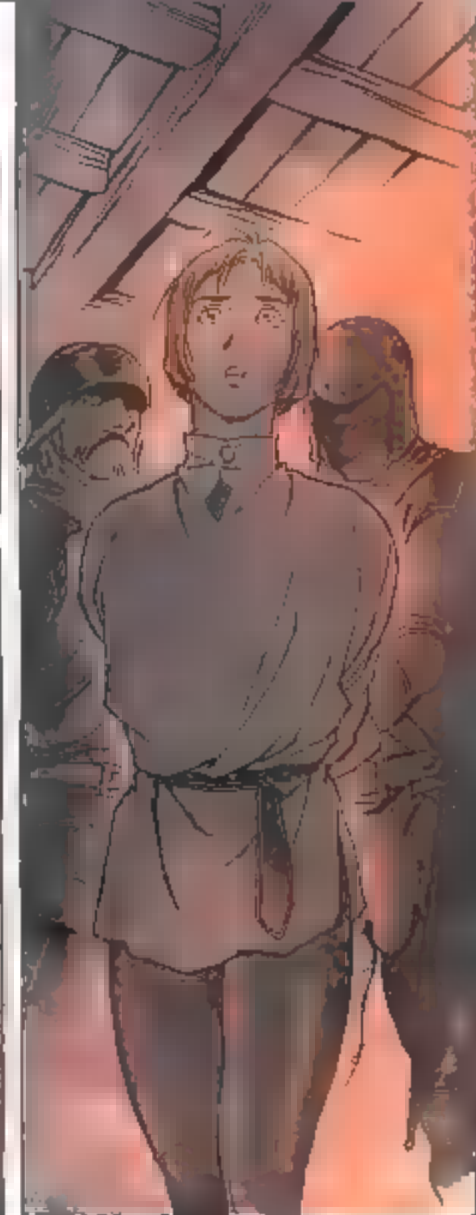
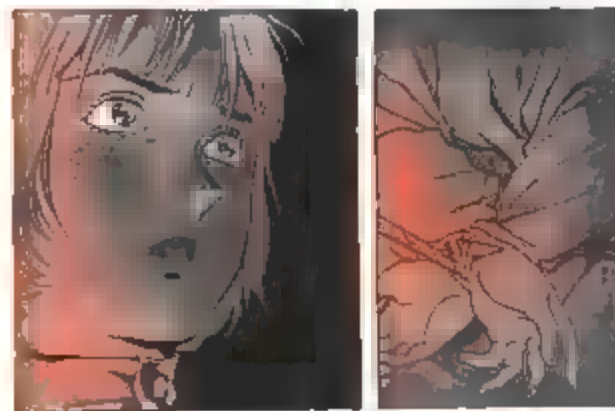
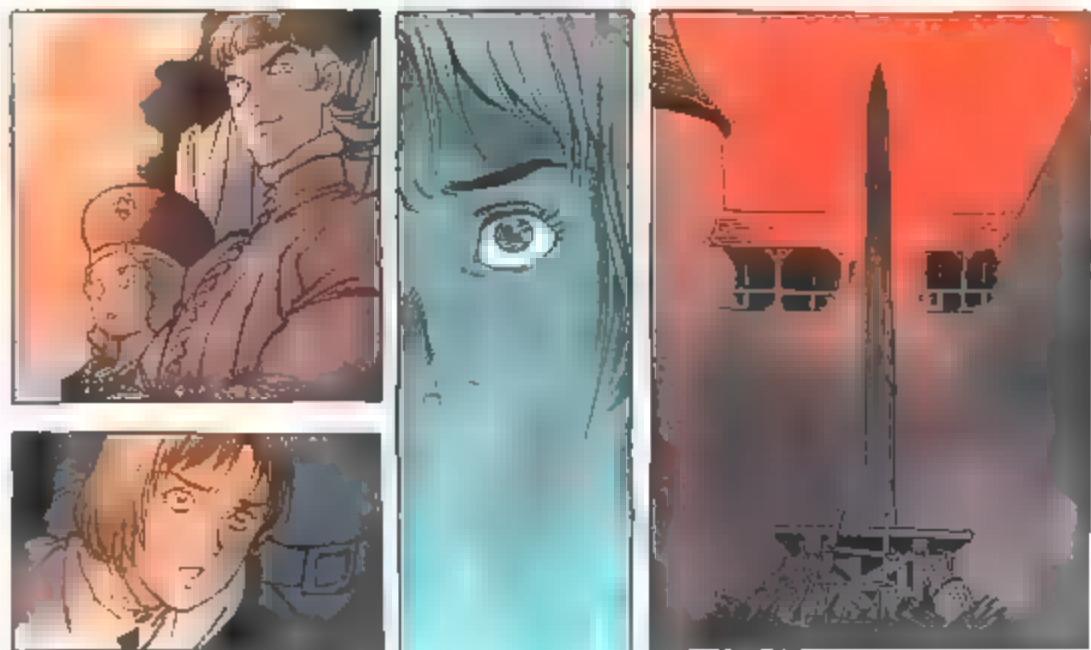
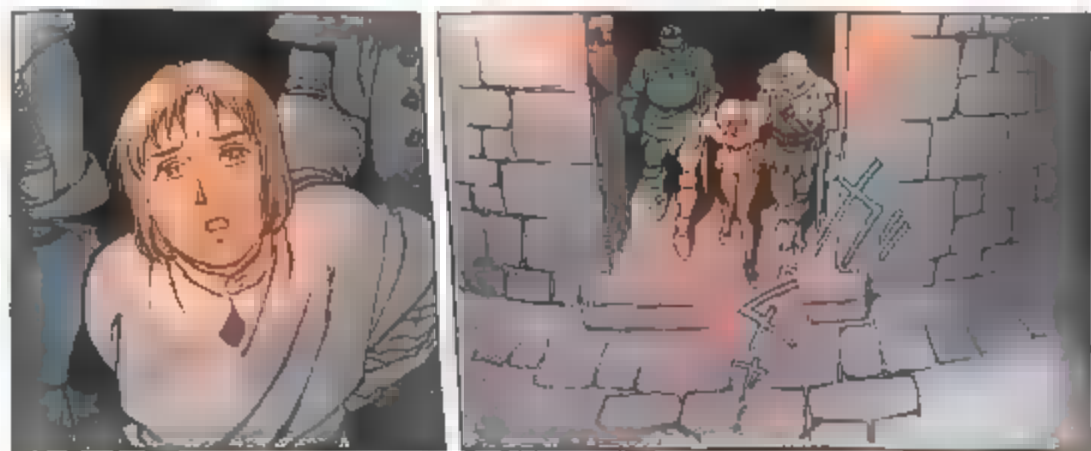
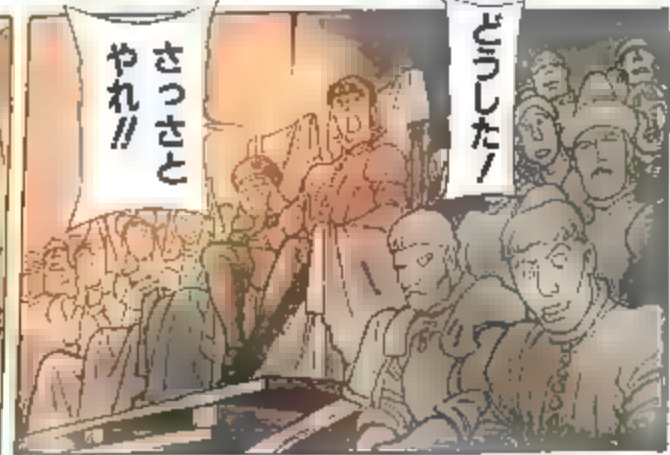
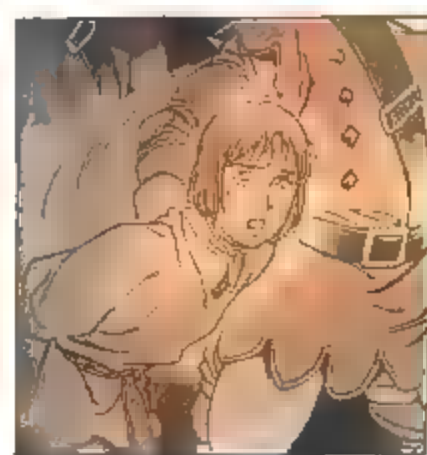
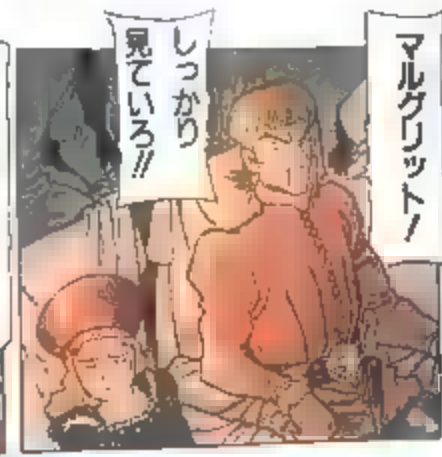
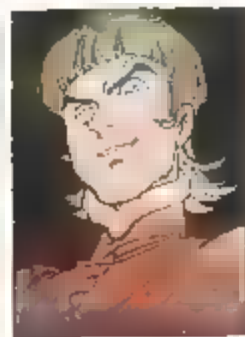
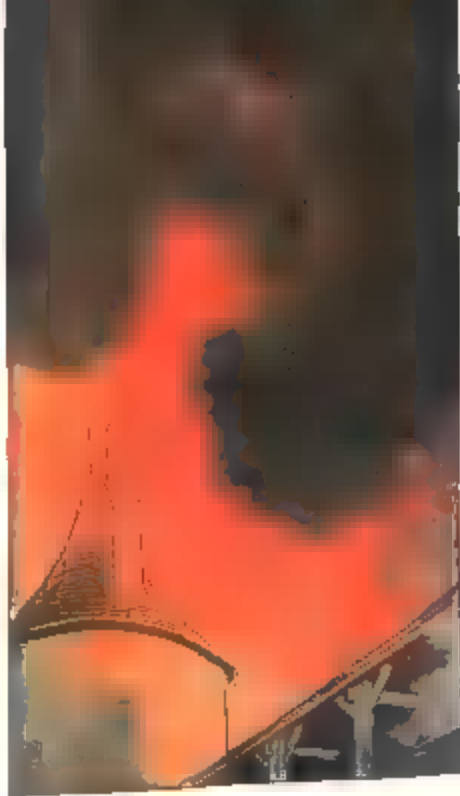
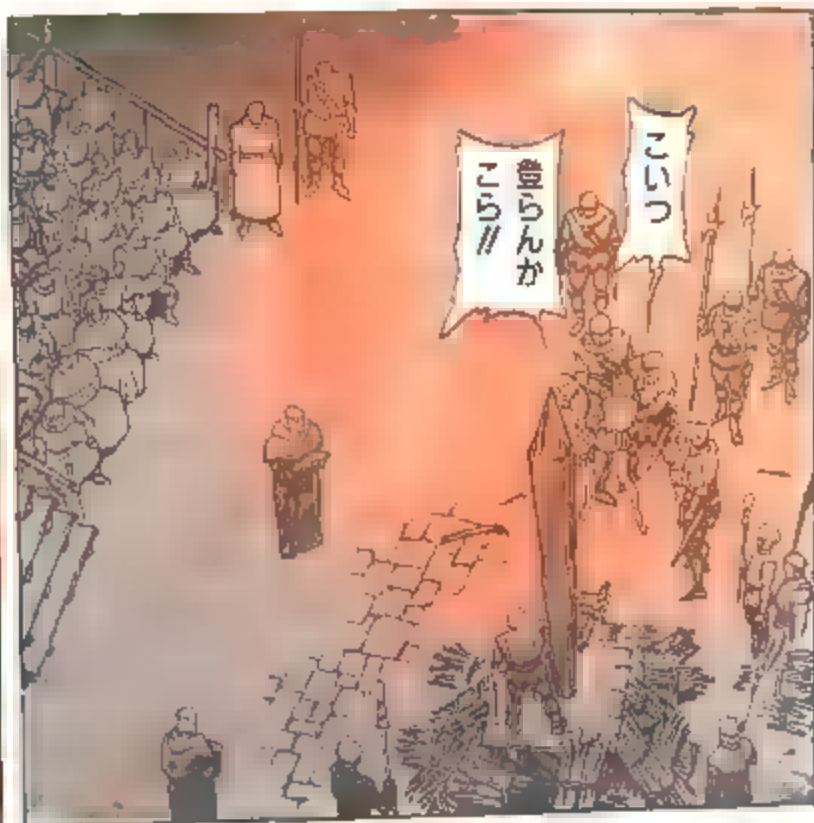
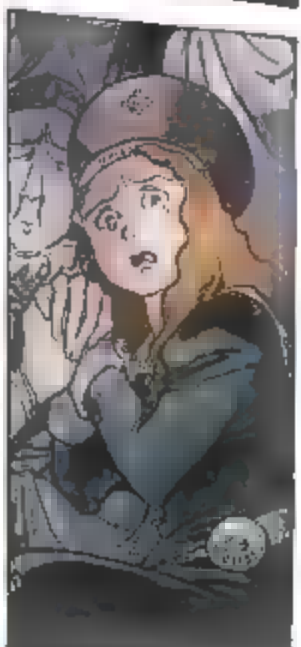
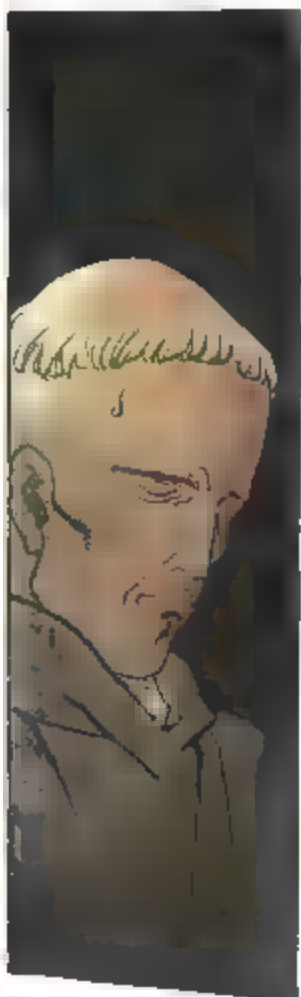
ええい

役立たずどもめ!

恐ろしいだろう!
泣きわめけ!
許してくれと言え!!

いええ!!

神や坊主にいくらすがってもだ!!
誰も助けてなんかくれない!!
ざまあみろ!!
ナマイキなメス猫め!!

オレの勝ちだ!!

皆も聞け!!
戦いはまだ終わっていないぞ!!
弱気なヤツや不吉なデマを流すヤツはオレが殺してやる!!
この国を血に沈めてでもオレは
王になってみせる!!
縛りつけろ!!

……なんだ あれは
あれが
ジャンヌか?
見たのですか?!
今のを!
ああ
見た……
……オレも見た
……見たよ…
ザァーーー

これから
どうなさいます?

メニ
会う……
その時は おまえも
いっしょに いてくれるか?
それが
よろしゅう ございます
もちろんです!
お伴を いたします!
そうか……
……

こっちを見るな！
エミール!!
……
……
くそおお！
目に滲みる雨だ!!

一四五五年 秋
パリ ノートルダム寺院

わたしには 正当な[illegible]婚で得た娘が ひとりおりました
わたしはその娘に 洗礼と堅信の秘蹟を しかるべく受けさせ
神を畏れ 教会の伝統を 敬うように育てました

良い娘でした…
わたしと夫の一の
自慢でした
それなのに…
敵の人達が
その娘を捕まえ
いわれのない罪で
恐ろしい裁判に
かけたのです！

そしてひとりぼっちの娘に
無実を訴えることも許さず
申し立てることも聞かず！
はずかしい
ずるいやり方で
娘を有罪にし
火焙りにして
殺してしまいました!!

もうなにも
めになりません
望みも
ありません
ただ
死んだ娘を
返して
もらえるなら…

あのお母さん
でも生きている間に 裁判の見直しが始まって
しかし酷いことをしたものだよ
どうあってでもジャンヌを殺したかったわけさ
イギリスと教会の連中は！
当時の判事たちも 大勢呼び出されているんだろうナア
お 来た来た
誰だ？
トーマ・ドゥ・クールセルだってよ
パリ大学のエライさんか
ジャンヌを拷問しろと言ったヤツだってサ
よくもまあ おめおめと
石ブツけてやろうか
およし！ 生タマゴのほうがいいよ
主任検事だったジャン・デスティヴェは 下水溝にはまって死んだってサ
いいきみだ
天罰だな
ピエール・コーションは？
あいつが一番悪いヤツなんだ！
大司教になれなかったのを 悔やんでいたそうだけど
十何年か前に ポックリ…
おえっ！
あれは？
ああ マルタン・ラヴニュ
あれは いいヒトだよ
最期を看取った お坊さんだ
ジャンヌの無実を 証言するそうだよ
坊さんも いろいろだな
コーションなんかとは 大ちがいだ
ああ
だいたい教会のおエラ方は 地位と名声が なによりも大事…
やれやれ…
地位と名声って いやあ…
ああ ジル・ド・レー 元帥
あの
あいつにはオドロイタ ねええ
縛り首に なったんだよナ
そう 十五年前
ジャンヌの 戦友が聞いて
なにせ 子供ばかりの 百人以上も 殺したって いうんだから
ひでええ ハナシだったナア

お
あれ！

おい！
エミリー・ド・ローレーヌ
通称ロレーヌの永遠の処女——か
フケたな！しばらく会わんうちに！
女装がよく似合うじゃないか！

※戦争は——これより二年前、一四五三年の「カスティヨンの戦い」での敗北を最後に、イギリス軍のすべては本国に退く。これにより、一三三七年より続いた英仏百年戦争は終結した。

アニエス様は
お亡くなりになられたのでしたね……
ああ 淫奔の病でな！
父には過ぎた女だったよ！
そして
マルグリット様も……

あれは気塞ぎの病気だ
しょうがない
お可哀相な方でした……

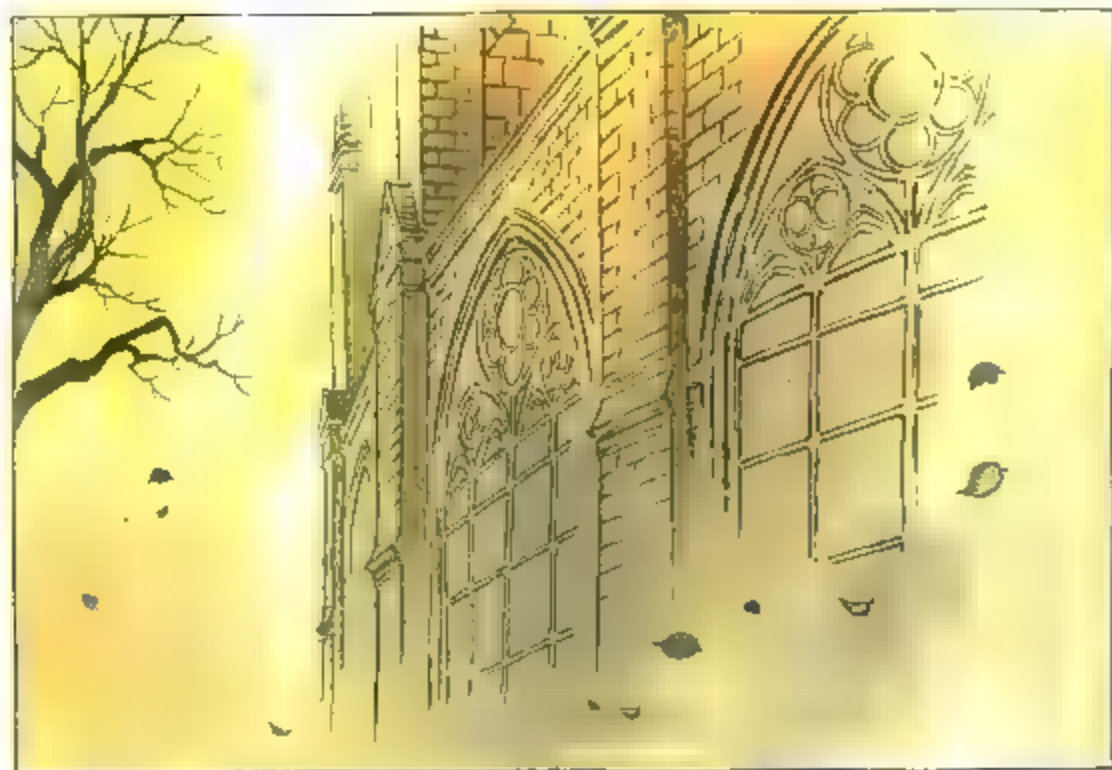
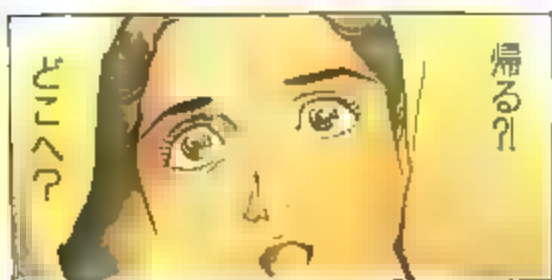
可哀相なもんか！ あれは間男をつくって
二人してくだらん詩の手紙なんぞをやりとりしていたのだぞ！
最後まで好きなことを……
？

どうした？

なんだ？
おい！
誰かいるのか!?

おい！

ありがとう
エミール
あなたのおかげで
わたしやっと
帰ることができる

帰る?!
どこへ?
ドンレミイへ?!
そう!
ドンレミイへ
帰るの!

ドン
レミイへ
……
翌年夏
裁判は結審し
ジャンヌの復権が
宣せられた。

時は大戦の狭間だった。
聖ジャンヌ・ダルクはフランス愛国主義の
象徴だった。

——しかし——